



彩の国
埼玉県

埼玉県病害虫防除所業務年報 (令和6年度)

埼玉県病害虫防除所

埼玉県病害虫防除所の沿革

年 月	概 要
昭和 27 年 7 月	植物防疫法（昭和 25 年 5 月 24 日法律第 151 号）に基づき、「植物防疫施設に関する条例」（昭和 27 年 7 月 18 日条例第 55 号）が公布され、県内 8 か所の地方事務所、北足立、入間、比企、秩父、児玉、大里、北埼玉、埼玉葛の各病害虫防除所が設置された。1 防除所当たり 1～2 人の専任技術職員が配置され、所長は地方事務所長が兼務した。
昭和 31 年 8 月	地方事務所が廃止され新たに農林事務所が設置されたことに伴い、各農林事務所に病害虫防除所が併設され、専任職員に加えて 1 防除所当たり 3～7 人の農林事務所兼務職員が配置された。なお、所長は農林事務所長が兼務した。
昭和 53 年 4 月	秩父農林事務所が廃止され秩父農林振興センターが設置されたことに伴い、秩父病害虫防除所は秩父農林振興センターに併設された。
昭和 58 年 4 月	8 か所の病害虫防除所を 1 か所に統合し、熊谷市の農業試験場（現：農業技術研究センター玉井試験場）内に「埼玉県病害虫防除所」が設置された。各農林事務所及び秩父農林振興センターには、駐在職員及び兼務職員が配置された。
平成 9 年 4 月	川越、東松山、行田の各農林事務所の廃止に伴い、新たに設置された農林振興センターに駐在職員及び兼務職員が配置された。その後、農林事務所が順次廃止され、新たに設置された農林振興センターに駐在職員及び兼務職員が配置された。
平成 17 年 4 月	職員の駐在制が廃止され本所に集約された。なお、兼務職員は引き続き各農林振興センターに配置された。
平成 22 年 4 月	組織改正により、農林総合研究センター水田研究所から肥飼料検査業務が移管された。
平成 27 年 4 月	農林総合研究センター水田農業研究所の廃止に伴い、農業技術研究センター（熊谷市須賀広）に事務所を移転した。
平成 30 年 4 月	農業技術研究センター病害虫防除対策担当との兼務になった。

<参 考>

植物防疫の施設に関する条例（昭和二十七年七月十八日 条例第五十五号）							
第一条	植物防疫法（昭和二十五年法律第百五十一号）第三十二条第二項の規定による病害虫防除所の位置、名称及び管轄区域並びに第三十三条第一項の規定による病害虫防除員を置く区域は、この条例の定めるところによる。						
第二条	病害虫防除所の名称、位置及び管轄区域は、次のとおりとする。						
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>名 称</th> <th>位 置</th> <th>管 轄 区 域</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>埼玉県病害虫防除所</td> <td>熊 谷 市</td> <td>埼 玉 県</td> </tr> </tbody> </table>	名 称	位 置	管 轄 区 域	埼玉県病害虫防除所	熊 谷 市	埼 玉 県
名 称	位 置	管 轄 区 域					
埼玉県病害虫防除所	熊 谷 市	埼 玉 県					
第三条	病害虫防除員を置く区域は、市町村の区域とする。						
第四条	この条例施行に関し必要な事項は、知事が定める。						

目 次

1 埼玉県病害虫防除所の概要

(1) 名称及び所在地	1
(2) 病害虫防除所の業務	1
(3) 組織体制	2
(4) 職員及び事務分担	2
(5) 病害虫防除員等の設置	3

2 病害虫発生予察

(1) 対象作物及び有害動植物	4
(2) 予察ほ場及び巡回調査地域等	
ア 県予察ほ場	8
イ 予察灯設置ほ場	8
ウ 巡回調査地域	9
エ フェロモントラップ等調査	10
(3) 令和6年度の主な病害虫の発生とその防除対策	
ア 主要病害虫の発生と防除対策の概要	11
イ 令和6年度病害虫発生程度別及び防除面積	23
(4) 令和6年度の病害虫発生予察情報等の発信	
ア 病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況	28
イ 発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病害虫発生現況報告等の外部への提供	29
ウ 発生予察ツールを用いた発生消長予測情報の提供	30

3 病害虫防除指導

(1) 病害虫防除手法等に関する相談	31
(2) 無人ヘリコプター等による空中散布等の防除指導	31
(3) 県内市町村の病害虫防除協議会等における指導	31
(4) 農薬展示ほ設置等に関する指導	31
(5) 研修会等の指導	32
(6) 防除対策資料等の作成	33

4 侵入警戒有害動植物の侵入調査

(1) フェロモントラップ調査	34
(2) 目視調査	34
(3) 新規病害虫まん延防止対策調査結果	35

5 農薬安全使用対策

- (1) 農薬危被害防止対策 3 6
- (2) 農薬販売者の届出店舗数及び立入検査結果 3 6

6 病害虫関係資料

- (1) 令和6年度発表の病害虫発生予察注意報等
 - ア 注意報（第1号～第8号） 3 8
 - イ 特殊報（トマトキバガ、チュウゴクアミガサハゴロモ） 6 3
 - ウ 病害虫防除情報（麦類赤かび病、イネ縞葉枯病、チャノミドリヒメヨコバイ） 6 7
- (2) 病害虫発生予察調査等結果
 - ア 水稲・麦
 - (ア) フタオビコヤガ(イネアオムシ) のフェロモントラップ調査（4～9月） 7 5
 - (イ) イネカメムシの予察灯誘殺消長（6～9月、多誘殺地点のみ） 7 6
 - (ウ) 麦類赤かび病孢子飛散等好適条件出現状況（3～4月） 7 9
 - (エ) 麦ほ場におけるウンカ・ヨコバイ類の生息密度調査（5月） 8 0
 - (オ) 水稲予察灯調査（5～9月） 8 1
 - (カ) いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（BLASTAM）（5～9月） 8 6
 - (キ) トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数（5～9月） 8 8
 - (ク) スクミリングガイの被害状況調査（6～7月） 8 9
 - (ケ) 水稲観察地点調査（6～9月） 9 0
 - (コ) イネツトムシ発育予測（7月） 9 2
 - (サ) フタオビコヤガ（イネアオムシ）発育予測（7月） 9 2
 - (シ) いもち病発生状況調査結果（7月） 9 3
 - (ス) 水稲の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果（7月） 9 4
 - (セ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果（2月） 9 5
 - (ソ) イネカメムシ越冬調査結果（11月～3月） 9 7
 - (タ) 農業技術研究センター 県予察ほ場（玉井試験場）調査結果（6～9月） 1 0 0
 - イ 野菜等
 - (ア) ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査（4～11月） 1 0 2
 - (イ) オオタバコガのフェロモントラップ調査（4～11月） 1 0 2
 - (ウ) シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査（4～11月） 1 0 3
 - ウ 果樹
 - (ア) ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査（3～10月） 1 0 3
 - (イ) 果樹カメムシの予察灯調査（4～10月） 1 0 4
 - (ウ) 果樹カメムシのフェロモントラップ調査（4～10月） 1 0 5
 - (エ) 果樹カメムシ類の越冬密度調査結果（3月） 1 0 6
 - エ 茶

(ア) チャハマキのフェロモントラップ調査 (4~11月)	108
(イ) チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査 (4~11月)	108
(ウ) チャノホソガのフェロモントラップ調査 (4~11月)	108
(エ) 茶業研究所 県予察ほ場調査結果 (4~3月)	109

(3) その他

ア 令和5年度熊谷地方気象台の気象観測データ	111
イ 過去の病虫害発生予察警報、注意報、特殊報発表状況	112

7 学会・研究会等における成果の公表

(1) 日本応用動物昆虫学会	116
(2) 関東東山病虫害研究会	116
(3) その他、病虫害に関する研究会及び検討会	116

8 肥料検査の概要

(1) 検査	117
(2) 登録及び届出	121
(3) 調査事業等	
ア 肥料生産量調査	124
イ 肥料流通量調査	127
(4) 畜政推進事業	129

9 飼料検査の概要

(1) 検査	130
(2) 調査事業	133

1 埼玉県病害虫防除所の概要

(1) 名称及び所在地

名 称	位 置	電 話 番 号	管轄区域
埼玉県病害虫防除所 (埼玉県農業技術研究センター) 病害虫防除対策担当	〒360-0102 熊谷市須賀広784 埼玉県農業技術研究センター内	電話:048-539-0661 (病害虫関係) 048-539-0662 (肥飼料関係) F A X:048-539-0663	埼 玉 県

(2) 病害虫防除所の業務

ア 病害虫発生予察

- (ア) 主要 16 農作物の 176 病害虫発生予察調査の実施
- (イ) 病害虫発生予察会議の開催及び発生予報の作成
- (ウ) 警報、注意報、特殊報等の発表
- (エ) ホームページによる情報発信

イ 病害虫防除対策

- (ア) 検疫病害虫侵入リスク管理対策
- (イ) 重要害虫の防除対策
- (ウ) 新規病害虫のまん延防止対策
- (エ) 病害虫診断と防除指導
- (オ) ホームページ、SNS 等による情報発信
- (カ) 無人ヘリコプターによる空中散布の防除指導
- (キ) 病害虫や農薬に関する相談への対応
- (ク) 特別栽培農産物の認証への協力

ウ 農薬安全使用対策

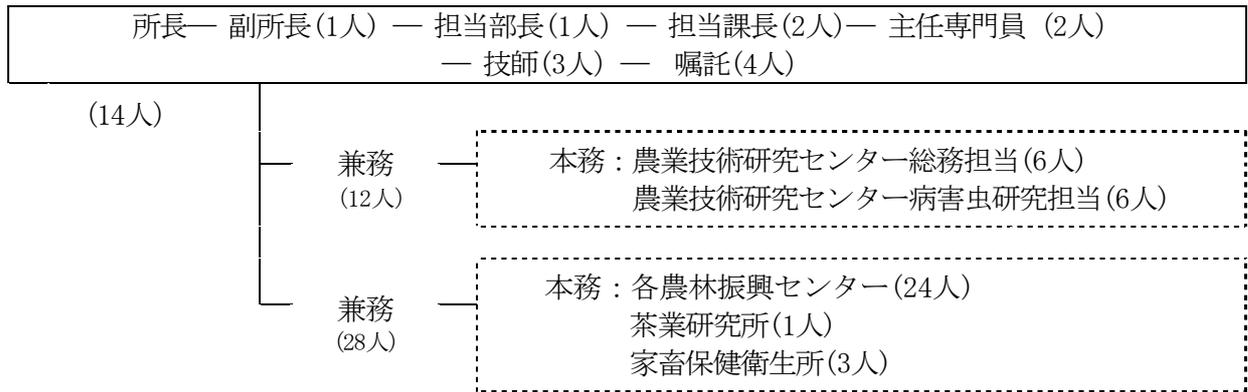
- (ア) 農薬適正使用対策の推進
- (イ) 農薬取締法に基づく農薬販売届の受理及び販売店の立入検査、指導
- (ウ) 農薬取締法に基づく指導

エ 肥飼料検査業務

- (ア) 肥料の品質の確保等に関する法律に基づく肥料の検査及び指導
- (イ) 肥料の品質の確保等に関する法律に基づく肥料の登録及び届出の受理
- (ウ) 肥料生産量の調査
- (エ) 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律に基づく飼料の検査
- (オ) 飼料の品質及び安全性の調査

(3) 組織体制

◎農業技術研究センター病虫害防除対策担当が防除所（本所）を兼務



(4) 職員及び事務分担

令和6年度病虫害防除所（農技研病虫害防除対策担当）職員事務分担

職名	氏名	担当作物等	担当農林
所長	原 弘信	所内(担当内)総括	
副所長	酒井和彦	所内(担当内)総括補佐・予算の総括	東松山
担当部長	池田順子	肥飼料検査・指導	
担当課長	川井明子	花き・野菜	本庄・大里
担当課長	横山素之	肥飼料検査・指導	
主任専門員	江森 孝	農薬取締法に関する事務・予察等に関する事務	
主任専門員	大宅秀史	普通作物	加須・秩父
技 師	松本はるか	野菜・果樹	
技 師	高橋 諒	特産・普通作物	さいたま・川越
技 師	大野泰紀	野菜・果樹	春日部
嘱 託 (会計年度任用)	西 玲子	肥飼料検査事業の補助	
嘱 託 (会計年度任用)	福井朋子	発生予察事業・農薬取締法関係事務の補助	
嘱 託 (会計年度任用)	柄本利道	発生予察事業の補助 肥飼料検査事業の補助	
嘱 託 (会計年度任用)	島崎祐子	発生予察事業の補助	

(5) 病虫害防除員等の設置

ア 病虫害防除員の設置

植物防疫法第 33 条第 1 項の規定に基づき、病虫害防除員を 16 人（農業協同組合職員 12 人、農業者 4 人）に委嘱した。

病虫害防除員は、病虫害防除所の地域担当職員と連携して、次に掲げる項目について業務を実施した。

- (ア) 病虫害発生状況の把握及び報告
- (イ) 病虫害発生状況に関する情報提供と防除指導
- (ウ) 農薬の安全使用指導
- (エ) その他、植物防疫事業に関する指導及び協力

イ 病虫害防除協力員の設置

病虫害発生予察事業に係る情報網の充実を図るため、病虫害防除員に加えて、病虫害防除協力員として農業共済組合職員 10 人に協力を依頼した。

病虫害防除協力員は病虫害防除所の地域担当職員と連携して、病虫害の発生動向の把握に努めた。

2 病虫害発生予察

農業生産の安定と生産性の向上を図るとともに、高品質で安全・安心な農産物を生産するため、主要 16 作物に被害を与える 176 病虫害の発消長や農作物の生育状況等を調査した。これらの調査結果と病虫害の生態、気象の経過と予報等を基に、病虫害の発生時期や発生量を予察し、生産者を始め農業団体や市町村、関係機関等に情報を提供し、病虫害の的確な防除を推進した。

(1) 対象作物及び有害動植物

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
普通作物	水 稲	いもち病、紋枯病、白葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌病、ごま葉枯病、縞葉枯病、稲こうじ病、ニカメイガ、セジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、イネドロオイムシ、斑点米カメムシ類（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ、ホソハリカメムシトゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタオビコヤガ、コブノメイガ、イネミズゾウムシ	イチモンジセセリ（イネツトムシ）、スクミリンゴガイ
	麦	うどんこ病、赤かび病	黒穂病類（裸黒穂病、なまぐさ黒穂病）、黒節病 アブラムシ類（ムギヒゲナガアブラムシ、ムギクビレアブラムシ）、ムギダニ、シロトビムシ類
	小 麦	さび病類（赤さび病）	縞萎縮病
	大 麦	さび病類（黄さび病、小さび病、黒さび病）	縞萎縮病、斑葉病
	かんしょ	ナカジロシタバ、ハスモンヨトウ	つる割病、立枯病、基腐病 イモキバガ（イモコガ）、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
普通作物	大豆	紫斑病、アブラムシ類（ダイズアブラムシ）、ハスモンヨトウ、マメシンクイガ、吸実性カメムシ類（アオクサカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタスジヒメハムシ	ウイルス病、立枯性病害、葉焼病、べと病、茎疫病 コガネムシ類（アカビロウドコガネ、アオドウガネ、ドウガネブイブイ、オオクロコガネ、ヒメコガネ、マメコガネ）、食葉性チョウ目幼虫、シロイチモジマダラメイガ、ダイズサヤタマバエ、ウコンノメイガ
果樹等作物	なし	黒斑病、黒星病、赤星病、シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、ハダニ類（カンザワハダニ、ミカンハダニ、ナミハダニ、リンゴハダニ）、カイガラムシ類（クワコナカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）、アブラムシ類（ナシアブラムシ、ワタアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ）、果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）	うどんこ病、輪紋病 ニセナシサビダニ
	茶	炭疽病、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、ハダニ類（カンザワハダニ）、アザミウマ類（チャノキイロアザミウマ）、カイガラムシ類（クワシロカイガラムシ）、チャトゲコナジラミ	もち病、輪斑病 カメムシ類（ツマグロアオカスミカメ）、ヨモギエダシヤク、ナガチャコガネ

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜	トマト	疫病、灰色かび病、葉かび病、黄化葉巻病、うどんこ病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ）オオタバコガ、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハスモンヨトウ	萎ちょう病類、青枯病、 ハモグリバエ類、
	なす	うどんこ病、灰色かび病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、オオタバコガ、ハスモンヨトウ、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、チューリップヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ）、 ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）	褐紋病、褐色腐敗病、半身萎ちょう病、青枯病、 ハモグリバエ類、ホコリダニ類
	きゅうり	べと病、炭疽病、うどんこ病、斑点細菌病、灰色かび病、褐斑病 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 ハダニ類（ナミハダニ）、 アブラムシ類（ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ）、ハスモンヨトウ	モザイク病、菌核病、黄化えそ病、退緑黄化病、 ハモグリバエ類、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜	ブロッコリー	コナガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ	黒腐病、べと病、軟腐病、花蕾腐敗病、黒斑細菌病、黒すす病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハイマダラノメイガ
	ねぎ	さび病、黒斑病、べと病 ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類（ネギアブラムシ、ワタアブラムシ）、ネギハモグリバエ、アザミウマ類（ネギアザミウマ）、ネギコガ	萎縮病、小菌核腐敗病、軟腐病、白絹病、黒腐菌核病
	さといも	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハスモンヨトウ	汚斑病、疫病、ハダニ類（カンザワハダニ）
	ほうれんそう	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハスモンヨトウ	べと病、立枯病、シロオビノメイガ、アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ）、ケナガコナダニ、
	いちご	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、ハスモンヨトウ、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）、アブラムシ類（ワタアブラムシ、イチゴネアブラムシ）、ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、オオタバコガ	萎黄病、輪斑病、ホコリダニ類、
小計	16 作物、104 病虫害	16 作物、72 病虫害	
合計	16 作物、176 病虫害		

(注1) 「国の指定有害動植物」とは、国が指定有害動植物発生予察事業計画で定めた発生予察事業の対象病虫害。

(注2) 「県の有害動植物」とは、埼玉県が国と協議して設定した発生予察事業の調査対象病虫害。

(2) 予察ほ場及び巡回調査地域等

ア 県予察ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
	麦	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
果樹特産	なし	1	久喜市六万部（農業技術研究センター久喜試験場）
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
野 菜	トマト	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	きゅうり	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	いちご	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
計		7	

イ 予察灯設置ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻	6	川越市南田島、川島町上八ツ林 本庄市児玉町吉田林、熊谷市玉井、加須市大越、春日部市樋籠
果樹特産	な し	3	上里町長浜、春日部市内牧、久喜市六万部
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
計		10	

(注) () 書きのある予察灯は、() 内の機関が調査している予察ほ場である。

ウ 巡回調査地域

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻 (早植)	8	川越市小中居、毛呂山町箕和田、吉見町西吉見、 熊谷市中曾根、加須市麦倉、加須市大越 春日部市樋籠、幸手市神扇
	水 稻 (普通植)	6	坂戸市横沼、川島町曲師、嵐山町吉田、 本庄市児玉町吉田林、美里町小茂田、吉川市中井
	麦 (大麦)	3	川島町東部、加須市大越、白岡市太田新井
	麦 (小麦)	8	川越市古谷上、坂戸市片柳、川島町東部、 本庄市児玉町吉田林、熊谷市飯塚、熊谷市樋春、 行田市前谷、蓮田市駒崎
	かんしょ	2	川越市中台南、三芳町上富
	大 豆	6	川越市古谷上、嵐山町志賀、熊谷市板井、熊谷市樋春、 加須市間口、蓮田市駒崎
果樹特産	な し	7	鴻巣市常光、神川町植竹、上里町長浜、加須市鴻莖、 加須市上種足、春日部市内牧、白岡市下大崎
	茶	4	所沢市下富、狭山市南入曽、入間市根岸、 日高市森戸新田
野 菜	トマト	7	川越市南田島、川島町上大屋敷、本庄市仁手、 上里町勅使河原、深谷市普濟寺、加須市栄、 越谷市東町
	な す	3	本庄市児玉町小平、熊谷市小江川、杉戸町大塚
	きゅうり	7	川越市大中居、川島町上大屋敷、本庄市田中、 熊谷市樋春、深谷市高畑、深谷市下手計、加須市大室
	ブロッコリー	3	本庄市田中、深谷市針ヶ谷、吉川市川藤
	ね ぎ	5	さいたま市岩槻区大野島、本庄市田中、熊谷市飯塚、 深谷市下手計、越谷市中島
	さといも	3	川越市中福、所沢市下富、狭山市堀兼
	ほうれんそう	3	川越市中福、狭山市堀兼、深谷市上手計
	いちご	5	吉見町江和井、本庄市台町、加須市本郷、 春日部市内牧、久喜市菖蒲町菖蒲
計	80		

(注) 水稻（早植）：5月中旬までの移植、水稻（普通植）：5月下旬以降の移植。

エ フェロモントラップ等調査

対象作物	対象害虫名	箇所数	設置場所
水 稲	ニカメイガ	3	吉見町西吉見、加須市麦倉、幸手市神扇
	フタオビコヤガ	2	熊谷市中曽根、加須市戸室
な し	ナシヒメシンクイ	5	飯能市双柳、鴻巣市常光、上里町長浜、加須市鴻荃、春日部市内牧
	果樹カメムシ類	1	寄居町鉢形
茶	チャハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノコカクモンハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノホソガ	2	所沢市下富、入間市根岸
野 菜	オオタバコガ	5	本庄市児玉町小平、深谷市針ヶ谷、加須市間口、越谷市中島、杉戸町大塚
	ハスモンヨトウ	3	熊谷市樋春、深谷市針ヶ谷、久喜市菖蒲町菖蒲
	コナガ	1	深谷市新戒
	シロイチモジヨトウ	3	深谷市新戒、越谷市中島、杉戸町大塚
計		29	

(3) 令和6年度の主な病害虫の発生とその防除対策

ア 主要病害虫の発生と防除対策の概要

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	葉いもち	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年並だった。	5～7月のいもち病感染好適日は過去10年で最も少なかったが、一部感受性品種で発生が見られた。この作型では平年の発生量が比較的少ないため、発生量は平年並となった。	抵抗性品種への転換が進みつつある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	穂いもち	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い7月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並だった。	8月の降水量は多かったが、顕著な高温でだったため、軽微な発生にとどまった。この作型では平年の発生量が少ないため、発生量は平年並となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	紋枯病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：やや少	平年より遅い7月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並だった。	7～8月の気温がかなり高く、8月の降水量も多かったが、7月の降水量が少なかったため、発生量は平年並にとどまった。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。JA米では種子更新が徹底されている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	もみ枯細菌病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：並	平年並の8月第2半旬に初発生を確認した。	本作型では過去10年で昨年のみ軽微な発生が見られただけのため、本年も昨年並の発生量だったが、平年比は多となった。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	縞葉枯病	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年より多かった。	ヒメトビウカ越冬世代幼虫の保毒虫率は過去10年で最も低かったが、麦ほ場における生息密度が過去10年で最も高かったため、平年より早く多い発生となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。抵抗性品種への転換が進みつつある一方で、感受性品種ではウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	※ごま葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	本作型では過去10年で昨年のみ一部地域で極めて軽微な発生が見られただけのため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	※白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ニカメイガ	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：少	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。県東部では予察灯誘殺数が平年より多く、本田での発生量もやや多い結果となった。	この作型では秋耕いが定着しているため、水田内の越冬場所が減少しており、近年少発生傾向であったが、品種構成の変化(稈の太い品種の作付)などにより、世代を重ねることに増加した。特にチョウ目害虫対象の箱施薬を実施していない地域において、発生が増加した。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	セジロウカ	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：多	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	気象予報に基づく飛来予測では6月23日が初予測日であったが、予察灯への初誘殺や本田の初発生時期を考慮すると、実際にはそれ以前から飛来して本田定着したと推察される。予察灯の誘殺数は6地点中4地点が平年の1.5倍以上(最大7.7倍)で、本田でも平年よりやや多い発生となった。	セジロウカ・トビロウカの飛来予測通知が来た際に、飛来予測日数の動向を発表し、注意喚起した。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	トビロウカ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	本田での発生は確認されなかった。	予察灯への誘殺は若干見られたものの、1回当たりの飛来数が少なかったため、本田定着には至らなかったと考えられる。	セジロウカ・トビロウカの飛来予測通知が来た際に、飛来予測日数の動向を発表し、注意喚起した。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ヒメトビウカ	平年：やや早 前年：やや遅	平年：やや多 前年：多	平年よりやや早い6月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で最も高かったが、7月～9月の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや多にとどまった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ツマグロヨコバイ	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い6月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	予察灯誘殺数も平年より少なかった。原因は定かではないが、在来種のため、夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	ヒメトビウカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	斑点米カメムシ類	平年：早 前年：やや遅	平年：多 前年：多	平年より早い6月第1半旬に初発生を確認し、発生量は8月に最大となった。発生量は平年より多かった。	昨年のイネカメムシの発生量が多かったこと、6月下旬から早期栽培地帯でのイネカメムシ飛来報告が相次いだことから、イネカメムシの越冬量が多かったと推察される。また、予察灯への誘殺もイネカメムシ及びホソハリカメムシ・ミナミアオカメムシ等が非常に多く、本田での発生量も平年比多となった。	イネカメムシ防除対策資料、斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果及び注意報を発表し、防除を呼びかけた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イチモンジセセリ	平年：やや遅 前年：早	平年：やや少 前年：—	平年よりやや遅い6月第3半旬に初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。	夏期の長期にわたる異常高温により発生が抑制され(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)、発生量はやや少にとどまった。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	フタオビコヤガ	平年：早 前年：並	平年：並 前年：—	平年より早い5月第6半旬に初発生を確認したが、その後発生は見られなかった。	フェロモントラップの誘殺数は年々減少傾向にあり、ほ場での発生も減少しているため、少発生が平年並となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	コブノメイガ	平年：遅 前年：—	平年：並 前年：—	平年よりかなり遅い9月第3半旬に初発生を確認したが、その後すぐ収穫された。	この作型の晩生種で、周りが黄化した頃に若干食害葉が見られることがあるが、被害の絶対量は極めて少ない。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イネミズゾウムシ	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	平年より遅い5月第4半旬に初発生を確認し、発生量は5月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	本虫の多発地は4月下旬移植地域が主体で、通常は移植後すぐに発生が確認されるが、1月～4月が高温に経過したため、越冬世代成虫の活動開始時期が水稲移植前に早まり、本田での確認が第1世代成虫になった可能性が考えられる。発生量は、年々減少している。	越冬場所(森林、堤防沿い)に近接する常発地帯では、育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	スクミリンゴガイ	平年：— 前年：—	平年：やや少 前年：—	本作型では、地域による被害の多少の差が大きかったが、発生量は平年より少なく、前年並かやや多かった。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。常発地の防除が徹底されて、発生量は平年よりやや少ないが、暖冬が続いているため、越冬個体は徐々に増加しつつある。	耕種防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	※イネドロオイムシ	平年：並 前年：早	平年：並 前年：少	一部ほ場で散発程度の発生が確認された。	本虫は寒冷地型であり、本県では4月下旬移植の一部地域でわずかに発生が見られる程度である。	常発地域が非常に限定的であり、当該地域では育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	葉いもち	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より遅い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	5～7月のいもち病感染好適日は過去10年で最も少なく、夏期の異常高温により7月17日を最後に9月24日まで感染好適日が出現しなかった。このため、常発地以外での発生はほとんど見られず平年比やや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっているが、一部に常発地がある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	穂いもち	平年：早 前年：やや早	平年：やや少 前年：少	平年より早い8月第5半旬に初発生を確認し、発生面積は9月第1半旬が最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	葉いもちの発生量がやや少なく、7月18日～9月23日の間感染好適日の出現がなかったため、穂いもちの発生量もやや少となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	紋枯病	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	平年より遅い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は9月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	8月～9月の気温が高く、8月は降水量も多かったが、異常高温で菌の生育適温を超える時間帯が長く、9月の降水量がかなり少なかったため、多発には至らなかった。	多室栽培を避けるなどの耕種防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ばか苗病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	温湯消毒の実施と箱育苗処理剤の励行を実施。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	もみ枯細菌病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認した。発生量は平年並であった。	本作型の出穂期である8月の降水量は多かったが、散発1か所のみにとどまった。初発が遅かったことから、夏期の異常高温で発生が抑制された可能性が否定できない。平年の発生量が少ないため、散発1か所が平年並となる。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	縞葉枯病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	本作型では、一部地域を除きほぼ抵抗性品種となっている。また、ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒率は過去10年で最も低く、ヒメトビウンカの本田での発生量もやや少なかったため、本病の発生もやや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっている。保毒率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、感受性品種を付けている場合は防除に取り組むよう呼びかけている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	稲こうじ病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	本作型の穂ばらみ期～出穂期の降水量は多かったが、異常高温が続いたため、発生が抑制された可能性が否定できない。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	※ごま葉枯病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	※白葉枯病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ニカメイガ	平年：遅 前年：—	平年：並 前年：—	平年より遅い9月第1半旬に初発生を確認したものの、発生は散発にとどまった。本年は予察灯誘殺数が平年より多かったが、本田での発生量は平年並であった。	本作型では米麦二毛作が多く、米収穫後すぐに耕耘するため、平年の発生量が非常に少ない。散発1か所で平年並の発生となる。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	セジロウンカ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年並だった。	早期・早植栽培地帯での予察灯の誘殺数は平年よりかなり多かったが、普通期栽培地帯では予察灯の誘殺数が平年並だった。飛来予測は7月11日が最後だったため、本作型の地域では平年並みの発生となった。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測通知が来た際に、飛来予測日数の動向を発表し、注意喚起した。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	トビロウンカ	平年：やや早 前年：一	平年：並 前年：一	平年よりもやや早い9月第2半旬に1か所で散発程度ではあるが、本田での発生が確認された。また、予察灯への誘殺は県内複数地域で確認された。	飛来予測日数は昨年より多かったが、予察灯への誘殺は昨年より少なかった。1回当たりの飛来数が少なかったため、ほとんどの地域で本田定着には至らなかったと考えられる。平年の発生量が少ないため、散発1か所が平年並となる。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測通知が来た際に、飛来予測日数の動向を発表し、注意喚起した。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ヒメトビウンカ	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：並	平年より遅い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で最も高かったが、7月～9月の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや少にとどまった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ツマグロヨコバイ	平年：遅 前年：やや遅	平年：並 前年：並	平年より遅い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並であった。	予察灯誘殺数は平年より少なかったが、県東部では平年より多く、その地域が中発生となったため、全体の発生量が平年並となった。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	斑点米カメムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：並	平年より遅い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月にいったん減少したものの、9月に発生面積が増加し最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	昨年のイネカメムシの発生量が多かったこと、6月下旬から早期栽培地帯でのイネカメムシ飛来報告が相次いだことから、イネカメムシの越冬量が多かったと推察される。また、予察灯への誘殺もイネカメムシ及びホソハリカメムシ・ミナミアカメムシ等が非常に多く、本田での発生量も平年比多となった。	イネカメムシ防除対策資料、斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果及び注意報を発表し、防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イチモンジセセリ	平年：並 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、その後も発生は確認されたが、一部地域での散発程度の発生に留まった。発生量は平年よりやや少なかった。	夏期の長期にわたる異常高温により発生が抑制され(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)、発生量はやや少にとどまった。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	フタオビコヤガ	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	コブノメイガ	平年：早 前年：一	平年：並 前年：一	平年より早い7月第6半旬に1か所で散発程度ではあるが、本田での発生が確認された。	平年の発生量が少ないため、散発1か所で平年並の発生となる。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネミズゾウムシ	平年：やや早 前年：遅	平年：並 前年：一	平年よりやや早い6月第3半旬に一部の地域で初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。	従来からこの作型ではあまり発生が見られない。散発1か所で平年並の発生となる。	この作型ではあまり発生が見られないため、特に防除はしていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	スクミリンゴガイ	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生量は平年並だったが、被害面積は前年度と比較して大きく増加していたほか、ごく一部に壊滅的被害を受けたほ場が見られた。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。一部の地域で、一昨年甚大な被害を受けたため昨年は休耕していたほ場での作付けが復活したため、中程度の被害のほ場が拡大し、発生量は平年並となった。	耕種防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	※イネドロオイムシ	平年：一 前年：一	平年：一 前年：一	発生は確認されなかった。	過去10年無発生のため、無発生が平年並となる。	特に防除はしていないが、普及している箱施用剤には、コウチュウ目にも有効なものもある。
麦	黒さび病	平年：一 前年：一	平年：一 前年：一	発生は確認されなかった。	一	一
麦	赤さび病	平年：遅 前年：やや遅	平年：並 前年：並	平年より遅い4月第6半旬に初発を確認し、5月第2～第3半旬に複数の地点で確認されたため、発生面積は5月が最大となった。発生量は平年並だった。	4月中旬～5月上旬が温暖多湿に経過し、感染しやすい条件が継続したが、赤かび病の防除が徹底されたため、平年並の発生にとどまった。	赤かび病との同時防除可能な薬剤の選択。
麦	黄さび病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	一	一
麦	小さび病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	一	一
麦	うどんこ病	平年：やや遅 前年：やや早	平年：やや少 前年：少	平年よりやや遅い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	4月の下旬～5月の月上旬に1週間ごとに日15mm以上の強い降雨があったため、発生が抑制された。	赤かび病の防除で同時防除されている。
麦	赤かび病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い4月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年よりかなり多く(平年の730倍)、県内全域で発生しており、一部ほ場では甚大な被害が確認された。	4月中下旬に温暖多湿条件が継続し、アメダステータから算出される赤かび病子のう胞子飛散好適日と麦類(特に小麦)の開花期が完全に一致した。4月30日、5月7日には多発生好適日も出現し、発生を助長した。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。防除情報及び注意報を発表し、追加防除を呼びかけた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
麦	黒穂病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	黒節病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い2月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は過去10年で最も多かった(平年の158倍)。	2月中旬を除き、1月下旬～4月上旬まで多雨傾向が継続し、1月下旬、2月中旬、4月上旬は高温だったため、発生を助長した。	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	オオムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	近年、抵抗性品種や「彩の星」の導入により発生が極少となっている。
麦	コムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	近年、抵抗性品種「さとのそら」の導入より発生が極少となっている。
麦	オオムギ斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
麦	アブラムシ類	平年：早 前年：遅	平年：やや少 前年：多	平年より早い12月第6半旬に初発生を確認し、一時発生がおさまったものの、2月から再発生し、発生面積は4月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	暖冬傾向であったため、初発は平年より早まったものの、再発生時期である3月下旬にまとまった降雨があったため、発生が抑制された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
麦	ムギダニ	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より遅い3月第6半旬に、散発程度の初発生を確認した。発生量は平年よりやや少なかった。	第1世代虫が発生する2月上旬及び第2世代虫が発生する3月下旬にまとまった降雨があったため、一部地域で散発程度の発生にとどまった。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
麦	シロトビムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
かんしょ	つる割病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	基腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	イモキバガ (イモコガ)	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	ナカジロシタバ	平年：早 前年：早	平年：多 前年：やや多	平年より早い9月第6半旬に初発生を確認された。その後も継続して発生が見られたため、平年よりも発生量は多かった。適切な防除により被害はそれほど拡大しなかった。	8～10月の高温で発生が助長された。また、本虫はハスモンヨトウよりも高温に適応しているようで、本年度のかんしょにおける食葉性チョウ目の発生は、ほとんどが本種であった。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：－	9月第3半旬に初発が確認されたが、防除により、ほとんど被害は出なかった。	本害虫は極端な高温に対して弱く、本年度の6～9月の気温は本種にとってマイナス要因として働いていた可能性が高い。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	食葉性チョウ目幼虫	平年：－ 前年：早	平年：並 前年：－	5月第6半旬に初発が確認されたが、防除によりほとんど被害は出なかった。	本年度の食葉性チョウ目幼虫の発生はほとんどがナカジロシタバであったため、その他のチョウ目幼虫はほとんど問題にならなかった。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
大豆	紫斑病	平年：並 前年：早	平年：多 前年：多	収穫期の子実調査で、県全域における発生が確認された。また、平年よりもかなり多い発生が確認された。	8月が多雨傾向で経過し、特に8月下旬はまとまった雨が降ったため、9月に入っても土壌水分が高く、莢伸長期の感染を助長した。	奨励品種が紫斑病に強い「里のほほえみ」に切り替わった。種子消毒、無人ヘリによる一斉防除を実施している。
大豆	立枯性病害	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：並	一部地域で立枯病と黒根腐病の2種類の病害について散発程度の発生が確認された。	種子消毒の不徹底により、一部地域にて発生した。	種子消毒を実施している。
大豆	べと病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：やや多	平年より早い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	主力品種が感受性の「里のほほえみ」や在来品種のため、発生が増加傾向にある。感染しやすい生育ステージである8月が多雨に経過したため、ほとんどのほ場で発生したが、夏期の異常高温で抑制され、平年比やや多にとどまった。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	葉焼病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い8月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は過去10年で最も多かった(平年の11倍)。	8月の高温や雷雨により、発生が大きく助長された。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	ウイルス病	平年：遅 前年：並	平年：多 前年：多	収穫期の子実調査で、一部地域で褐斑粒の発生が確認された。生育期のモザイク葉は確認されなかった。	8月の多雨によりアブラムシ類の発生は確認できなかったが、褐斑粒が1か所であまり発生(被害粒率1.4%)となった。平年の発生量が少ないため、少発生1か所で平年比多となる。	－
大豆	萎疫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
大豆	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	8月の多雨により、発生が抑制された。平成30年以降は発生量が減少しているため、無発生でも平年比は少にならない。	は種時の薬剤処理と適期防除を実施している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
大豆	コガネムシ類	平年：やや遅 前年：遅	平年：少 前年：多	平年よりやや遅い8月第2半旬に、一部地域で発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	発生量が少なかった原因は定かではないが、在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：並	平年：やや少 前年：少	平年より早い8月第1半旬以降に一部ほ場で散発程度の発生が見られた。	フェロモントラップでの誘殺数が近年減少傾向にあり、ほ場でもオオタバコガ、シロイチモジヨトウが優占し、本種は減少している。また、R6年は8月の多雨により天敵糸状菌が増加し幼虫密度の低減に期待できると考えられる。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	食葉性チョウ目幼虫	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い7月第4半旬から発生が確認され、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年より多かった。	7月の高温少雨により播種が例年より早かったため、初発も早まった。オオタバコガ、シロイチモジヨトウのフェロモントラップ誘殺数は、9月～10月の高温少雨傾向により、9月第4半旬～10月第2半旬に平年より平年より大幅に増加し、ほ場での発生も助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が地域に定着している。空中散布による防除が実施された。オオタバコガは注意報を発表し、防除を呼びかけた。
大豆	ダイズサヤタマバエ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	8月(特に下旬)の多雨によって発生が抑制された可能性がある。また、在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	マメシンクイガ	平年：早 前年：並	平年：並 前年：並	平年より早い9月第3半旬に、一部地域で被害葉が確認された。発生量は平年並であった。	大規模粗放栽培のほとんど防除を行っていない調査地点1か所が子実調査で基発生となったが、他の調査地点は少発生1か所のみで、平年並の発生となった。8月下旬のまとまった雨により、第1世代幼虫の発生が抑制されたが、9～10月の高温少雨により、第2世代幼虫の被害が	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	シロイチモジマダラメイガ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	収穫期の子実調査で、一部地域で被害が確認された。発生量は平年よりやや少なかった。	ほ場での発生は確認できなかったが、子実調査で少発生が1か所確認された。8月の多雨により第2～3世代幼虫の発生が抑制されたと考えられる。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	吸実性カメムシ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：並	平年よりかなり早い8月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は11月に最大となった。発生量は平年より多かった。	近年、他種の寄生が減少する9月中旬から収穫期近くまで寄生するミナミアオカメムシが急速に増加し、9月～10月まで高温で推移したため、子実被害が助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	フタスジヒメハムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	黒斑病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	黒星病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：多	平年より遅い7月第1半旬に初発を確認したが、9月以降は発生が確認されなかった。発生量は平年並で前年より多かった。	前年の秋の発生量が少なかったため前年より発生が多くなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	赤星病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い5月第6半旬に初発を確認した。その後平年並で推移したが、前年より発生量は少なかった。	3月から5月上旬に降雨が多かったが、昨年の発生が多かったため前年より少ない結果となった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い7月第1半旬に初発を確認した。発生量は平年並であった。	前年の発生量が多かったため、前年と比べ少ないが、9月の少雨で発生が助長され平年並に発生した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	輪紋病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	シンクイムシ類	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：多	平年より早い5月第6半旬に初発を確認し、7月に発生が最大となった。発生量は平年よりやや多く、前年より多い結果になった。	越冬世代のフェロモントラップの誘殺数が多く、その後の発生量も多くなった。あまり見られない幼果での幼虫の被害も確認された。	フェロモントラップデータの公表、2回の注意報の発表をし、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
なし	ハマキムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	7月第1半旬に初発を確認したが、その後の発生は見られなかった。発生量は平年並となった。	夏季の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ハダニ類	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：少	平年より早い5月第6半旬に初発を確認した。その後発生量は平年より多く推移した。	4月から9月にかけての高温と7月と9月の少雨により発生が助長され平年より多くなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	カイガラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い4月第3半旬に初発を確認した。発生量は平年より少なかった。	3月・5月の多雨により発生が抑制され、平年より少ない発生になった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ニセナシサビダニ	平年：やや早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年よりやや早い5月第4半旬に初発を確認した。平年並の発生量となった。	3月の高温が発生を早まった。前年の発生が多かったため、前年比は少なくなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
なし	果樹カメムシ類	平年：早 前年：一	平年：多 前年：一	平年より早い8月第1半旬に果実被害の発生を確認した。発生量は平年より多かった。	越冬調査時点で越冬密度が高く、予察灯やフェロモントラップの誘殺数も4月から多かった。全国的な発生が多かった。	フェロモントラップデータの公表、2回の注意報の発表を行い、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	炭そ病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：やや少	二番茶摘採以降、7月第1半旬から11月第1半旬にかけて発生が見られた。広い地域での発生が見られたものの、ほ場ごとの発生量は少なかったため、平年に比べやや少となった。	8月第1半旬から8月第6半旬の豪雨の影響により一時発生は増加したものの、9月の高温乾燥により発生は落ち着いた。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	もち病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	越冬菌密度が低く、適切に防除されているためと思われる。	一
茶	輪斑病	平年：遅 前年：一	平年：やや少 前年：一	10月第2半旬にごくわずかに発生が確認されたものの、発生地域も限定的でありそれ以降の確認もできなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	一
茶	チャノココクモンハマキ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：やや多	フェロモントラップでの調査では、第1世代成虫の発生は平年よりも早かった。発生量は7月中旬以降減少し、昨年同様第2世代成虫の誘殺数は平年を大きく下回った。幼虫は、一番茶の摘採後にわずかに発生が見られたものの、7月上旬以降発生はほとんど確認できなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャハマキ	平年：早 前年：遅	平年：やや少 前年：少	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫、第1世代成虫の発生は平年よりも早かった。発生量は7月中旬以降減少し第2世代成虫は大きく下回った。幼虫は、茶園での発生は平年よりも早かった。8月第1半旬以降は発生量は減少し、その後も茶園での幼虫の発生はほとんど確認されなかった。	適切な防除が行われたのに加え、夏期の高温や8月の豪雨の影響や、一番茶・二番茶の摘採、その後の整枝作業により物理的に除去され個体数が減少したと思われる。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノホソガ	平年：遅 前年：一	平年：やや少 前年：一	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫は平年よりも早かった。発生量は7月上旬以降減少した。また、例年では発生が確認できなかった第4世代にあたる成虫の誘殺まで確認された。幼虫は、夏期にわずかに茶園での発生が確認された。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。例年では発生が見られなかった第4世代の発生確認されたが、1年を通して気温が高かったためかと考えられる。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノミドリヒメヨコバイ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：多	平年よりかなり早い4月第3半旬から発生が確認されたうえ、7月第6半旬までは発生量が平年より多い状況が続いていた。その後8月以降は発生量が減少した。	7月の高温乾燥の影響のため、2番茶の摘採以降発生量が急激に増加した。しかし、8月中の豪雨や防除の影響で発生量が減少し、全体としては平年並の発生量となった。	発生予察情報や病害虫防除情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	カンザワハダニ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：並	2月第3半旬から発生は見られ、局地的に発生量が増加したものの、9月第1半旬以降発生が減少した。	局地的に発生量が増加したものの、深刈りにより、物理的に除去されたほか、9月以降の適切な防除により発生は抑えられ、平年並の発生となった。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	チャノキイロアザミウマ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：多	4月第2半旬から発生が見られる園が増えたが、その後発生量自体は大きく増加することはなかった。	4月の高温により平年よりも早く発生が見られたが、カンザワハダニとの同時防除等により発生は抑制された。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	ツマグロアオカシミカメ	平年：一 前年：一	平年：やや少 前年：一	発生は確認されなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。また、本年の県内における発生は非常に局所的かつ小規模となっている。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	クワシロカイガラムシ	平年：一 前年：一	平年：やや少 前年：一	有効積算温度によるふ化予測では、第1世代幼虫のふ化最盛期は5月16日（平年より10日早い）、第2世代は7月10日（平年より12日早い）、第3世代は9月13日（平年より3日遅い）となった。	冬季に散布する防除薬剤の普及により発生量は減少している。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	ヨモギエダシャク	平年：早 前年：一	平年：並 前年：一	5月第6半旬及び9月第2半旬に局所的かつ少数の発生が確認されたものの、それ以外の発生は確認されなかった。	本県での発生は少なく、チャのハマキガ類と同時に適切な防除がされていると思われる。	一
茶	チャトゲコナジラミ	平年：早 前年：やや早	平年：並 前年：並	裾葉に定着していたが、チャの栽培上問題のない程度の発生にとどまっていた。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	一
冬春トマト (長期一作)	疫病	平年：一 前年：一	平年：一 前年：一	発生は確認されなかった。	一	一
冬春トマト (長期一作)	灰色かび病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	1月第2半旬に初発を確認したが、発生が少なく、収束も早かったため、発生量は平年よりやや少なくなった。	2月が高温だったことから、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト (長期一作)	葉かび病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	抵抗性品種の普及により発生は抑制されている。	抵抗性品種の導入とあわせ薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト (長期一作)	青枯病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	一	抵抗性台木が利用されている。また、土壌消毒が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春トマト (長期一作)	黄化葉巻病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：少	平年より早い10月第1半旬に初発を確認したが発生量が多く、発生も継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場でウイルス媒介虫の侵入防止対策が不十分であったため、発生が増加した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。一部のほ場で耐病性品種が導入されている。
冬春トマト (長期一作)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：やや多	平年より遅い1月第6半旬に初発を確認したが発生量が多く、発生も継続したため、発生量は平年よりも多くなった。	4～5月の降水量が多かった影響で、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト (長期一作)	萎ちよう病類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	抵抗性品種が導入されている。	土壌病害に共通した土壌消毒等の対策がとられている。
冬春トマト (長期一作)	黄化えそ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	アザミウマ類の防除対策がとられている。
冬春トマト (長期一作)	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト (長期一作)	コナジラミ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	一部のほ場で侵入防止対策が不十分であった。また、2～4月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト (長期一作)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：－	平年：並 前年：多	平年より早い1月第1半旬に初発を確認し、発生が継続したが、発生量が少なかったため、平年並となった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	トマトサビダニ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	11月第6半旬に初発を確認したが、発生量は少なく、すぐに収束したため、発生量は平年並だった。	11月～12月の高温の影響で発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト (長期一作)	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	12月第3半旬に初発を確認したが、発生量は少なく、すぐに収束したため、発生量は平年並だった。	11月～12月の高温の影響で発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認したが発生量が増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	着果負担の影響が10月に大きくなったところに天候不順の影響があり、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋なす	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋なす	褐紋病	平年：並 前年：遅	平年：多 前年：多	平年並の7月第4半旬に初発を確認し、その後発生量が増加したため、発生量は平年より多くなった。	8月の多雨により、発生が助長された。	－
夏秋なす	褐色腐敗病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年よりも遅い10月第3半旬に初発が確認されたが、発生は少なく、すぐに終息したため、発生量は平年並となった。	－	－
夏秋なす	半身萎ちよう病	平年：早 前年：やや遅	平年：多 前年：多	平年より早い6月第1半旬に初発を確認し、一部のほ場で発生が多くなった。その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	一部のほ場で連作により発生が増加した。	抵抗性台木が利用されている。
夏秋なす	青枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性台木が利用されている。
夏秋なす	アザミウマ類	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：やや少	平年より早い4月第6半旬に初発を確認し、その後も発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	6～10月の高温により、発生が助長された。	天敵への影響や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	オオタバコガ	平年：やや早 前年：遅	平年：多 前年：多	平年よりやや早い5月第6半旬に初発を確認し、その後継続的に発生が続いたため、発生量は平年より多くなった。	6～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：－	前年より早い6月第1半旬に初発を確認したが、発生は増えず、発生量は平年並となった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	－
夏秋なす	ハモグリバエ類	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	前年より遅い9月第3半旬に初発を確認したが、発生は多く、発生量は平年より多くなった。	－	－
夏秋なす	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い4月第6半旬に初発を確認し、たが、その後発生は増えなかったため、発生量は平年並となった。	4月の高温により発生時期が早まった。	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋なす	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い5月第6半旬に初発を確認した。その後、発生量は多くなかったため、発生量は平年並になった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ホコリダニ類	平年：遅 前年：並	平年：多 前年：多	平年より遅い9月第6半旬に初発を確認した。10月に発生量が急増したため、発生量は平年多くなった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	べと病	平年：並 前年：早	平年：並 前年：多	平年並の9月第3半旬に初発を確認した。その後、発生量は継続したが増加はしなかったため、発生量は平年並となった。	10月は降水量が多くハウス内湿度が上昇し、発生が助長された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	炭疽病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	うどんこ病	平年：遅 前年：早	平年：多 前年：多	平年より遅い9月第6半旬に初発を確認し、発生が多かったため、発生量は平年より多くなった。	—	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	斑点細菌病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	モザイク病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	灰色かび病	平年：— 前年：—	平年：多 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	褐斑病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：多	平年より早い8月第6半旬に初発を確認し、発生が続いたため、発生量は平年よりやや多くなった。	10月は降水量が多くハウス内湿度が上昇し、発生が助長された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	菌核病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	作付前の太陽熱消毒等により伝染源である菌核の死滅が図られている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	黄化えそ病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：やや多	平年並の9月第3半旬に初発を確認し、その後発生は継続し、11月に増加したため、発生量は平年より多くなった。	9～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、発生が助長された。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	退緑黄化病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い8月第6半旬に初発を確認し、その後高い水準で発生量が推移したため、発生量は平年よりも多くなった。	8～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、一度感染株が発生したハウス内では継続的に感染が継続した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アザミウマ類	平年：やや早 前年：並	平年：多 前年：並	平年よりやや早い9月第3半旬に初発を確認し、その後発生は継続し、10月に増加したため、発生量は平年より多くなった。	9～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	コナジラミ類	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認し、発生量は増加していったため、発生量は平年より多くなった。	8～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、発生が多く続いたため、発生量は平年より多くなった。	9～11月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハダニ類	平年：— 前年：—	平年：多 前年：—	発生は確認されなかった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アブラムシ類	平年：— 前年：—	平年：やや少 前年：—	発生は確認されなかった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：—	平年より早い9月第3半旬に初発を確認したが、その後発生が落ち着いたため、発生量は平年並となった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	食葉性チャウ目幼虫	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	べと病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：多	平年より遅い4月第2半旬に初発を確認したが、その後発生量の少ない状態が継続したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	2～5月の高温の影響で、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生量の少ない状態が継続した。	抵抗性品種の導入と、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。また、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	炭疽病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (促成栽培)	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い12月第6半旬に初発を確認したが、発生量はそれほど多くなかったため、発生量は平年並となった。	一部定植時期の早いハウスで成り疲れして発生したものの、適正な湿度管理や適期防除が行われ、発生が抑制された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	斑点細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	モザイク病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	褐斑病	平年：早 前年：－	平年：並 前年：多	平年より早い12月第6半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	－	抵抗性品種が導入されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	作付後の太陽熱利用等による土壌消毒を行っている。
冬春きゅうり (促成栽培)	黄化えそ病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第3半旬に初発を確認した。発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に感染株の抜き取りが行われ、発生は一時的なものとなった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	退緑黄化病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：多	平年より遅い4月第3半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	3月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、一度感染株が発生したハウス内では継続的に感染が継続したものの、防除圧の高いハウスでは発生しなかった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アザミウマ類	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：多	平年より遅い4月第2半旬に初発を確認したが、その後発生量の多い状態が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	4月の高温によりハウスへの飛込が増えた。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	コナジラミ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：少	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い1月第6半旬に初発を確認し発生量は多い状態を維持したため、発生量は平年より多くなった。	2～5月の高温によりハウスへの飛込が増え、収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場で発生が助長された。	施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハダニ類	平年：－ 前年：早	平年：やや少 前年：－	4月第3半旬に初発を確認したが、すぐに終息し、発生量は平年よりやや少なくなった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (促成栽培)	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	黒腐病	平年：早 前年：－	平年：多 前年：－	平年より早い10月第6半旬に初発を確認し発生量は多い状態を維持したため、発生量は平年より多くなった。	10月の天候不順が発生を助長した。	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	べと病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗時からの防除対策が始動されている。
ブロッコリー	軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	花蕾腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	黒斑細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	黒すす病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い11月第3半旬に初発を確認したがすぐに終息したため、発生量は平年並となった。	10～11月の多雨により発生が抑制された。	育苗時からの防除対策が始動されている。
ブロッコリー	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：少	平年より遅い10月第3半旬に初発を確認し、発生量は平年よりやや多かった。	10月の高温の影響で発生が助長された。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。同時防除で対応している。
ブロッコリー	コナガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第6半旬に初発を確認し、発生量は平年並だった。	定植後はしばらく定植時に処理した薬剤による防除効果が続いていたが、9月の高温の影響で発生が助長された。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	7月～10月の高温により発生が助長された。フェロモントラップの誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	ヨトウガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	ハイマダラノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：少	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、発生量は平年よりもやや多かった。	7月～10月に高温により発生が助長された。フェロモントラップの誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。8月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	さび病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第3半旬に初発を確認したがその後増えなかったため、発生量は平年並となった。	5月の多雨が発生を助長した。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒斑病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い5月第6半旬に初発を確認し、発生量は平年並となった。	梅雨や秋雨により発生が助長された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	べと病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い5月第6半旬に初発を確認したが、その後は発生は確認されなかった。	梅雨の影響で一部地域で発生が見られた。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	軟腐病	平年：早 前年：並	平年：並 前年：少	平年より早い8月第1半旬に初発を確認したが発生は続かなかつたため、発生量は平年並となった。	8～9月の高温が発生を助長した。	排水対策等の耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	小菌核腐敗病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い12月第3半旬に初発を確認した。発生は一部地域のみであったため、発生量は平年並であった。	－	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
秋冬ねぎ	白絹病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種の防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	黒腐菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	土壌消毒と併せ、耕種の防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	シロイチモジヨトウ	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：少	平年より早い5月第6半旬に初発を確認したがその後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	5月～11月の高温により発生が助長され、12月まで発生が確認された。フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。8月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	アブラムシ類	平年：早 前年：遅	平年：やや少 前年：並	平年より早い5月第4半旬に初発を確認したがその後は収まったため、発生量は平年よりもやや少であった。	5月の高温で発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	ネギハモグリバエ	平年：早 前年：やや遅	平年：並 前年：少	平年よりも早い5月第6半旬に初発を確認し、継続して発生が確認されたが発生量は多くなかったため、平年並だった。	6月～10月の高温により発生が助長された。B系統の発生はそれほど多くなかった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギアザミウマ	平年：やや早 前年：やや遅	平年：並 前年：少	平年よりやや早い4月第6半旬に初発を確認し、栽培期間を通じて継続して発生が見られた。発生量は平年並だった。	一年を通して高温で推移したため、発生が早く、長く続いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギコガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	汚斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	疫病	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い9月第1半旬に初発が確認されたが、発生は限定的で増えなかった。	－	県内主要産地での防除に対する意識が高く、適期防除が行われ、発生は抑制された。ドローンでの薬剤散布が行われるなど防除が徹底された。
さといも	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：多	平年より遅い6月第3半旬に初発が確認され、10月まで発生が見られたが、発生量は増えなかったため、平年並となった。	5月からの高温で発生が促進された。	疫病防除のため、薬剤散布回数が増加した。それに伴い、殺虫剤を散布する機会も増加した。
さといも	ハダニ類	平年：－ 前年：やや遅	平年：並 前年：－	7月第1半旬に初発が確認されたが、その後発生は見られなかった。	－	－
さといも	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	9月第3半旬に初発が確認されたが、発生圃場は限定的で、その後発生は見られなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	べと病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	播種時の粒剤施用をはじめ薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
冬春ほうれんそう	ケナガコナダニ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	シロオビノメイガ	平年：早 前年：早	平年：多 前年：－	平年より早い10月第3半旬に初発を確認し、発生量は多く、11月まで発生は続いたため、発生量は平年より多かった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
いちご (育苗期)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご (育苗期)	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご (育苗期)	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご (育苗期)	輪斑病	平年：並 前年：－	平年：並 前年：－	平年並6月第6半旬に初発を確認したが、発生量圃場は限定的であったため、発生量は平年並だった。	－	－
いちご (育苗期)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	アザミウマ類	平年：－ 前年：遅	平年：－ 前年：－	6月第3半旬に初発を確認したが、その後の発生は確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	－
いちご (育苗期)	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：やや少	平年より早い5月第1半旬に初発を確認したが、発生量は平年並となった。	3～4月の気温が高く、5月からの発生が見られたが、薬剤防除が行われ、発生は抑制された。	他の害虫との同時防除で対応している。
いちご (育苗期)	ハダニ類	平年：早 前年：やや遅	平年：やや多 前年：やや少	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年よりやや多かった。	3～4月の気温が高く、5月からの発生が見られ、その後の高温で8月まで発生が続いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (育苗期)	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：－	7月第3半旬に初発を確認したが、その後の発生は見られなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	－
いちご (育苗期)	コナジラミ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：－	前年より早い5月第2半旬に初発を確認したが、その後は確認されず、発生量は平年並となった。	適切な防除が行われ一次的な発生にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	灰色かび病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より遅い1月第3半旬に初発を確認した。その後の発生は少なく、発生量は平年よりやや少となった。	12月～2月の少雨の影響で発生が抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	うどんこ病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より遅い1月第3半旬に初発を確認したが、すぐに収束したため、発生量は平年よりやや少なかった。	育苗期の6～8月の高温が発生を抑制し、定植後の発生が抑えられた。適正な肥培管理や適期防除が行われたこと、12月～2月の少雨の影響で発生が抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	萎黄病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：－	平年より遅い1月第3半旬に初発を確認したが、すぐに収束した。発生量は平年並だった。	早期抜き取りや適期防除が行われたため、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (生育・収穫期)	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：少	平年並の10月第1半旬に初発を確認したが発生量は多くなかったために、発生量は平年比やや少となった。	10～11月の高温の影響により、側窓や出入口を換気していたことから、飛び込みによる発生が見られた。	ハウス開口部のネット使用により成虫の飛び込みを抑え、発生動向を見ながら薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アザミウマ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い11月第3半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認されたが、発生量はやや少となった。	9月～12月にかけて高温で推移したため、一部ほ場で飛び込みによる発生が確認され、圃場に定着した後は防除が難しくなった。	ハウス開口部の赤色ネット使用により野外からの飛び込みを抑える耕種的防除と薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：多 前年：少	平年より早い10月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認された。3月第3半旬から発生が増え、4月の発生量は平年より多くなった。	9月～2月まで気温が平年より高く推移したため、初発後も継続的に発生した。3月下旬の気温が平年よりかなり高かったため、野外からの飛び込みが多く、ハウス内で増殖した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：多	平年よりやや遅い12月第3半旬に初発を確認した。その後も継続的に発生が確認されたが、発生量は平年より少なかった。	定植前の防除が徹底されたため、発生が少なかった。9月～2月にかけて気温が高かったが、天敵の活動も活発になり発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。定植前のCO2ガス処理や、天敵の利用も進んでいる。
いちご (生育・収穫期)	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (生育・収穫期)	コナジラミ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い10月第1半旬に初発を確認し、その後の発生も見られたが発生量は平年よりやや少なかった。	定植前の防除が徹底され、発生後も適期防除が行われたため、発生が抑えられた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

イ 令和6年度 病害虫発生程度別及び防除面積

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
早期水稲 12,780ha (5月中旬までの移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち		1	59	1142	1202	6400	6400
	穂いもち				9	9	130	130
	紋枯病		4	154	2251	2409	9600	9600
	白葉枯病					-		
	ばか苗病					-	6400	6400
	イネシソグレセンチュウ					-		
	イネシソグレセンチュウ(種子消毒)					-	6400	6400
	もみ枯細菌病					9	9	
	もみ枯細菌病(種子消毒)					-	6400	6400
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縮葉枯病	10	194	1433	4573	6210	6400	6400
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
	稲こうじ病					-	6400	6400
	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ			3	420	423	6400	6400
	セジロウンカ	9	151	1084	3840	5084	6400	6400
	トビイロウンカ					-	6400	6400
	ヒメビウンカ	1881	5270	4494	1072	12717	6400	6400
	ツマグロヨコバイ	375	756	1539	2631	5301	6400	6400
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオウムシ				68	68	6400	6400
	イネゾウムシ					-		
	イネクロカメムシ					-		
	斑点米カメムシ類	1802	1511	1983	2370	7666	10000	10000
イチモンジセセリ				9	9	6400	6400	
フタオビコヤガ					-	6400	6400	
イネヨトウ					-			
アワヨトウ					-			
コブノメイガ				9	9	6400	6400	
イネミズゾウムシ			3	423	426	6400	6400	
スクミリンゴガイ					-	30	30	
普通期水稲 15,620ha (5月下旬以降の移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち				162	162	12500	12500
	穂いもち				162	162	160	160
	紋枯病	3	74	756	3791	4624	7810	7810
	白葉枯病					-		
	ばか苗病					-	15600	15600
	イネシソグレセンチュウ					-		
	イネシソグレセンチュウ(種子消毒)					-	15600	15600
	もみ枯細菌病				32	32		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					-	15600	15600
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縮葉枯病		0	8	605	613	12500	12500
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
稲こうじ病					-	12500	12500	

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
普通期水稻 (5月下旬以降の 移植)	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ					-	12500	12500
	セジロウンカ	0	33	767	5240	6040	12500	12500
	トビイロウンカ				32	32	12500	12500
	ヒメビウンカ	4145	4445	4062	2230	14882	12500	12500
	ツマグロヨコバイ	115	570	1886	4177	6748	12500	12500
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオウムシ					-	12500	12500
	イネゾウムシ					-		
	イネクロカメムシ					-		
	斑点米カメムシ類	1079	1345	2144	3040	7608	7810	7810
	イチモンジセセリ					-	12500	12500
	フタオビコヤガ					-	12500	12500
	イネヨトウ					-		
アワヨトウ					-			
コブノメイガ				32	32	12500	12500	
イネミズゾウムシ				32	32	12500	12500	
スクミリンゴガイ					-	30	30	
麦 6,480ha	黒さび病					-		
	赤さび病		1	40	744	785	1300	1300
	黄さび病					-		
	小ささび病					-		
	うどんこ病		0	12	531	543	3240	3240
	赤かび病	3	83	716	2429	3231	3240	3240
	雪腐病類					-		
	黒穂病類					-		
	黒節病	69	229	628	1346	2272	650	650
	麦類縮萎縮病					-		
	小麦縮萎縮病					-		
	大麦縮萎縮病					-		
	雲形病					-		
	斑葉病					-		
	株腐病					-		
	立枯病					-		
	アブラムシ類			9	630	639	1300	1300
	ムギアカタマバエ					-		
	ハモグリバエ類					-		
	ムギダニ				1	1	1300	1300
かんしょ 365ha	かいよう病					-		
	つる割病					-	50	50
	立枯病					-	50	50
	イモキバガ					-	300	300
	ナカジロシタバ		183	183		366	300	300
	ハスモンヨトウ				18	18	300	300
	シロイチモジヨトウ					-		
	ヨツモンカメノコハムシ					-		
	コガネムシ類					-	150	200
	その他(食葉性チョウ目幼虫)			0	14	14	300	300
大豆 739ha	紫斑病		1	30	208	239	370	370
	さび病					-		
	菌核病					-		
	立枯性病害				1	1	370	370
	炭そ病					-		
	黒とう病					-		
	べと病	7	53	170	240	470	370	370
	葉焼病	84	159	196	132	571	370	370
モザイク病					-			

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
大豆	萎縮病					-		
	ウイルス病(わい化病除く)			0	24	24		
	わい化病					-		
	アブラムシ類					-		
	タネバエ					-		
	コガネムシ類				6	6	330	330
	ハスモンヨトウ				6	6	330	660
	食葉性チョウ目幼虫	3	157	398	61	619	330	660
	ハダニ類					-		
	ダイズサヤタマバエ					-	330	330
	マメヒメサヤムシガ					-		
	マメシクイガ	19	32	63	109	223	330	330
	シロイチモジマダラメイガ			0	24	24	330	330
	吸葉性カメムシ類	38	218	281	79	616	330	660
	ウコンノメイガ					-		
フタスジヒメハムシ					-			
ヒメサヤムシ類					-	330	330	
なし 355ha	黒斑病					-		
	黒星病				6	6	350	350
	赤星病			0	15	15	350	700
	うどんこ病	20	26	44	66	156	350	700
	輪紋病					-		
	ナシヒメシクイ	1	4	17	55	77	350	1050
	モモシクイガ					-		
	ナシマダラメイガ					-		
	ハマキムシ類				0	-	350	350
	ハダニ類	1	12	68	149	230	350	1050
	カメムシ類		0	5	40	45	350	1050
	カイガラムシ類					-	350	350
	アブラムシ類			0	21	21	350	350
	ニセナシサビダニ				3	3	350	350
	吸ガ類					-		
ナシチビガ					-			
茶 729ha	炭疽病			3	182	185	725	1450
	もち病					-		
	網もち病					-		
	輪斑病				17	17	725	1450
	チャノコカクモンハマキ		0	7	85	92	725	2175
	チャハマキ		0	7	85	92	725	2175
	チャノホソガ	0	3	27	133	163	725	2175
	チャノミドリヒメヨコバイ	83	88	124	151	446	725	2175
	カンザワハダニ	0	7	63	248	318	725	2175
	チャノキイロアザミウマ		0	49	477	526	725	2175
	ツマグロアオカスミカメ					-	725	2175
	クワシロカイガラムシ					-	725	1450
	ヨモギエダシヤク				17	17	725	725
	チャトゲコナジラミ	1	23	133	304	461	725	1450
	冬春トマト 118ha	疫病					-	
灰色かび病					0	-	110	330
モザイク病						-		
葉かび病						-		
青枯病						-		
萎ちょう病						-		
うどんこ病		3	6	14	24	47	110	330
黄化葉巻病					3	3	110	330
アザミウマ類					0	-	110	330
オオタバコガ					-	110	110	110
コナジラミ類			1	13	14	110	330	330
ハモグリバエ類						-		
アブラムシ類						-	110	330
トマトサビダニ						-		
ハスモンヨトウ						-	110	110

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
夏秋なす 229ha	うどんこ病	5	23	60	81	169	200	600
	灰色かび病					-		
	褐紋病	2	7	19	41	69	200	200
	褐色腐敗病				3	3	200	600
	半身萎ちょう病	50	29	34	37	150	200	600
	青枯病					-	200	200
	アザミウマ類	5	31	78	81	195	200	800
	コナジラミ類			0	42	42	200	600
	オオタバコガ	10	19	36	55	120	200	600
	ハモグリバエ類	3	11	29	57	100	200	600
	アブラムシ類		0	5	29	34	200	600
	ハダニ類		0	28	142	170	200	600
	ハスモンヨトウ					-	200	600
ホコリダニ類	15	21	34	48	118	200	600	
夏秋きゅうり 317ha	べと病	1	4	18	54	77	300	300
	炭そ病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	7	17	36	65	125	300	300
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					-	300	300
	灰色かび病					-	300	300
	褐斑病	1	5	20	59	85	300	300
	菌核病					-	300	300
	黄化えそ病	2	9	27	63	101	300	600
	退緑黄化病	23	29	47	66	165	300	600
	アザミウマ類	6	14	31	58	109	300	600
	ハダニ類					-	300	300
	アブラムシ類					-		
	コナジラミ類		1	11	77	89	300	600
	ハモグリバエ類			0	20	20	300	300
	ワタヘリクロノメイガ					-		
	オオタバコガ					-		
ハスモンヨトウ				2	2	300	300	
食葉性チョウ目幼虫					-	300	300	
冬春きゅうり 257ha	べと病		0	5	44	49	250	750
	炭疽病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	2	9	29	65	105	250	750
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					-		
	灰色かび病					-	250	750
	褐斑病		0	4	29	33	250	750
	菌核病					-	250	750
	黄化えそ病				0	-	250	250
	退緑黄化病			0	11	11	250	250
	アザミウマ類	2	7	23	56	88	250	750
	ハダニ類					-	250	750
	アブラムシ類					-		
	コナジラミ類				0	-	250	750
	ハモグリバエ類		0	3	24	27	250	750
	ワタヘリクロノメイガ					-		
	オオタバコガ					-		
ハスモンヨトウ					-	250	250	
食葉性チョウ目幼虫					-	250	250	

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
ブロッコリー 1,202ha	黒腐病	0	2	24	155	181	1000	1000
	べと病					-	1000	1000
	アブラムシ類				17	17	1000	1000
	コナガ					-	1000	1000
	ハスモンヨトウ	0	2	24	155	181	1000	1000
秋冬ねぎ 1,680ha	さび病	4	25	104	314	447	840	2520
	黒斑病	0	8	75	364	447	840	2520
	萎縮病					-		
	べと病			3	95	98	840	2520
	軟腐病			3	95	98	840	840
	白絹病					-	840	840
	シロイチモジヨトウ	152	239	368	425	1184	840	1680
	ハスモンヨトウ					-	840	1680
	アブラムシ類				6	6	840	840
	ネギハモグリバエ		3	59	431	493	840	2520
	ネギアザミウマ	550	708	360	59	1677	840	2520
ネギコガ					-			
ざといも 762ha	汚斑病					-		
	モザイク病					-		
	疫病				11	11	150	300
	アブラムシ類	95	120	166	178	559	300	300
	ハダニ類					-		
ほうれんそう 1,817ha	ハスモンヨトウ					-	300	300
	べと病					-	1800	1800
	立枯病					-		
	アブラムシ類					-	200	200
	ハスモンヨトウ					-	200	200
	ヨトウガ					-	200	200
	ケナガコナダニ					-	200	200
シロオビノメイガ	108	131	214	323	776	200	200	
いちご 95ha	灰色かび病					-		
	うどんこ病				0	-	100	200
	モザイク病				0	-	100	200
	炭疽病					-		
	萎黄病					-	100	200
	アブラムシ類		0	3	13	16	100	200
	アザミウマ類		0	4	20	24	100	300
	コナジラミ類			0	8	8	100	100
	ハダニ類		0	4	21	25	100	300
ハスモンヨトウ			0	8	8	100	100	
チョウ目害虫			0	5	5	100	100	

(4) 令和6年度の病害虫発生予察情報等の発信

ア 病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況

(ア) 警報

なし

(イ) 注意報

発表年月日	内 容
令和6年4月15日	核果類（うめ、すもも等）・なし、ナシヒメシンクイ
令和6年5月10日	果樹全般、果樹カメムシ類
令和6年5月13日	野菜類・花き類、オオタバコガ
令和6年5月20日	ムギ類赤かび病
令和6年7月8日	イネ斑点米カメムシ類（イネカメムシ、ホソハリカメムシ）
令和6年7月12日	果樹全般、果樹カメムシ類
令和6年8月8日	ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ
令和6年8月28日	なし、ナシヒメシンクイ

(ウ) 特殊報

発表年月日	内 容
令和6年10月18日	トマトキバガの誘殺について
令和6年10月31日	チュウゴクアミガサハゴロモの発生について

(エ) 発生予報

予報月	発表年月日	予報月	発表年月日
5月	令和6年4月26日	11月	令和6年10月24日
6月	令和6年5月28日	12月	令和6年11月26日
7月	令和6年6月26日	1月	令和6年12月24日
8月	令和6年7月25日	2月	令和7年1月27日
9月	令和6年8月27日	3月	令和7年2月26日
10月	令和6年9月26日	4月	令和7年3月21日

(オ) 注意を促すための情報

a 病虫害防除情報

防除時期が限定される病虫害や予報に合わせ、特に注意を促す必要がある病虫害について病虫害防除情報としてホームページ上で発信した。

発表年月日	作物別	内 容
令和6年4月26日	普通作物	ムギ類赤かび病について
令和6年6月26日	普通作物	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）について
令和6年8月6日	特産	チャのチャノミドリヒメヨコバイについて

b 調査結果等

病虫害の適期防除を促すため調査結果をホームページ上で発信した。

発表時期	内 容
令和6年4月～ 令和7年3月	各種フェロモントラップ等データ
令和6年5月24日	麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果
令和6年6～8月	いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況
令和6年6～7月	気象予測データによるウンカ類飛来予測状況 （トビイロウンカ、セジロウンカ）
令和6年7月22日	いもち病発生状況調査結果
令和6年7月22日	水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果
令和7年1月16日	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果
令和7年3月12日	果樹カメムシ類の越冬密度調査結果
令和7年3月31日	イネカメムシ越冬状況調査結果

イ 発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病虫害発生現況報告等の外部への提供

国（植物防疫課）、関東農政局及び日本植物防疫協会に、発生予察情報（発生予報、注意報等）、病虫害発生現況報告等を提供した。

植物防疫に関するデータベースサービスであるJPP-NET（運用主体：日本植物防疫協会）によって、病虫害防除に関する情報交換を国及び他県等と行い、発生予察及び防除指導に活用した。

ウ 発生予察ツールを用いた発生消長予測情報の提供

県で開発したツールを用いて、気象台の気温観測データと害虫種ごとの発育パラメータから今後の害虫の発生消長を予測し、フェロモントラップデータとともにホームページを通じて情報提供した。

・ナシヒメシンクイ 提供日：6月19日、7月5日、7月22日

これらの他、ヒメトビウンカの越冬世代幼虫を対象としたイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査において、供試虫採集・ウイルス検定実施時期の決定にも用いた。

3 病虫害防除指導

(1) 病虫害防除手法等に関する相談

生産者、一般県民、県等指導機関（農協、市町村、農林振興センター）、その他団体や業者等から問い合わせ、相談、診断依頼のあった約 96 件の病虫害診断や防除手法に関する案件に対応した。

相談の種類	相談者区分（人数）				
	生産者	一般	県等指導機関	その他(業者・団体等)	計
病虫害（水稻・麦・大豆）	11	0	24	2	37
病虫害（野菜）	12	3	16	1	32
病虫害（果樹）	6	3	6	1	16
病虫害（茶）	0	0	1	0	1
病虫害（花植木）	0	0	3	0	3
農薬・その他	0	2	4	1	7
計	29	8	54	5	96

(2) 無人ヘリコプター等による空中散布等の指導

農林水産航空事業実施指導要領及び無人ヘリコプター利用技術指導指針に基づき、県内の 7,442.3ha で無人ヘリコプター等による空中散布が行われた。内訳は、産業用無人ヘリコプターが 7,152.2ha、マルチローター（ドローン）が 290.1ha で実施された。

水稻では、いもち病、紋枯病、ウンカ類、ヨコバイ類、カメムシ類等の病虫害防除のため 3,555.7ha、麦類では赤かび病等の病虫害防除のため 3,203.1ha、大豆では紫斑病、カメムシ類、ハスモンヨトウ等の病虫害防除のため 179.7ha であった。これら作物の延べ散布面積は 6,938.5ha で前年（6,741.0ha）に比べ 197.5ha 増加／減少した。また、その他として水稻の播種・追肥及び除草剤散布が 69.0ha、ゴルフ場の害虫防除が 144.7ha であった。

これら空中散布等の実施に当たり、予察情報による農薬の選定や安全な実施体制の啓発など実施主体に対し適切な防除指導を実施した。

(3) 県内市町村の病虫害防除協議会等における指導

1) 美里町無人ヘリ協議会

日時：令和 7 年 3 月 18 日（火）

対象者：関係会社、町、農業共済組合、JA 関係職員、県等指導機関職員

内容：気象経過と麦の生育状況に合わせた農薬散布時期の検討、適期防除指導

(4) 農薬展示ほ設置等に関する指導

（一社）埼玉県植物防疫協会が実施した農薬展示ほ等の設置に関し、設計の作成及び成績検討会において、農薬の防除効果の検証および結果の考察等に協力し、必要な助言等を行った。

(5) 研修会等の指導

- 1) 令和6年度農薬応用研修会
日 時：令和6年5月23日(木) JA全農さいたま東部総合センター(久喜市)
対象者：埼玉県内JAの営農指導中堅職員 20人
内 容：水稻・畑作物の病虫害発生動向と防除対策
- 2) 病虫害防除員・防除協力員研修会の実施
日 時：令和6年6月5日(水) 東松山地方庁舎、坂戸市現地水田
対象者：病虫害防除員・病虫害防除協力員等 15人
内 容：①イネカメムシ対策について
②侵入雑草ナガエツルノゲイトウの発生状況と防除
- 3) JA埼玉ひびきの「ねぎ一元出荷組合」における研修会講師
日 時：令和6年7月3日(水)
(JA埼玉ひびきの本店 ひびきのホール、本庄早稲田の社)
対象者：生産者、JA等職員、県職員等 50人
内 容：ネギで発生する病虫害の防除対策
- 4) 普及指導員を対象とした専門研修「病虫害」における講師
日 時：令和6年7月22日(月) 農業技術研究センター(本所)
対象者：農林振興センター(技術普及担当)職員等 16人
内 容：①農薬取締法の概要 ②農薬の適正使用、保管
- 5) 埼玉県農業大学校の講義における講師
日 時：令和6年10月3日(木)
対象者：農業大学校学生等 20人
内 容：講義科目「総合的病虫害管理」
病虫害の発生消長や予察情報の活用方法、天気図の見方
- 6) 埼玉県農薬適正使用アドバイザー研修会における講師
日 時：令和6年10月25日(金)
(さいたま市浦和区仲町 埼玉県県民健康センター)
対象者：農薬適正使用アドバイザー等 約300人
内 容：病虫害の発生生態と防除
- 7) JA埼玉中央管内水稻・高温対策・イネカメムシ対策会議
日 時：令和6年12月18日(水) JA埼玉中央南支店
令和6年12月20日(金) JA埼玉中央本店
対象者：生産者、JA等職員 約250人
内 容：本年の水稻病虫害発生状況と防除対策
- 8) 埼玉県農業機械化経営者協議会研修会
日 時：令和7年2月5日(水) 埼玉県県民活動総合センター
対象者：生産者、県農林部職員、農機メーカー等 約70人
内 容：イネカメムシの発生生態と防除対策

- 9) 令和6年度埼玉県植物防疫研修会における講師
日 時：令和7年2月14日（金）
（さいたま市大宮区北袋町 埼玉県農業共済会館）
対象者：農薬メーカー、JA等職員、県職員等 60人
内 容：2024年の埼玉県におけるカメムシ類の話題
- 10) 作物技術連携会議における病害虫防除指導
ア 日 時：令和6年5月30日（木）
対象者：普及指導員、県農林部関係課職員、県農業技術研究センター職員 約20人
内 容：イネカメムシの防除対策について
- イ 日 時：令和7年2月28日（金）
対象者：普及指導員、県農林部関係課職員、県農業技術研究センター職員 約20人
内 容：イネカメムシの越冬状況等について
- 11) 県農林部主催の会議における病害虫防除指導
ア イネカメムシ対策会議（農産物安全課）
日 時：①令和6年6月17日（月）
②令和6年11月29日（金）
対象者：農協・JA全農さいたま職員、市町村職員、普及指導員、
県農林部関係課職員、県農業技術研究センター職員 各回計約200人
内 容：イネカメムシの特徴・発生状況・防除対策について
- イ 水稻高温対策技術研修会（生産振興課）
日 時：令和6年6月28日（金）
対象者：農協・JA全農さいたま職員、普及指導員、県農林部関係課職員、
県農業技術研究センター職員 約60人
内 容：イネ縞葉枯病対策、イネカメムシ防除対策指導

（6）防除対策資料等の作成

イネカメムシ防除対策、農薬適正使用推進など農産物安全課の資料作成に協力し、現地の防除指導に活用した。

4 侵入警戒有害動植物の侵入調査

(1) フェロモントラップ調査

調査対象有害動植物	調査対象作物	設置場所	設置地点数	調査期間 (月～月)	調査回数／ 調査時期	延べ調 査回数	調査 結果
トマトキバガ	トマト	ほ場	5	4月～7月 9月～3月	月2回／栽培開始～ 収穫終了1月後	110	全地点 誘殺

(2) 目視調査

調査対象有害動植物	調査対象作物	調査場所	調査地点数	調査期間 (月～月)	調査回数／ 調査時期	延べ調 査回数	調査 結果
<i>Meloidogyne enterolobii</i>	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
<i>Columnnea latent viroid</i>	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
<i>Pepper chat fruit viroid</i> (PCFVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
トマト退緑萎縮ウイロイド (TCDVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
<i>Tomato apical stunt viroid</i> (TASVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
<i>Pepino mosaic virus</i> (PepMV)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
<i>Tomato brown rugose fruit virus</i> (ToBRFV)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
<i>Tomato mottle mosaic virus</i>	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
<i>Tomato leaf curl New Delhi virus</i> (ToLCNDV)	トマト	ほ場	3	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	3	疑義症 状なし
バナナネモグリセンチュウ	トマト	ほ場	3	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	3	疑義症 状なし
コロンビアネコブセンチュウ ウ栽植用植物	トマト	ほ場	2	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	2	疑義症 状なし
ジャガイモやせいもウイロ イド (PSTVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症 状なし
火傷病	なし	ほ場	3	4月～7月	2回／開花後1-2週 間及び果実形成期	6	疑義症 状なし
カンキツネモグリセンチュウ	トマト	ほ場	4	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	4	疑義症 状なし
<i>Xylella fastidiosa</i>	なし	ほ場	3	4月～9月	1回／展葉期～果実 肥大期	3	疑義症 状なし
イネミイラ穂病菌、イネク キセンチュウほか	いね	ほ場	2	7月～8月	1回／出穂前後	2	疑義症 状なし
テンサイシストセンチュウ	ほうれ んそう	ほ場	3	9月～2月	1回／生育期間中	3	疑義症 状なし
ヘシアンバエ	むぎ	ほ場	3	4月～5月 1月～3月	1回／生育期間中	3	疑義症 状なし
<i>Ramularia collo-cygni</i>	むぎ	ほ場	4	4月～5月	1回／開花期以降	4	疑義症 状なし
スイカ果実汚斑細菌病菌	きゅう り	ほ場	5	4月～6月 9～3月	2回／果実肥大期～ 収穫期	10	疑義症 状なし
ウメ輪紋ウイルス	うめ	ほ場	2	5月～7月	1回／新葉展開後	2	疑義症 状なし

(3) 新規病害虫まん延防止対策調査結果

- ・キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の春季調査結果

キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統は、平成 26 年 5 月に愛媛県において国内で最初の発生が確認され、平成 30 年には、国内で延べ 16 都県の発生が確認されている。

本県では、「キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の防除対策マニュアル」（平成 30 年 5 月 22 日改訂）に基づき、調査を実施している。

令和 6 年度は、本病の発生は確認されなかった。

5 農薬安全使用対策

(1) 農薬危被害防止対策

ア 農薬の安全かつ適正な使用の推進において、農薬使用の助言者として「農薬適正使用アドバイザー・農薬指導マスター」を県で認定するにあたり、効果的な農薬の使用方法、主要農作物における病虫害防除等の指導を行った。

農薬適正使用アドバイザー・農薬指導マスター認定者数（人）

項目\年度	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度
農薬適正使用アドバイザー	246	267	222	231	244
農薬指導マスター	207	200	186	152	139

イ 食品衛生法に関する農薬の残留調査結果に基づき、農薬の安全かつ適正な使用を指導した。

(2) 農薬販売者の届出店舗数及び立入検査結果

ア 届出件数

農薬取締法第17条第1項の規定に基づき、農薬を販売する者から提出された農薬販売届（新規・増設・変更・廃止）を受理した。

令和6年度の届出店舗数は377件であった。

令和6年度届出店舗数（令和6年4月～令和7年3月）

業種\項目	新規届	増設届	変更届	廃止届	販売者数	販売店舗数
農業協同組合	0	1	16	31	19	133
農薬卸	4	1	3	2	45	46
薬局・医薬品販売業	1	36	42	31	115	1,238
種苗商	1	0	3	6	82	84
肥料商	2	0	3	2	79	78
ホームセンター	21	1	22	24	20	172
インターネット	10	0	1	0	43	43
その他	16	11	54	29	253	530
計	55	50	144	125	656(※638)	2,324

※複数の業種を有する販売者がいるので、販売者の実数は638である。

イ 農薬販売者に対する立入検査結果

農薬の適正な販売を確保するため、農薬取締法第29条の規定に基づき、農薬販売者に対する立入検査（201件）を行った。

検査の結果、全体の16.9%に当たる延べ34店舗において指摘事項が認められ、是正指導を行った。

6 病害虫関係資料

(1) 令和6年度発表の病害虫発生予察注意報等

ア 注意報 (第1号、第2号、第3号、第4号、第5号、第6号、第7号、第8号)

イ 特殊報 (第1号、第2号)



令和6年度病害虫発生予察注意報第1号

令和6年4月15日

埼玉県病害虫防除所

県内のナシヒメシンクイのフェロモントラップへの誘殺数が平年を大きく上回る地点が複数見られ、多いところでは3.6～7.2倍となっております。

向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並のため今後活動が活発になると考えられます。(4月11日時点)

本虫は5月頃からうめ、すもも、なし等の新梢を加害し、芯折れの被害を発生させ、さらに7月頃になると次の世代がなしの果実を加害します。

幼虫が新梢や果実の内部に食入すると薬剤の効果が低下するため、食入前の薬剤防除に加え、交信攪乱剤等を利用した体系的な防除に努めましょう。

作物名 核果類(うめ、すもも等)、なし

病害虫名 ナシヒメシンクイ

1 注意報の内容

(1) 発生地域 県内全地域

(2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

(1) 病害虫防除所等が設置したナシヒメシンクイのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が5か所中4か所で平年を上回り、多い地点では平年の3.6～7.2倍の誘殺数になっている。(図1)

(2) 4月11日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されており、今後本虫の活動がさらに活発になると予想される。

(3) 越冬世代の虫数が多いため、世代を重ねるごとに発生量が増加し、今後の被害拡大が懸念される。

3 防除対策等

(1) うめ、すもも等では芯折れの被害を防ぐために、新梢の伸長時に発生予防に重点を置いて薬剤散布を行う。(表2)

(2) なし園周辺のうめ、すもも等は発生源になるため同時に防除を行う。

(3) 成虫の発生初期から交信攪乱剤を使用する。なお、多目的防災網を設置したうえで、広範囲の地域で使用すると効果的である。(表1)

(4) 食入後では薬剤の効果が低下するため、食入前の防除に重点を置く(表2、表3)。被害にあった新梢や果実は速やかに摘除し適切に処分する。

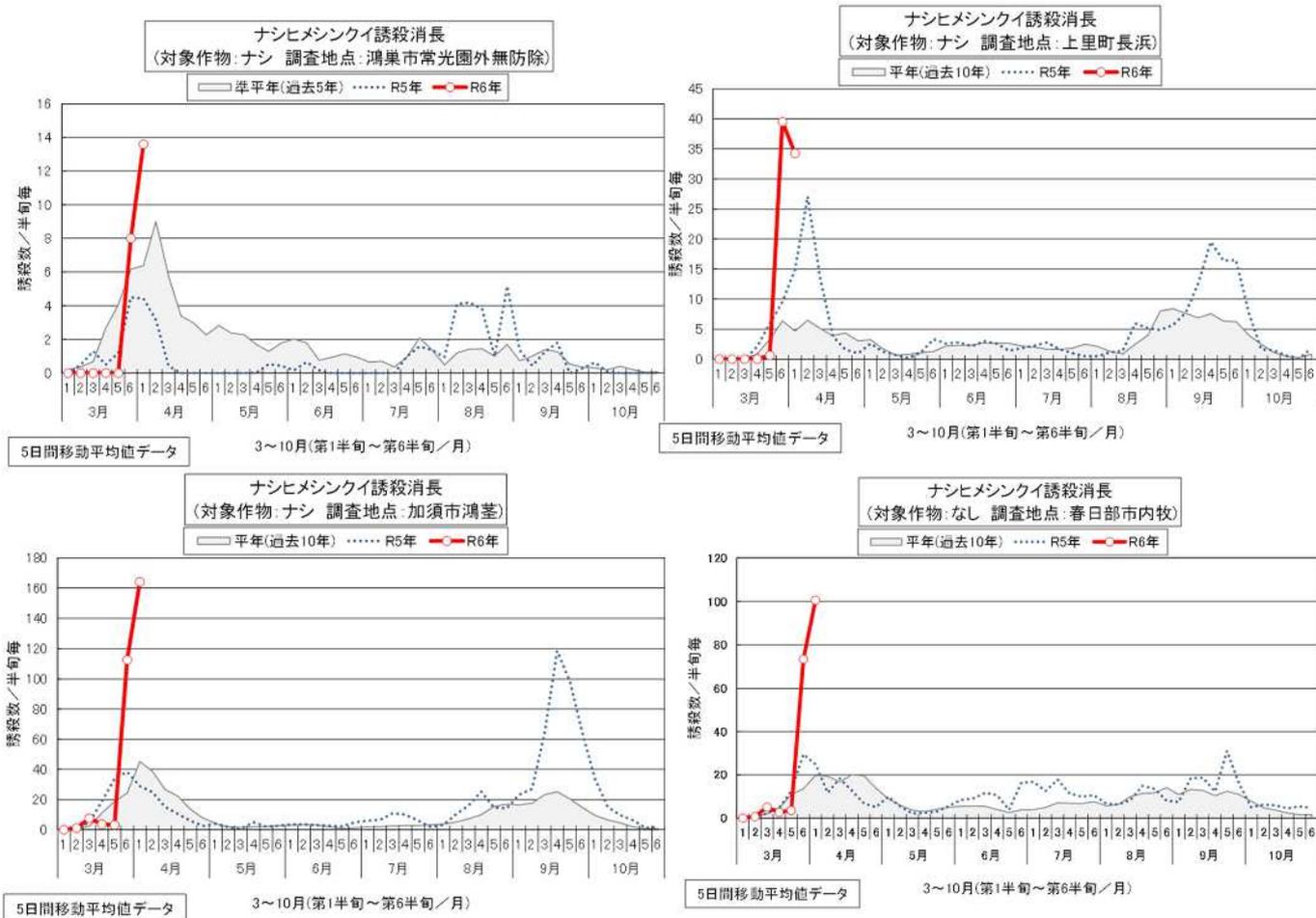


図1 ナシヒメシンクイ誘殺消長（鴻巣、上里、加須、春日部）

※フェロモントラップ等調査データ

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/pheromonetraps.html>



写真1 ナシヒメシンクイの成虫



写真2 なしの被害果

※ナシヒメシンクイの詳細については病害虫診断のポイントと防除対策を参照

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

表1 果樹類におけるシンクイムシ類の交信攪乱剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
コンフューザーN	—	成虫発生初期から終期	—

(使用基準は令和6年4月10日現在)

表2 小粒核果類におけるシンクイムシ類の防除薬剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
ダイアジノン水和剤34	1B	収穫21日前 まで	4回以内(すもも) 2回以内(小粒核果類)※
スタークル顆粒水溶剤	4A	収穫前日まで	3回以内
テッパン液剤	28	収穫前日まで	2回以内

※すももを除く小粒核果類

(使用基準は令和6年4月10日現在)

表3 なしにおけるシンクイムシ類の防除薬剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
モスピラン顆粒水溶剤	4A	収穫前日まで	3回以内
ヨーバルフロアブル	28	収穫前日まで	2回以内
アグロスリン水和剤	3A	収穫前日まで	3回以内
デリゲートWDG	5	収穫前日まで	2回以内

(使用基準は令和6年4月10日現在)

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。
<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintourokujouhou.html>
- 6 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいため、風のない日に適正な方法で散布する。

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



令和6年度病害虫発生予察注意報第2号

令和6年5月10日
埼玉県病害虫防除所

本年1～2月に実施したチャバネアオカメムシ等の果樹カメムシ類越冬密度調査における越冬虫数は過去10年で最多でした。このため、県内の果樹カメムシ類の予察灯への誘殺が、例年ではあまり確認されない4月から多く、4月の総誘殺数は多いところで平年の約25倍となっています。

また、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高いと予想されており、今後さらに果樹カメムシ類の活動が活発になると予想されます。(5月9日時点)

本虫の発生量が多い年は長期間にわたる飛来があるため、園内の発生状況をよく確認し、必要に応じて追加の薬剤防除を行いましょ。また、多目的防災網の早期展張などを行い総合防除に努めましょ。

作物名 果樹全般

病害虫名 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、アオクサカメムシ)

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 令和6年のチャバネアオカメムシの越冬量は過去10年で最も多く、平年の6.4倍となっています。(参照：[果樹カメムシ類の越冬密度調査](#))
- (2) 果樹カメムシ類の予察灯への誘殺が、例年ではあまり確認されない4月から多く、地点によっては4月の総誘殺数が平年の約20～25倍となっています。(参照：[フェロモントラップ等調査データ\(更新:5月7日\)](#))
- (3) 関東甲信地方の向こう1か月の気象予報では気温が高いと予想されており、今後の本虫の活動はさらに活発になることが予想されます。

3 防除対策等

- (1) 多目的防災網が設置されている園では早期展張を行いましょ。
- (2) 本虫の発生量が多い年は長期間にわたる飛来があるため、飛来を確認したら必要に応じて表1を参考に追加で薬剤防除を行いましょ。
- (3) ピレスロイド系薬剤(IRACコード:3A)は果樹カメムシ類への効果は高いですが、天敵への影響が大きいです。ハダニ類の増加につながる可能性があるため、なるべく連用は避けましょ。

(4) チャバネアオカメムシやツヤアオカメムシはスギやヒノキの球果を餌として繁殖します。スギやヒノキが近くにある山間部等では発生が多くなる可能性があるため注意しましょう。

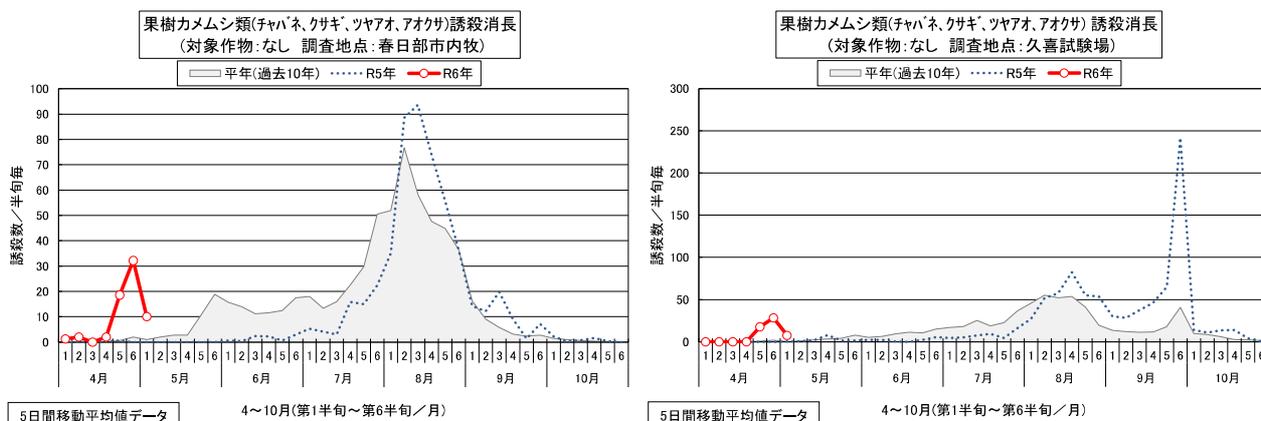


図 果樹カメムシ類の予察灯における誘殺消長（5月8日時点）
（左：春日部市、右：久喜市）



写真1 左：チャバネカメムシ成虫、右：ツヤカメムシ成虫



写真2 被害を受けたなし

表1 なしにおけるカメムシ類の防除薬剤例（使用基準は令和6年5月7日現在）

薬剤名	IRACコード	使用時期	使用回数
アディオオン乳剤	3 A	収穫前日まで	2回以内
アーデント水和剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
ダントツ水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
スタークル顆粒水溶剤 または アルバリン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
テッパン液剤	2 8	収穫前日まで	2回以内

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいため、風のない日に適正な方法で散布する。
- 6 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）から検索できます。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ （令和6年5月1日～8月31日）

4 問合せ先

埼玉県病虫害防除所 電話：048-539-0661



令和6年度病害虫発生予察注意報第3号

令和6年5月13日
埼玉県病害虫防除所

県内のオオタバコガのフェロモントラップによる誘殺数が、4月下旬から急増し多いところでは平年の約41倍となりました。また、調査を行っている4地点全てにおいて、発生量が多かった昨年度をさらに上回る誘殺数となっています*。

本虫は野菜、花きを中心として50種類近い作物を加害しますが、本県で被害が懸念される作物は、ナス、スイートコーン、イチゴ、キク、ガーベラ、宿根アスター、シャクヤクなどです。

幼虫は卵からふ化すると直ちに植物の内部へ食入するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

※今年度よりフェロモントラップの種類を粘着トラップからファネル型トラップに変更していますが、その影響を加味しても誘殺数が多い状況です。

作物名 野菜類、花き類
病害虫名 オオタバコガ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したオオタバコガのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、4か所すべて（本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町）で平年の約8～41倍と多く、全地点で注意報を出した昨年を上回る増加傾向が見られる（図）。
（参照：[フェロモントラップ等調査データ（更新：5月7日）](#)）
- (2) 5月9日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は多いと予想されている。
- (3) 昨年度多発したことに加え、暖冬で経過したことから本虫の密度が高いと考えられる。高温の影響で今後本虫の活動がさらに活発となり、被害多発が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に幼虫がいる可能性が高いため、発見しだい捕殺する。
- (2) 摘芯した腋芽や花蕾などには卵が産みつけられていたり、若齢幼虫が潜んでいたりとすることがあるため、株元などに放置せず、ほ場外で処分する。
- (3) 施設栽培では、開口部に寒冷紗等（5mm目程度の防虫ネット）を張って、成虫の侵入を防ぐ。

- (4) 幼虫が植物体内に食入してしまうと薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (5) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける(表1、表2)。

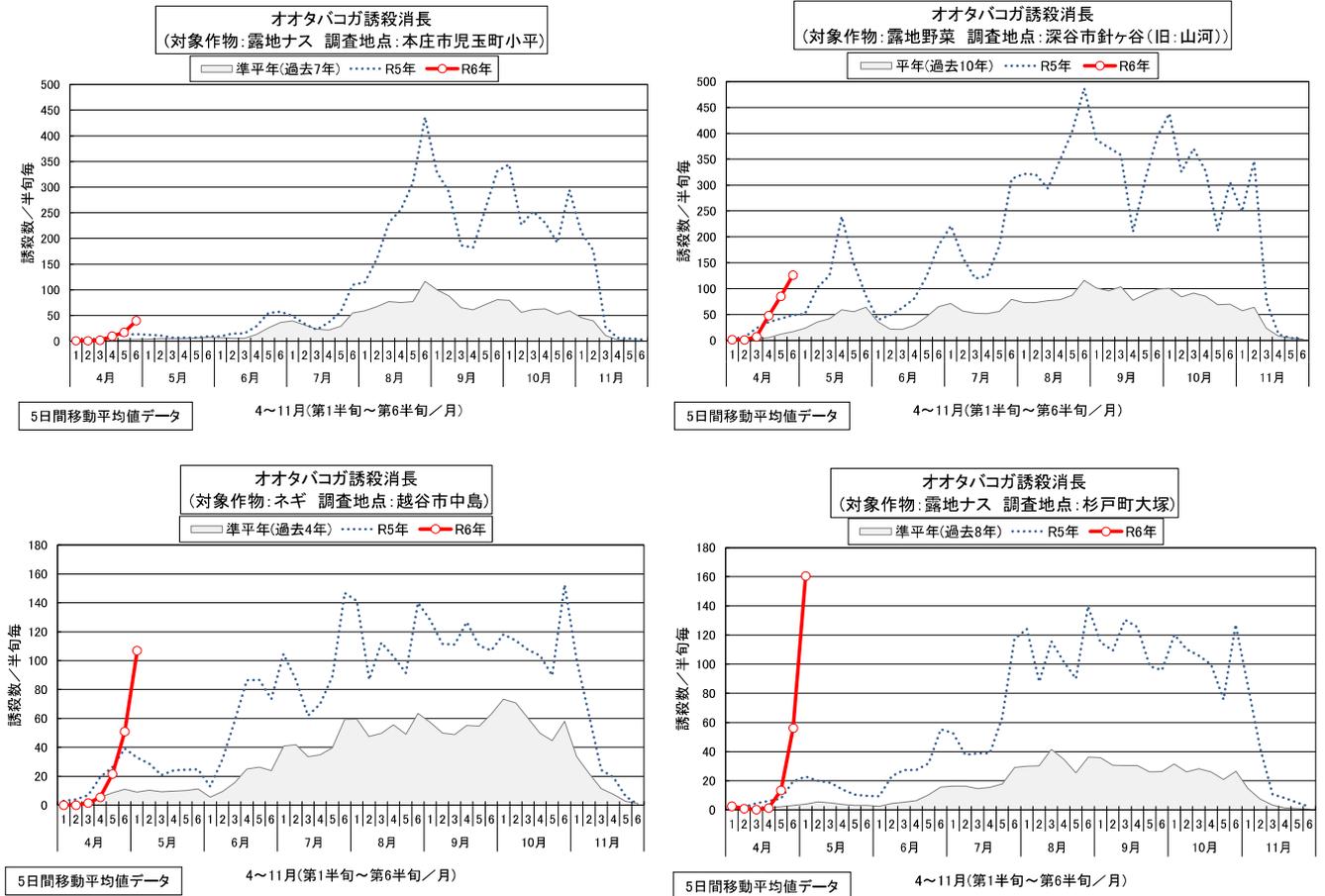


図 オオタバコガのフェロモントラップにおける誘殺消長 (5月8日時点)
(左上から本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町)



表1 ナスにおけるオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アニキ乳剤	6	収穫前日まで	3回以内
カウンター乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
マトリックフロアブル	1 8	収穫前日まで	3回以内
アクセルフロアブル	2 2 B	収穫前日まで	3回以内
ヨーバルフロアブル	2 8	収穫前日まで	3回以内
グレーシア乳剤	3 0	収穫前日まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	4回以内
デルフィン顆粒水和剤*	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—

※作物名「野菜類」として登録

(使用基準は令和6年5月8日現在)

表2 スイートコーン（未成熟とうもろこし）におけるオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アフーム乳剤	6	収穫3日前まで	2回以内
カスケード乳剤	1 5	収穫7日前まで	2回以内
ベネビアOD	2 8	収穫前日まで	3回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	2回以内
ゼンターリ顆粒水和剤*	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—

※作物名「とうもろこし」として登録

(使用基準は令和6年5月8日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)から検索できます。



※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ （令和6年5月1日～8月31日）

- 4 問合せ先
埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661
(ホームページ：右のQRコードか[本リンク](#)よりアクセス)

埼玉県病害虫防除所



埼玉県マスコット「コバトン」「さいたまっち」



令和6年度病害虫発生予察注意報第4号

令和6年5月20日
埼玉県病害虫防除所

本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月30日までの積算日数が16日(平年同期8.1日)と過去10年で最も多く、11月下旬以降に播種した小麦が最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致しています。

当所が実施している5月中旬の病害虫発生状況調査では、各調査地点で各麦種とも本病の発生が見られ、5月中旬の発生量は過去10年で最も多くなっています。

5月6日以降も降雨日が多く病原菌が繁殖しやすい状況で、4月30日、5月7日及び5月16日には赤かび病多発生好適日も出現しており、本病の急速な蔓延が懸念されます。

小麦で発生が見られるほ場では、追加の防除を実施しましょう。

作物名 ムギ類

病害虫名 赤かび病

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月30日までの積算日数が16日(平年同期8.1日)と過去10年で最も多くなっている。特に、4月17日から5月3日まで17日間連続で子のう胞子飛散好適日が出現しており、11月下旬以降に播種した小麦では最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致している。
- (2) 当所が実施している5月中旬の病害虫発生状況調査では、各調査地点で各麦種とも本病の発生が見られ、5月中旬の発生量は過去10年で最も多く、平年比「多」となった。
- (3) 5月6日以降も降雨日が多く病原菌が増殖しやすい状況で、4月30日、5月7日及び5月16日には赤かび病多発生好適日も出現している。
- (4) 週間天気予報では、5月20日以降も多発好適日になりやすい暖かい降雨日が

あることが予想されており、本病の急速な蔓延と病勢進展が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 現在発生が見られる小麦ほ場では、蔓延防止のため収穫前日数及び使用回数に注意して、早急に薬剤による追加防除を実施する。
- (2) 刈遅れにより麦類が降雨に当たると、本病の進展等を助長する原因となるため、適期に確実に収穫する。
- (3) 収穫前にはほ場を確認し、赤かび病発生が多い場合や発生ほ場で倒伏が生じている場合は、赤かび病や倒伏の被害を受けていない他の麦とは分けて収穫する。
- (4) 収穫に用いる農機やコンテナ等は、作物残さがないよう清掃し清潔に保つ。輸送に当たっては、乾燥した状態のコンテナ等を使用し、急な降雨による水濡れ防止のために覆い等を用意する。
- (5) 収穫後、適切な水分まで乾燥する間に赤かび病菌が増殖してしまう場合があるため、収穫した麦は可能な限り速やかに乾燥調製施設に搬入し乾燥させる。



写真1 小麦の被害穂(数粒のみの発病～穂全体の発病)



写真2 穂に生じたサーモンピンクの胞子塊



写真3 六条大麦の被害穂

表 ムギ類赤かび病の防除薬剤例(地上散布及び無人航空機散布両対応)

薬 剤 名	FRAC コード	対象作物	使用時期	使用回数
ファンタジスタフロアブル	11	小麦	収穫 14 日前まで	3 回以内
トップジンMゾル	1	小麦	収穫 14 日前まで	出穂期以降は 2 回以内
ミラビスフロアブル	7	小麦	収穫 7 日前まで	2 回以内
シルバキュアフロアブル	3	小麦	収穫 7 日前まで	2 回以内
ワークアップフロアブル	3	麦類	収穫 7 日前まで	3 回以内

(使用基準は令和 6 年 5 月 17 日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和 6 年 5 月 1 日～ 8 月 3 1 日）

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



令和6年度病害虫発生予察注意報第5号

令和6年7月8日
埼玉県病害虫防除所

県東部の水稲用乾式予察灯において、イネカメムシが7月3日までに122頭誘殺されており、多発した昨年の総誘殺数(114頭)をすでに超えています。県東部及び東北部の早期栽培「あきたこまち」で、出穂後のイネカメムシの集中的な加害が各地から報告されています。

また、畦畔等のイネ科雑草へのイネカメムシ及びホソハリカメムシの大量寄生が確認されており、イネの斑点米の発生が懸念されますので、出穂期から乳熟期にかけての防除と定期的な除草を行ってください。

なお、出穂前2週間と出穂後2週間の、生息地(畦畔、雑草地、休耕田など)の除草は、カメムシ類を水田に追い込み、斑点米の発生を助長させるので避けましょう。

作物名 イネ

病害虫名 斑点米カメムシ類(イネカメムシ、ホソハリカメムシ)

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 県東部の水稲用乾式予察灯において、イネカメムシを6月24日に初誘殺した後、7月3日までに122頭誘殺されており、多発した昨年の誘殺数(初誘殺7月1日、9月までの総誘殺数114頭)をすでに超えている。
- (2) 県東部及び東北部の早期栽培「あきたこまち」で、出穂後のイネカメムシの集中的な加害が各地で報告されているほか、未出穂田のタイヌビエ、畦畔のセイバンモロコシ等のイネ科雑草及び幼穂形成期のコシヒカリへのイネカメムシの大量寄生が確認されている。
- (3) 本年は春先に例年は見ないホソハリカメムシのムギ類への寄生が県東北部を中心に確認されており、現在でも県内各地で畦畔雑草等のすくい取り調査でホソハリカメムシの捕獲数が平年より多い。
- (4) 7月4日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多いと予想されており、今後も斑点米カメムシ類の発生に好適な条件が継続し、多発生が予測される。

3 防除対策等

- (1) イネカメムシ、ホソハリカメムシなど比較的大型のカメムシ類は、寄生頭数が少ない場合でも大きな被害につながる可能性があるため、これらの大型種を本田で確認した場合は、必ず薬剤による防除を実施する。
- (2) 出穂期～開花期頃にイネカメムシの集中加害を受けると著しい不稔が発生することがあるため、イネカメムシの多発ほ場では、出穂期～穂揃期（不稔対策）及び出穂期の7～10日後（斑点米対策）の2回、薬剤による防除を実施する。
- (3) 生息場所の水田畦畔や休耕田等の雑草管理（除草）を丁寧に行う。ただし、斑点米カメムシ類を水田へ追い込み被害が拡大する恐れがあるので、出穂前2週間と出穂後2週間は除草を行わない。
- (4) 周辺より出穂の早い品種・作型、あるいは周辺より出穂の遅い品種・作型では、被害が集中しやすいので防除を徹底する。
- (5) 農薬による蜜蜂への影響を軽減させるために、蜜蜂の活動が最も盛んな時間帯（午前8時～12時まで）を避け、可能な限り早朝又は夕刻に行うなどの対策を講じる。



写真1 イネカメムシ成虫(体長約 12mm)



写真2 イネカメムシによる斑点米



写真3 開花期の「あきたこまち」を集中的に加害するイネカメムシ（写真提供：JA ほくさい）



写真4 未出穂田のタイヌビエに寄生するイネカメムシ



写真5 ホソハリカメムシ成虫(体長約 10mm)



写真6 メシバの穂を吸汁するホソハリカメムシ

表 稲のカメムシ類の防除薬剤例(地上防除・無人航空機防除両対応)

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
キラップフロアブル	2B	収穫 14 日前まで	2 回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫 7 日前まで	3 回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫 7 日前まで	2 回以内
スタークル1 キロH粒剤	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内

(使用基準は令和6年7月5日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和6年5月1日～8月31日）

- 4 問合せ先
埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



令和6年度病害虫発生予察注意報第6号

令和6年7月12日
埼玉県病害虫防除所

県内の果樹カメムシ類の予察灯による誘殺数が、調査全地点で平年を大きく上回っております。令和6年5月10日に注意報（令和6年度第2号）を公表しましたが、依然として多い状況が続いております。

また、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高いと予想されており（7月11日時点）、例年果樹カメムシ類が最も多く発生する7月中旬頃～8月頃にかけてさらなる多発生が予想されます。

本虫に加害された果実は表面がへこみ、内部がスポンジ状になる等、商品価値が大きく低下します。果実肥大期に加害されると奇形果になる場合があります。

園内での発生を確認したら追加の薬剤防除を行いましょう。

作物名 果樹全般

病害虫名 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 県内3か所に設置してある予察灯において、全地点で誘殺数が平年を上回っており、4月～6月までの総誘殺数は平年の約3.5倍～9.1倍となっております。（参照：[フェロモントラップ等調査データ（更新：7月5日）](#)）
- (2) 寄居町に設置しているフェロモントラップにおいても平年より多い誘殺数となっております。（図）
- (3) 関東甲信地方の向こう1か月の気象予報では気温が高いと予想されており、今後の本虫の活動はさらに活発になることが予想されます。

3 防除対策等

- (1) 多目的防災網が設置されている園では必ず展張するとともに、破れや隙間の有無を点検しましょう。
- (2) 8月頃から当年世代成虫の発生が始まり、発生量の増加が予想されるため、飛来を確認したら表1・2を参考に必要に応じて追加で薬剤防除を行いましょう。

(3)ピレスロイド系薬剤（IRACコード：3A）は果樹カメムシ類への効果は高いですが、天敵への影響が大きいです。ハダニ類の増加につながる可能性があるため、なるべく連用は避けましょう。

(4)チャバネアオカメムシやツヤアオカメムシはスギやヒノキの球果を餌として繁殖します。球果の硬化や劣化により餌として利用しにくくなるとスギやヒノキから離れて果樹園へ飛来しやすくなります。スギやヒノキが近くにある山間部等では発生が多くなる可能性があるため注意しましょう。

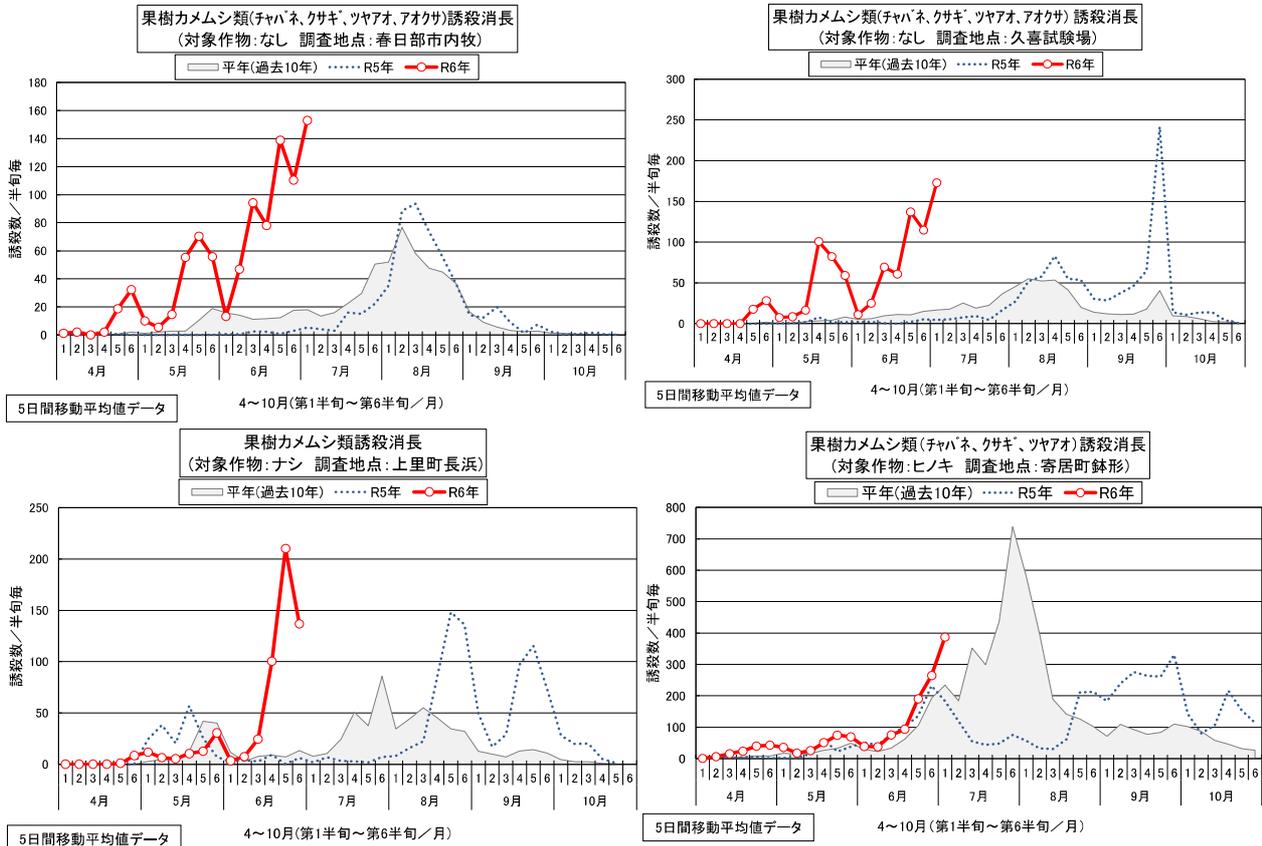


図 予察灯・フェロモントラップにおける誘殺消長（7月10日時点）

（左上：春日部市、右上：久喜市、左下：上里町、右下：寄居町（フェロモントラップ））



写真1 左：チャバネカメムシ、中央：クサギカメムシ、右：ツヤカメムシ



写真2 被害を受けたなし

表1 なしにおけるカメムシ類の防除薬剤例（使用基準は令和6年7月10日現在）

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
アディオン乳剤	3 A	収穫前日まで	2回以内
アーデント水和剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
アクタラ顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
ダントツ水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
スタークル顆粒水溶剤 または アルバリン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
テッパン液剤	2 8	収穫前日まで	2回以内

表2 ぶどうにおけるカメムシ類の防除薬剤例（使用基準は令和6年7月10日現在）

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
スタークル顆粒水溶剤または アルバリン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
ベニカ水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
テッパン液剤	2 8	収穫前日まで	2回以内

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいため、風の無い日に適正な方法で散布する。
- 6 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）から確認できます。
<https://pesticide.maff.go.jp/>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和6年5月1日～8月31日）

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



彩の国
埼玉県

令和6年度病害虫発生予察注意報第7号

令和6年8月8日
埼玉県病害虫防除所

県内のシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が、調査4地点中の3地点で多く、平年及び準平年との比較ができる3地点中の2地点で平年を大きく上回っています。この2地点では多発した昨年より多くなっています※。すでに、ネギやダイズで幼虫による食害が確認されています。

本虫は野菜、花きを中心として60種類以上の作物を加害するため、今後ブロッコリー等への被害も懸念されます。

とくに、ネギでは幼虫が葉身内へ食入してしまうと、薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

※今年度よりフェロモントラップの種類を粘着トラップからファネル型トラップに変更していますが、その影響を加味しても誘殺数が多い状況です。

作物名 ネギ、ブロッコリー、ダイズ
病害虫名 シロイチモジヨトウ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、4地点中3地点で多い。平年及び準平年との比較が可能な3地点中の2地点では平年を大きく上回って推移し、注意報を出した昨年を上回る増加傾向が見られる(図)。
- (2) 8月1日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高いと予想されており、今後の本虫の活動がさらに活発になることが予想される。
- (3) ネギおよびダイズほ場において、幼虫による食害が確認されている。今後、定植期となるブロッコリー等の他作物でも被害拡大が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 早期発見に努め、卵塊やふ化直後の1～2齢幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除き、ほ場外で適切に処分する。

- (2) 幼虫が作物内に食入すると薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (3) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、抵抗性害虫の発生を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を避ける(表1～3)。

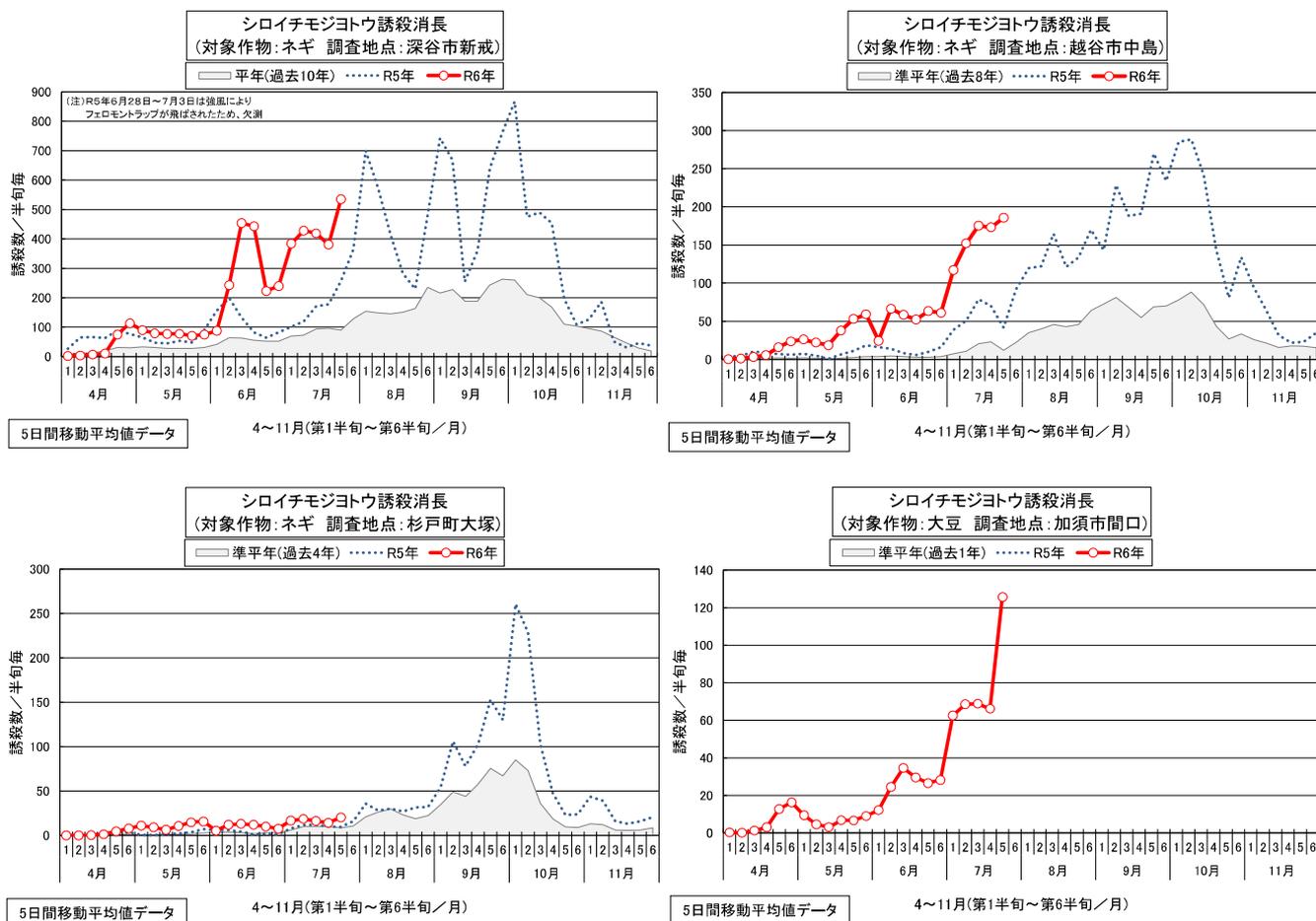


図 シロイチモジヨトウ誘殺消長 (左上：深谷市、右上：越谷市、左下：杉戸町、右下：加須市*) ※加須市はR6年からの調査のため当年データのみ



写真1 ふ化直後のシロイチモジヨトウ若齢幼虫(ネギ葉)



写真2 ネギを食害するシロイチモジヨトウ中齢幼虫



写真3 ブロッコリー葉を食害する
シロイチモジヨトウ老齢幼虫



写真4 ダイズ葉を食害する
シロイチモジヨトウ老齢幼虫

表1 ネギのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アディオソ乳剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
スピノエース顆粒水和剤	5	収穫3日前まで	3回以内
アフームエクセラ顆粒水和剤	6、15	収穫7日前まで	3回以内
コテツフロアブル	13	収穫7日前まで	2回以内
ロムダンフロアブル	18	収穫7日前まで	3回以内
トルネードエースDF	22A	収穫14日前まで	2回以内
ベネビアOD	28	収穫前日まで	3回以内
グレースィア乳剤	30	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和6年7月24日現在)

表2 ブロッコリーにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アニキ乳剤	6	収穫3日前まで	3回以内
ジャックポット顆粒水和剤	11A	発生初期 但し、収穫前日まで	—
コテツフロアブル	13	収穫3日前まで	2回以内
ブロフレアSC	30	収穫前日まで	3回以内

(使用基準は令和6年7月24日現在)

表3 ダイズにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
プレオフロアブル	UN	収穫7日前まで	2回以内
デルフィン顆粒水和剤	11A	発生初期 但し、収穫前日まで	—

(使用基準は令和6年7月24日現在)

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和6年5月1日～8月31日）

- 4 問合せ先
埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



令和6年度病害虫発生予察注意報第8号

令和6年8月28日
埼玉県病害虫防除所

県内のナシヒメシンクイのフェロモントラップへの誘殺数が複数の地点で平年を大きく上回っております。令和6年4月15日に注意報（令和6年度第1号）を発表しましたが、世代を重ねるにつれ増加し、7～8月頃にかけて、誘殺数の増加が顕著になってきます。向こう1か月の気温は高い予報のため、さらなる多発生が予想されます。（8月22日時点）

本虫はなしの果実に産卵し、ふ化した幼虫は果実内部を食害します。

フェロモントラップでの誘殺数は、例年の7・8月はそれほど多くはありませんが、本年は誘殺数が多いことから晩生品種での被害が懸念されます。速やかな防除に努めましょう。

作物名 なし

病害虫名 ナシヒメシンクイ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所等が設置したナシヒメシンクイのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が複数か所で平年を上回り、多い地点では8月の総誘殺数が平年の3.7～4.8倍になっている（8月21日時点）。（図）
- (2) 8月22日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高いと予想されており、本虫の活動が活発な状態が継続すると予想される。
- (3) 例年ではそれほど目立たない7～8月の誘殺数が多いため、これから収穫を迎える品種（豊水、あきづき等）での加害が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 交信攪乱剤を5月中に設置した園では、発生状況や収穫状況に応じて追加の設置を検討する（表1）。
- (2) 食入後では薬剤の効果が低下するため、食入前の防除に重点を置く。薬剤防除を行う際には収穫前日数と使用回数に注意して散布を行う（表2）。
- (3) 被害にあった果実は速やかに摘除し適切に処分する。

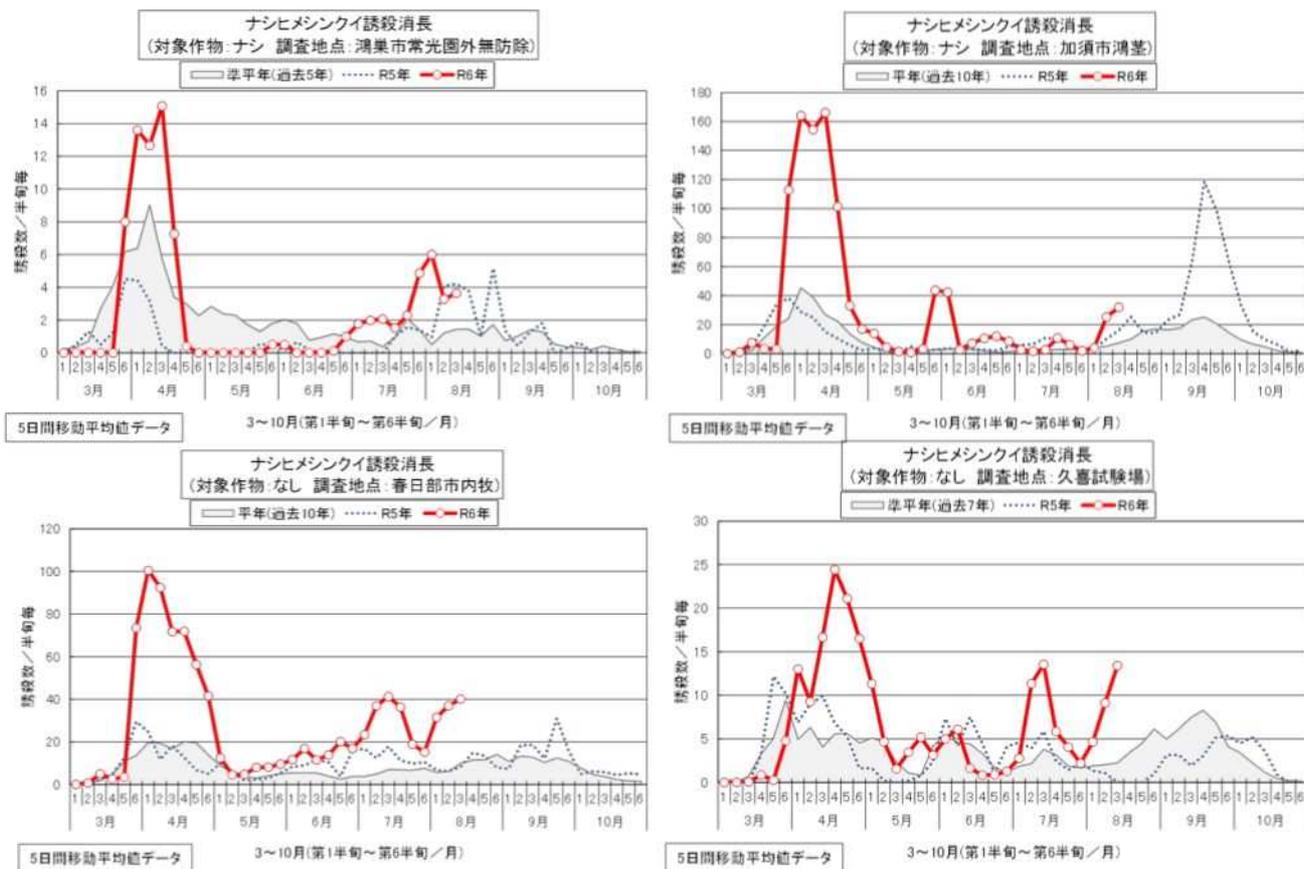


図 ナシヒメシクイ誘殺消長（鴻巣、加須、春日部、久喜）

※フェロモントラップ等調査データ

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/pheromonetrapp.html>



写真1 ナシヒメシクイの成虫



写真2 ナシヒメシクイの幼虫と被害果

※ナシヒメシクイの詳細については病害虫診断のポイントと防除対策を参照

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

表1 果樹類におけるシンクイムシ類の交信攪乱剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
コンフューザーN	—	成虫発生初期から終期	—

(使用基準は令和6年8月23日現在)

表2 なしにおけるシンクイムシ類の防除薬剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
ロディー水和剤	3 A	収穫前日まで	2回以内
テルスターフロアブル	3 A	収穫前日まで	2回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
フェニックスフロアブル	2 8	収穫前日まで	2回以内
ディアナWDG	5	収穫前日まで	2回以内

(使用基準は令和6年8月23日現在)

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>
- 6 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいため、風の無い日に適正な方法で散布する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和6年5月1日～8月31日）

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661

トマトキバガの誘殺について

県内に設置した性フェロモントラップにおいて、本種と疑われる成虫が誘殺された。農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、県内未発生のトマトキバガであると確認された。

* 特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発生消長に特異な現象が認められた場合であって、従来と異なる防除対策が必要となるなど、生産現場への影響が懸念される場合に発表するものです。

1 害虫名 トマトキバガ *Tuta absoluta* (Meyrick)

2 対象作物 ー

3 誘殺確認の経緯及び国内での状況

- (1) 令和6年10月2日に、県内5地点に設置したトマトキバガ侵入調査用のフェロモントラップのうち2地点において、本種と疑われる成虫が複数誘殺された（写真1）。農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、本県で未発生のトマトキバガと同定された。
- (2) 県内の農作物における本種幼虫の発生及び被害は認められていない。
- (3) 本種は、国内では令和3年10月に熊本県で確認されて以降、フェロモントラップ調査等によって、関東の一部の県を除き、これまでに本県を含めて合計45都道府県で誘殺が確認されている。

4 本種の特徴及び生態

- (1) 成虫は、開張約10mm、前翅長約5mm。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在する。後翅は一律に淡黒褐色、翅頂下でえぐれる（写真2）。
- (2) 終齢幼虫の体長は約8mm。体色は淡緑色～淡赤白色。頭部は淡褐色。前胸の背面後方に細い黒色横帯が確認できる（写真3）。
- (3) 成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。1年に複数世代が発生するため、繁殖力が非常に強いことが知られている。

5 被害の特徴

- (1) トマトでは、葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成される。食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる（写真4）。
- (2) 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じる（写真5）。

6 防除対策

- (1) ほ場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。本種と疑われる害虫や食害を発見した場合は、速やかに埼玉県病害虫防除所まで連絡する。
- (2) 被害葉や被害果等が発見した場合はほ場に放置せず、土中深くに埋めるか、ビニル袋等に入れて密封することで、成幼虫を死滅させたうえで、適切に処分する。
- (3) 施設栽培では、出入口のほか、側窓や天窗等の開口部に防虫ネットを展張する。
- (4) トマトまたはミニトマトでは、トマトキバガに登録のある防除薬剤を使用する。なお、農薬を使用する際は必ず最新の情報を確認し、使用基準を遵守する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統（IRAC コード）が異なる薬剤でローテーション散布を行う。



写真1：フェロモントラップに誘殺された雄成虫



写真2 トマトキバガ成虫



写真3 トマトキバガ終齢幼虫



写真4 トマトの被害葉（飼育個体）



写真5 トマトの被害果（飼育個体）

(写真2～5は、農林水産省植物防疫所原図)

<p>令和6年度 発生予察情報</p>	<p>特殊報第2号</p>	<p>令和6年10月31日 埼玉県病害虫防除所 (TEL:048-539-0661)</p>
-------------------------	----------------------	--

チュウゴクアミガサハゴロモの発生について

県内の複数地域において、ハゴロモ類の発生と複数の農作物で産卵痕が確認された。加害虫について農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、チュウゴクアミガサハゴロモであることが判明した。

* 特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合であって、従来と異なる防除対策が必要となるなど、生産現場への影響が懸念される場合に発表するものです。

- 1 害虫名 チュウゴクアミガサハゴロモ *Ricania shantungensis* (Chou & Lu, 1977)
- 2 対象作物 チャ、ナシ、ブルーベリー、カンキツ、カキ、宿根アスター
- 3 発生確認の経緯及び発生状況
 - (1) 令和6年9月から10月にかけて、県内の経済栽培されている複数の農作物において、ハゴロモ類の成虫・幼虫と枝への産卵が確認された。一部の個体を採取し、農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、チュウゴクアミガサハゴロモであることが判明した。
 - (2) 本種は中国を原産地としており、韓国、トルコ、フランス、ドイツおよびイタリアに外来種としての侵入が確認されている。国内では2017年に初確認されて以降、本州、九州及び四国の各地で発生が報告されている。また、神奈川県より本年8月に発表された病害虫発生予察特殊報においてブルーベリー枝への加害が報告されている。
- 4 本種の特徴及び生態
 - (1) 成虫の翅端までの体長は14~16mm、前翅長14mm程度で、前翅は茶褐色から鉄さび色であり、前翅前縁中央部に三角形の白斑が存在する(写真1、2)。
 - (2) 幼虫は白色で、腹部から白い糸状の蠟物質の毛束を広げる。また虫体の背面に小黑点を有し、翅芽は褐色である(写真3)。
 - (3) 本種は広食性であり、カバノキ科、クワ科、ブナ科、マメ科、モクセイ科等の様々な植物を宿主として利用することが知られている。本県では、ツバキ科、バラ科、ツツジ科、カキノキ科等の樹種およびキク科の草本植物における寄生および産卵を確認している。
- 5 被害の特徴
 - (1) 成虫および幼虫が枝を吸汁加害し、発生が多いと排泄物によるすす病が発生する。
 - (2) 成虫は寄主植物の枝に、多数の卵を規則正しく配列された状態で産み付けるため、枝の組織を損傷し、植物体を衰弱させる(写真4)。
 - (3) 産卵痕は白色で毛状の蠟物質で被覆される(写真5)。

6 防除対策

- (1) 令和6年10月現在、対象作物において本虫を対象とした登録農薬はない。
- (2) 産卵された枝を発見した場合は放置せず、切除して土中深くに埋めるか、焼却するなどして適切に処分する。
- (3) 当年枝の上部に産卵される場合が多いため、樹種の特徴に合わせて秋季の整枝や冬季の剪定を十分に励行し、耕種的防除につとめる。
- (4) 本種は多くの植木類にも産卵することが確認されている。対象作物以外の樹木類で産卵を確認した場合は、防除対策(2)のとおり適切に処分する。



写真1 成虫



写真2 チャ枝上で産卵中の雌成虫



写真3 幼虫



写真4 枝内の卵 (矢印)



写真5 カンキツにおける産卵跡



病虫害防除情報

コバトン

令和6年4月26日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 ムギ類赤かび病について

2 情報内容

(1) ムギ類赤かび病の病徴について

ムギ類赤かび病は北海道から九州まで、全国各地に発生する病害で、カビが原因で発生します。幼苗、茎、葉、葉鞘等にも発生しますが、穂での発生が最も問題となります。

穂では、乳熟期ころから穂の一部または全体が褐変し、穎（えい）の合わせ目に桃色～橙色の胞子を生じるのが特徴です。穂軸や穂首が侵されて部分的あるいは穂全体が白穂になることもあります。発生が甚だしいときは、罹病子実は白っぽい屑麦や不稔粒となり、大きな減収となることがあります。

赤かび病菌は毒素を産生することから、罹病子実を多く含んだものを食用や飼料に用いると、人や家畜に中毒症状を起こすことがあります。このため、食品衛生法でかび毒の基準が定められており、赤かび粒が混入すれば出荷できません。



六条大麦の被害穂



小麦の被害穂

(2) 病原の特徴及び伝染

ムギ類の穂に胞子が作られ、その後、黒色の小粒が生じます。病原菌は罹病したムギの被害穂の他、ムギわら、イネわら、イネやトウモロコシの刈り株などで越冬します。越冬した病原菌は翌春、胞子を再形成し、これが飛散してムギ類に感染、

発病を起こします。種子伝染・土壌伝染することもあります。

本県奨励品種のうち、小麦「あやひかり」「さとのそら」及びはだか麦「イチバンボシ」の本病抵抗性は「中」、小麦「ハナマンテン」及び六条大麦「すずかぜ」の本病抵抗性は「弱」とされており、罹病しやすいので注意が必要です。



穂に生じたサーモンピンクの胞子

(3) 胞子飛散好適日の出現状況

本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月24日までの積算日数が10日(平年同期5.9日)で、過去10年で2番目に多くなっています。特に、4月17日～24日は8日間連続で子のう胞子飛散好適日が出ています。

本年は、11月下旬～12月上旬に播種した「さとのそら」の出穂期が4月10日～15日頃と見られ、最も感染しやすい開花期(出穂7～10日後)と子のう胞子飛散好適日が完全に一致しているため、赤かび病の多発生が懸念されます。

表1 赤かび病の発生に好適な気象条件の出現状況(熊谷)

日付(2024年4月)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
子のう穀形成好適日	○	○		○		○	○	○									○	○	○	○	○	○	○	○	
子のう胞子飛散好適日				●				●									●	●	●	●	●	●	●	●	
飛散好適日積算日数(4月1日～)	本年	0	0	0	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	平年	0.2	0.3	0.4	0.6	0.7	1.0	1.2	1.4	1.4	1.5	1.6	1.8	2.0	2.1	2.5	2.7	3.1	3.7	4.1	4.3	4.5	5.1	5.5	5.9

○ 子のう穀形成好適日 : 平均気温が13℃以上で降雨直後(前日または当日)

● 子のう胞子飛散好適日 : 最高気温が15℃以上かつ最低気温が10℃以上で、湿度80%以上または降雨直後(前日または当日)

(4) 防除対策

本病の防除は、開花期の薬剤散布が基本です。防除適期の目安は、小麦では出穂の7～10日後、六条大麦では穂揃期、二条大麦(ビール麦)では穂揃期の10日後頃となります。11月下旬～12月上旬まき小麦は、現在防除適期となっているほ場が多いので、早急に防除してください。

大麦など4月中旬に開花期防除を実施してその後降雨が続いたほ場、あるいは4月17日～24日が開花期に当たったほ場では、開花期防除の7～10日後に2回目の薬剤散布を実施してください。

表2 ムギ類赤かび病の防除薬剤例(地上散布¹及び無人航空機散布²両対応)

薬剤名	FRAC コード*	対象作物	使用時期	使用回数
ファンタジスタフロアブル	11	小麦	収穫14日前まで	3回以内
トップジンMゾル	1	小麦	収穫14日前まで	出穂期以降は 2回以内
		麦類* (小麦を除く)	収穫14日前まで ¹ 収穫21日前まで ²	出穂期以降は 1回以内
ミラビスフロアブル	7	小麦	収穫7日前まで	2回以内
		大麦	収穫14日前まで	2回以内
シルバキュアフロアブル	3	小麦	収穫7日前まで	2回以内
		大麦	収穫14日前まで	2回以内
ワークアップフロアブル	3	麦類	収穫7日前まで	3回以内

* トップジンMゾルの麦類は散布方法によって使用時期が異なるので注意してください
(使用基準は令和6年4月23日現在)

※ IRACコード及びFRACコードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和6年5月1日～8月31日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



病虫害防除情報



コバトン

令和6年6月26日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）について

2 情報内容

(1) イネ縞葉枯病の病徴について

生育初期に感染すると、新葉が黄白色に退色し、こより状に巻いたまま弓状に徒長します。このような株は「ゆうれい」症状とも呼ばれ、分げつが少なく、枯死します。幼穂形成期以降の感染では出穂しないか、出穂しても出すくみ症状となり、これらの症状によって減収します。



縞状病斑とゆうれい症状



出すくみ穂

(2) 病原の特徴及び伝染

ヒメトビウンカが媒介する縞葉枯ウイルスによるウイルス病で、一度保毒したヒメトビウンカは死ぬまでウイルスを保毒するほか、卵を通じて次世代にも伝染します。麦類や畦畔雑草地で増殖したヒメトビウンカ第1世代保毒虫が、水田に移動してイネに感染させ、発病します。また、移植時期が6月中下旬のイネでは第2世代成虫が7月上旬頃から水田に飛来し、ウイルスを媒介します。感染・発病しやすい時期はイネの生育初期～幼穂形成期までで、その後は感染しにくくなります。

本県主要奨励品種のうち、本県育成の「彩のきずな」「彩のかがやき」は本病に抵抗性を持っていますが、「コシヒカリ」「キヌヒカリ」は罹病性です。特に、6月移植の「キヌヒカリ」は、本病感受性が高い時期であるため、ヒメトビウンカが

多発すると被害が大きくなる可能性があります。



ヒメトビウンカ5 齢幼虫(体長約 2mm)



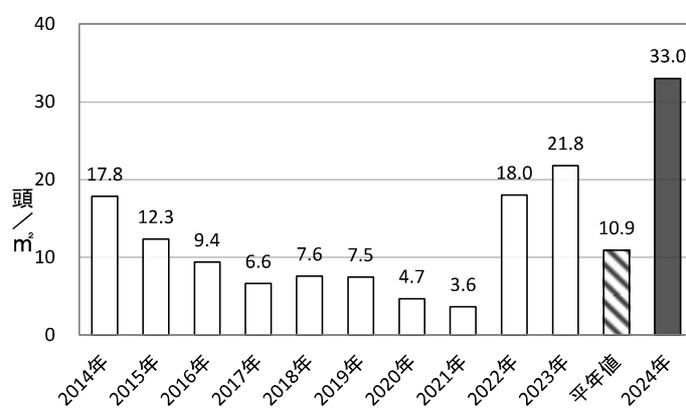
ヒメトビウンカ雌成虫(全長約 4mm)

(3) ヒメトビウンカの発生状況

5月中旬に実施した麦類ほ場内でのヒメトビウンカの叩き出し調査の結果は33.0頭/m²で、過去10年で最も高い生息密度となりました(右図)。

6月中旬に実施した早期早植栽培の本田内のすくい取り調査(20回振り)の結果も平均

虫数49.9頭と、昨年の平均虫数68.8頭に次ぐ本田生息密度となっています。本年は小麦の出穂が例年より遅く、麦刈り前に本田内すくい取りを実施した地区もあり、さらにヒメトビウンカの生育もやや遅れていたため、6月下旬以降の本田生息密度はかなり高まっていると予測されます。



麦類ほ場内でのヒメトビウンカの叩き出し調査結果

(4) 防除対策

縞葉枯病は、発生してからの防除はできないので、媒介虫であるヒメトビウンカの防除が重要です。

また、ヒメトビウンカは黒すじ萎縮ウイルスも媒介し、2013年には「彩のかがやき」等で感染株が見られました。ヒメトビウンカ多発時は、縞葉枯病抵抗性品種であっても防除が必要となります。



黒すじ萎縮病によるわい化株

ヒメトビウンカを対象とする箱施薬を実施していない場合は、速やかに本田での薬剤防除を行いましょう。

表 ヒメトビウンカの本田防除薬剤例(地上散布及び無人航空機散布両対応)

薬 剤 名	IRAC コード※	使用時期	使用回数
スタークル1キロH粒剤	4A	収穫7日前まで	3回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫7日前まで	3回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫7日前まで	3回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫7日前まで	2回以内
キラップフロアブル	2B	収穫14日前まで	2回以内

(使用基準は令和6年6月25日現在)

※ IRACコード及びFRACコードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和6年5月1日～8月31日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



コバトン&さいたまっち

病虫害防除情報

令和6年8月6日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 チャのチャノミドリヒメヨコバイについて

2 情報内容

(1) チャノミドリヒメヨコバイの発生状況

4月以降、本虫の発生量*が平年を大きく上回って推移しています。7月中旬の発生予察調査における発生量は過去10年間で最も多く、平年の2倍以上となっています(図)。

また、本県の茶業研究所(入間市)の県予察ほ場にて7月に実施した調査では、本虫による被害芽率は66%(平年値54.9%)と発生が多くなっています。【*発生量:発生面積に、発生程度に応じた係数を掛けたもの】



図: チャノミドリヒメヨコバイの発生量

(2) チャノミドリヒメヨコバイの特徴と被害

成虫の体長は約3mmで体色は淡緑色、幼虫は黄緑色をしています(写真1,2)。成虫で越冬し、6月下旬から発生が目立つようになり、7月と9月に多発する傾向があります。本虫の吸汁・加害により、葉脈褐変・葉色の黄化や葉の湾曲が発生し(写真3、点線内)、加害が進むと葉の辺縁部に黒色の枯死部が見られるようになります(写真3、矢印部分)。



写真1: 成虫



写真2: 幼虫



写真3: 被害葉
黄化や湾曲が生じ、加害の進展により辺縁部が黒変・枯死する。

(3) 防除のポイント

乾燥した晴天が続くと急激に増殖することがあり、秋芽の萌芽および伸長期の被害につながります。本虫は若い葉や幼梢を好むため、8月のうちに三番茶芽の上位3葉を整枝すると発生抑制効果があります。今後の、秋芽の萌芽および伸長期の加害は被害が大きくなりやすいため、芽の生育と本虫の発生状況に合わせ、表を参考に早期の防除につとめてください。

表2 チャのチャノミドリヒメヨコバイの防除薬剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使 用 時 期	使用回数
コテツフロアブル*	1 3	摘採 7 日前まで	2 回以内
ガンバ水和剤*	1 2 A	摘採 1 4 日前まで	1 回
スタークル顆粒水溶剤/ アルバリン顆粒水溶剤	4 A	摘採 7 日前まで	2 回以内
ハチハチフロアブル*	2 1 A	摘採 1 4 日前まで	1 回
ウララ D F	2 9	摘採 7 日前まで	1 回
コルト顆粒水和剤	9 B	摘採 7 日前まで	2 回以内
ヨーバルフロアブル	2 8	摘採 7 日前まで	1 回

* 劇物 (使用基準は令和6年8月5日現在)

※ IRAC コード及び FRAC コードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及び FRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/lab0/mechanism.html>

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和6年5月1日～8月31日）

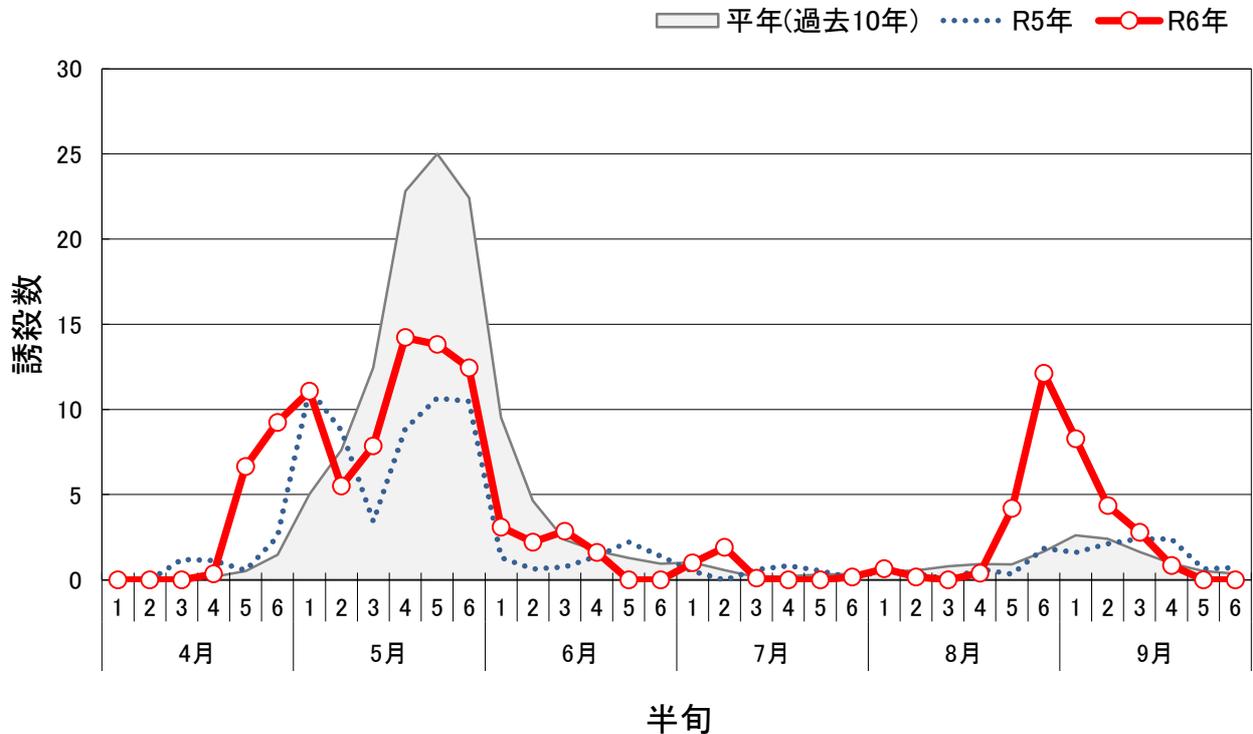
問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661

(2) 病虫害発生予察調査等結果

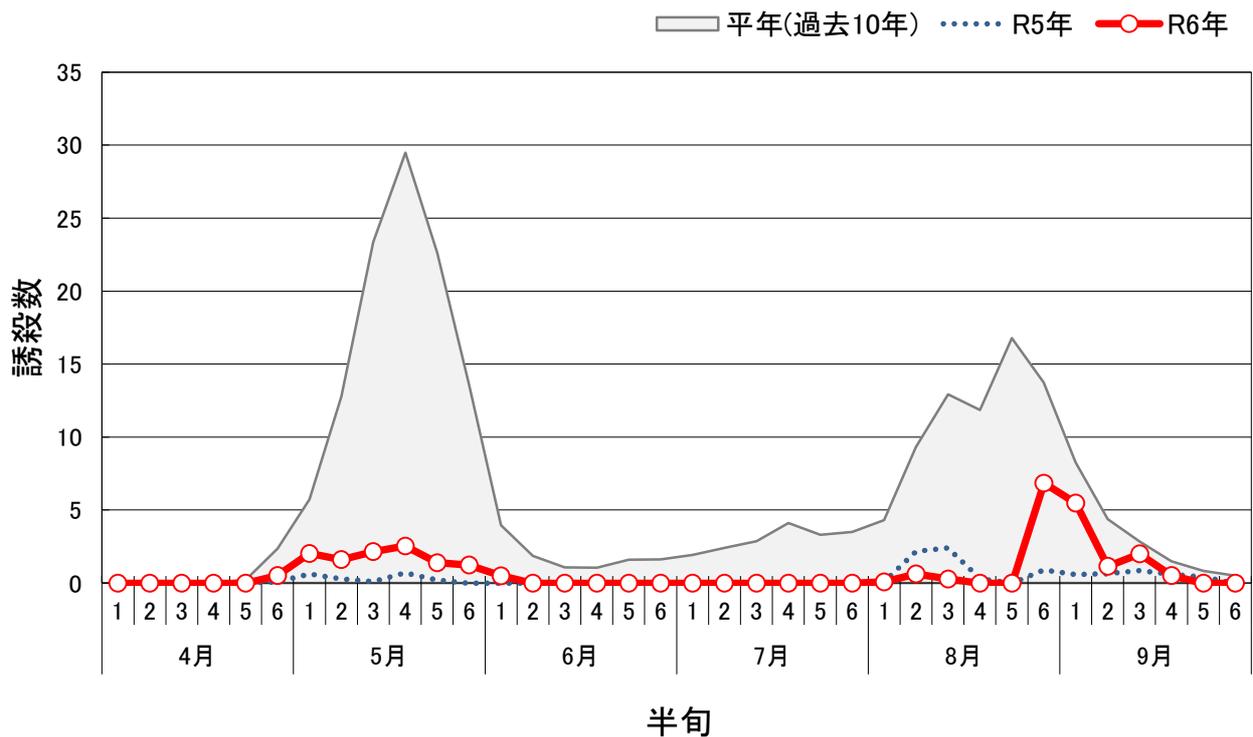
ア 水稻・麦

(ア) フタオビコヤガ (イネアオムシ) のフェロモントラップ調査 (4~9月)

対象作物:水稻 調査地点:熊谷市中曽根



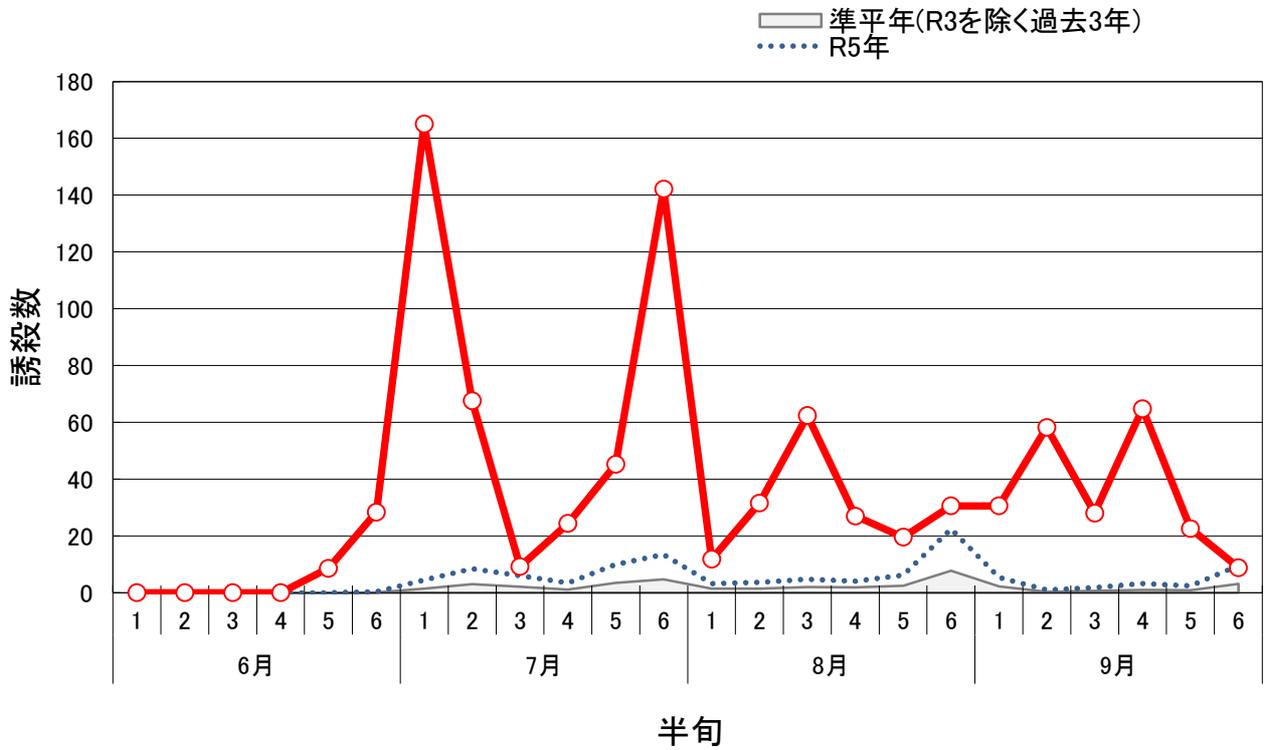
対象作物:水稻 調査地点:加須市戸室



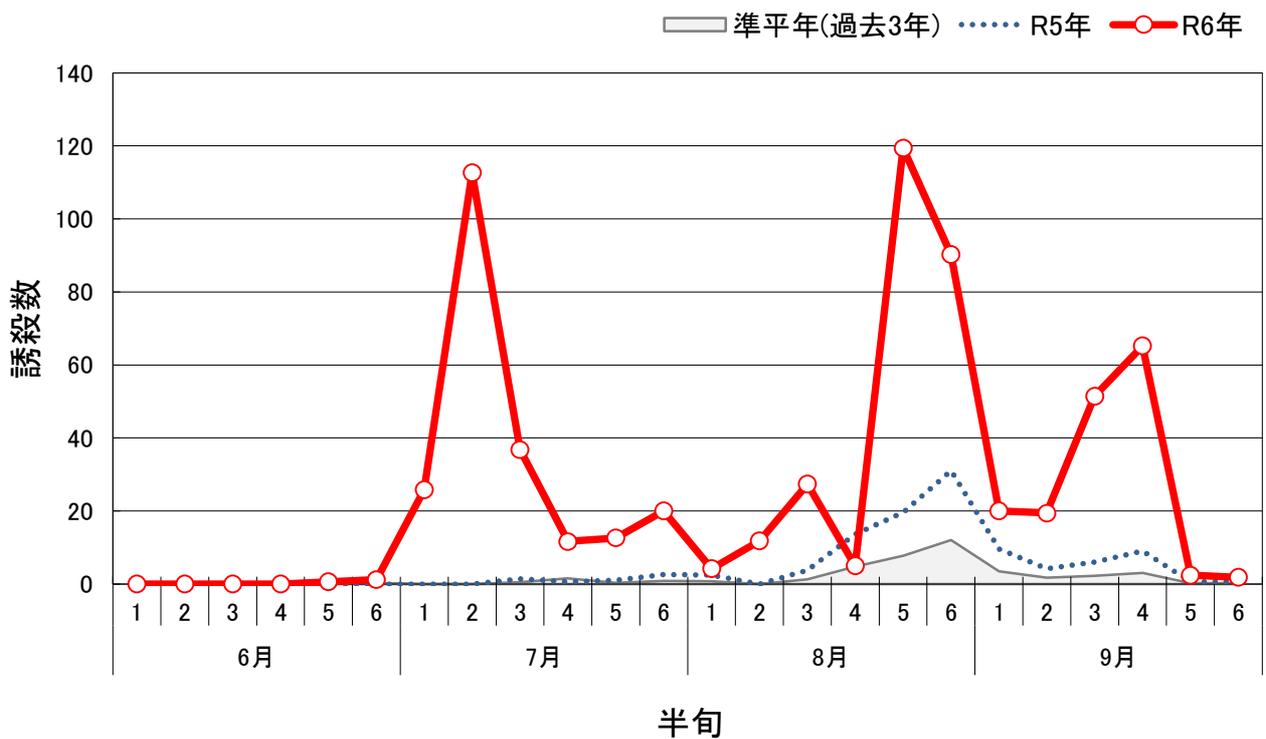
(イ) イネカメムシ予察灯誘殺消長 (6~9月、多誘殺地点のみ)

a 白熱電球予察灯 (水稻各種害虫調査用)

対象作物: 水稻 調査地点: 春日部市樋籠



対象作物: 水稻 調査地点: 加須市大越

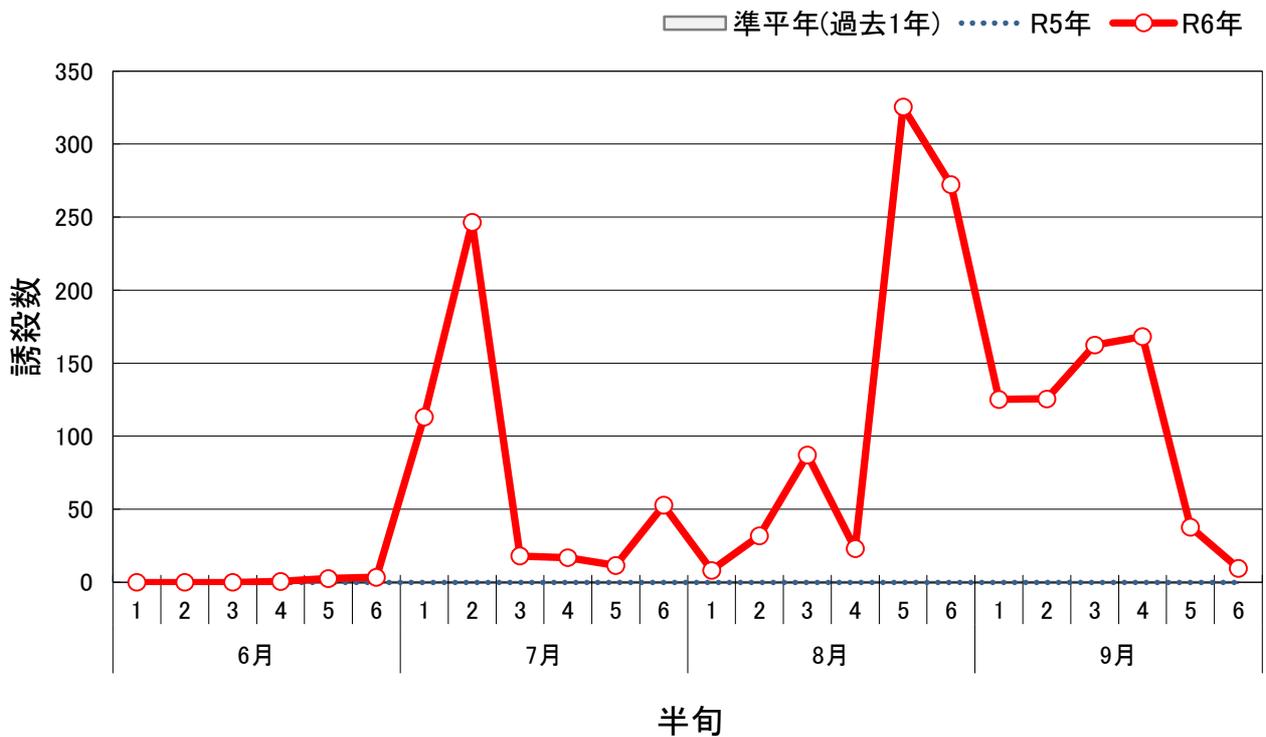


対象作物: 水稻 調査地点: 熊谷市玉井



b 水銀灯予察灯 (果樹カメムシ類調査用)

対象作物: 水稻 調査地点: 久喜試験場



対象作物: 水稻 調査地点: 春日部市内牧



(ウ) 赤かび病の発生に好適な気象条件の出現状況 (熊谷)

本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月30日までの積算日数が16日(平年同期8.1日)と過去10年で最も多くなった。特に、4月17日から5月3日まで17日間連続で子のう胞子飛散好適日が出ており、11月下旬以降に播種した小麦では最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致した。

このため、5月中旬の病害虫発生状況調査では、各調査地点で各麦種とも本病の発生が見られ、5月中旬の発生量は過去10年で最も多く、平年比「多」となった。

年月日	平均気温	最高気温	最低気温	降水量	降水有無	平均湿度	子のう殻	子のう胞子	多発生	飛散好適日積算(3/1~)	
	(°C)	(°C)	(°C)	(mm)	(無=1)	(%)	形成好適日	飛散好適日	好適日	本年	平年
2024/3/26	9.1	11.4	7.1	44.0	0	94				0	0.8
2024/3/27	10.2	16.3	5.4	0.0	1	51				0	0.9
2024/3/28	8.6	13.0	4.0	11.0	0	68				0	0.9
2024/3/29	14.5	22.2	8.7	23.0	0	88	●			0	1.0
2024/3/30	17.3	25.9	8.8	0.0	1	59	●			0	1.3
2024/3/31	17.8	27.3	10.2	0.0	1	63				0	1.4
2024/4/1	14.9	19.5	9.4	0.5	0	57	●			0	1.6
2024/4/2	14.1	20.7	7.4	0.0	1	43	●			0	1.7
2024/4/3	11.2	14.2	9.5	14.5	0	76				0	1.8
2024/4/4	15.7	22.1	10.4	1.5	0	70	●	○		1	2.0
2024/4/5	10.4	13.9	8.0	1.0	0	81				1	2.1
2024/4/6	12.5	16.2	8.7	0.0	0	80				1	2.4
2024/4/7	17.2	24.0	9.7	0.0	1	74	●			1	2.6
2024/4/8	18.3	24.1	14.1	1.0	0	85	●	○	◎	2	2.8
2024/4/9	14.3	17.4	8.7	29.0	0	74	●			2	2.8
2024/4/10	11.4	18.7	6.1	0.0	1	44				2	2.9
2024/4/11	12.9	19.4	5.3	0.0	1	62				2	3.0
2024/4/12	15.6	20.8	11.4	0.0	1	67				2	3.2
2024/4/13	16.5	24.2	9.5	0.0	1	67				2	3.4
2024/4/14	18.3	26.3	10.8	0.0	1	63				2	3.5
2024/4/15	19.1	27.8	11.7	0.0	1	61				2	3.9
2024/4/16	18.1	25.0	12.1	0.0	1	70		△		2	4.1
2024/4/17	19.4	25.6	14.2	0.0	0	69	●	○		3	4.5
2024/4/18	17.8	21.5	13.9	2.0	0	65	●	○		4	5.1
2024/4/19	17.3	21.9	12.5	0.0	0	47	●	○		5	5.5
2024/4/20	19.8	27.9	11.4	0.0	1	43	●	○		6	5.7
2024/4/21	18.7	23.9	14.9	0.0	0	64	●	○		7	5.9
2024/4/22	15.6	18.4	13.0	1.0	0	83	●	○		8	6.5
2024/4/23	16.6	20.3	15.2	0.0	0	84	●	○		9	6.9
2024/4/24	14.2	15.7	13.4	15.0	0	95	●	○		10	7.3
2024/4/25	19.9	28.0	12.8	1.0	0	65	●	○		11	7.7
2024/4/26	20.3	26.3	13.2	0.0	1	63	●	○		12	8.0
2024/4/27	20.5	24.9	17.4	0.0	0	78	●	○		13	8.5
2024/4/28	22.4	30.8	14.3	0.0	1	63	●	○		14	8.8
2024/4/29	21.9	29.2	16.2	0.0	0	70	●	○		15	9.1
2024/4/30	20.3	23.2	18.3	1.0	0	85	●	○	◎	16	9.5
2024/5/1	16.2	20.5	11.5	21.5	0	92	●	○		17	
2024/5/2	15.7	21.7	11.0	5.0	0	67	●	○		18	
2024/5/3	17.9	26.6	10.3	0.0	1	64	●	○		19	
2024/5/4	20.9	29.7	12.3	0.0	1	50				19	
2024/5/5	22.1	31.7	13.0	0.0	1	50				19	
出現日数(3月)							2	0	0		1.4
出現日数(4月)							20	16	2		8.1
出現日数(3~4月)							22	16	2		9.5

●:子のう殻形成好適日:平均気温が13℃以上で降雨直後(前日または当日)
 ○:子のう胞子飛散好適日:最高気温が15℃以上かつ最低気温が10℃以上で、湿度80%以上または降雨直後(前日または当日)
 △:子のう胞子飛散好適日の温度条件が合致しており、かつ湿度70~79%の場合
 ◎:多発生好適日:平均気温が18℃以上で、前日または当日に降雨があり、平均湿度が80%以上
 ※赤かび病の第一次伝染源である子のう殻の形成が盛んになるのは、日平均気温が13℃以上で降雨直後である。子のう胞子の飛散が盛んになるのは、日最高気温で15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上かつ降雨直後である。また、出穂期以降の平均気温が18~20℃を越え、湿度も80%以上が3日以上続く場合、あるいは降雨又は濃霧頻度が高い(日照時間が少ない)場合多発しやすい。

(エ) 麦ほ場におけるウンカ・ヨコバイ類生息密度調査(5月)

調査方法： 麦類の乳熟期(令和6年5月8日～14日)に、県内15地点の麦類ほ場において、1地点3か所で1m幅(0.2～0.6m²)の麦穂を10回叩いて落ちて来るヒメトビウンカを採取し、1m²当たりの生息密度を算出した。

調査結果： 令和6年度のヒメトビウンカの麦類叩き出し調査の結果は33.0頭/m²で、過去10年で最も生息密度が高く、次いで高かった昨年の約2倍、平年の約3倍となった。また、調査地点によるばらつきはあるが、昨年より低くなったのは4地点で、概ね増加傾向にあった。

図. 令和6年5月麦類ウンカ・ヨコバイ生息密度調査結果 (単位： 頭/m²)

調査場所	調査月日	麦種	ヒメトビウンカ			ツマグロヨコバイ		
			成虫	幼虫	計	成虫	幼虫	計
川越市古谷上	5/10	小麦	0.0	6.7	6.7	0.0	1.1	1.1
坂戸市片柳	5/10	小麦	0.0	9.3	9.3	0.0	0.4	0.4
熊谷市樋春	5/8	小麦	0.0	36.7	36.7	0.0	0.0	0.0
熊谷市中曽根	5/10	小麦	0.0	63.3	63.3	0.0	0.0	0.0
川島町戸守	5/10	小麦	0.0	102.2	102.2	0.0	0.0	0.0
川島町東部	5/10	小麦	0.0	38.9	38.9	0.0	1.1	1.1
鴻巣市屈巢	5/10	小麦	0.0	82.7	82.7	0.0	1.3	1.3
行田市上池守	5/10	小麦	0.0	6.7	6.7	0.0	0.0	0.0
行田市前谷	5/10	小麦	0.0	31.1	31.1	0.0	0.0	0.0
加須市大越	5/10	小麦	0.0	57.8	57.8	0.0	1.3	1.3
熊谷市飯塚	5/10	小麦	0.0	5.6	5.6	0.0	0.0	0.0
上里町長浜	5/10	小麦	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
本庄市児玉町	5/10	小麦	0.0	21.3	21.3	0.0	0.0	0.0
白岡市太田新井	5/14	小麦	0.0	21.1	21.1	0.0	0.0	0.0
蓮田市駒崎	5/14	小麦	0.0	12.2	12.2	0.0	0.0	0.0
平均(15地点)			0.0	33.0	33.0	0.0	0.3	0.3
昨年(令和5年)			0.2	21.6	21.8	0.0	0.8	0.8
平年値(過去10年間:平成26年～令和5年)			2.2	8.7	10.9	0.1	0.5	0.5

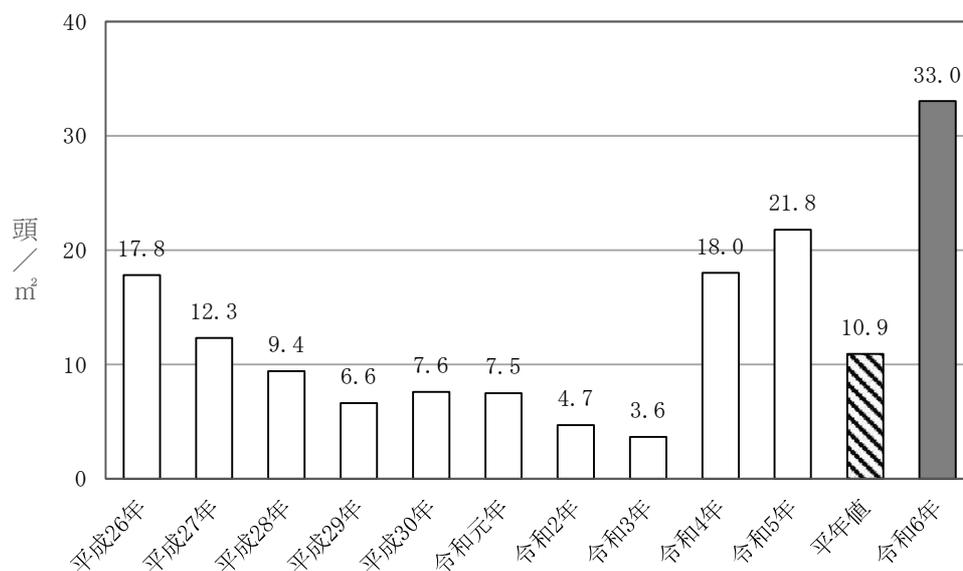


図. 令和6年5月ヒメトビウンカ密度調査結果 (麦類叩き出し)

(オ) 予察灯調査 (5~9月)

病害虫名		ニカメイガ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	1	1	5	0	3	
	2	0	0	9	2	0	
	3	2	2	1	3	0	
	4	1	0	1	1	0	
	5	1	0	0	3	0	
	6	0	0	0	7	0	
	計	5	3	16	16	3	43
	平年値	7.5	1.5	15.8	18.3	6.3	49.4
川島町 上八ツ林	1	0	3	1	3	19	
	2	0	2	5	2	19	
	3	0	7	5	3	9	
	4	2	3	8	2	4	
	5	0	0	7	5	0	
	6	0	8	8	11	0	
	計	2	23	34	26	51	136
	平年値	3.6	4.9	2.6	3.3	2.9	17.3
本庄市 児玉町 吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	1	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	1	0	0	0	0	1
	平年値	1.1	1.2	7.2	4.4	1.1	15.0
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	1	
	2	0	1	0	0	0	
	3	0	5	0	0	0	
	4	0	0	0	1	0	
	5	0	1	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	7	0	1	1	9
	平年値	2.1	4.7	2.7	1.6	1.9	13.0
加須市 大越	1	14	1	7	0	2	
	2	10	0	3	5	1	
	3	18	4	0	0	3	
	4	5	1	2	1	0	
	5	2	1	3	13	0	
	6	1	3	12	12	0	
	計	50	10	27	31	6	124
	平年値	32.4	9.2	12.3	12.8	6.5	71.1
春日部市 樋籠	1	2	2	3	6	12	
	2	0	2	2	14	2	
	3	3	4	2	3	2	
	4	20	6	16	6	0	
	5	6	4	23	10	0	
	6	2	4	25	27	0	
	計	33	22	71	66	16	208
	平年値	3.4	3.7	9.2	15.4	2.1	33.8

病害虫名		イネミズゾウムシ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	2	1	0	
	2	0	0	1	1	0	
	3	0	0	2	0	0	
	4	0	0	2	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	3	0	
	計	0	0	7	5	0	12
	平年値	2.0	1.4	15.1	6.4	4.5	29.4
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	1.3	0.4	1.3	0.8	0.1	3.9
本庄市 児玉町 吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.4	0.6	0.7	1.4	0.2	3.3
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	1.0	1.3	7.8	1.6	0.0	11.7
加須市 大越	1	0	0	16	1	0	
	2	0	0	252	5	0	
	3	0	0	31	3	0	
	4	2	0	61	0	0	
	5	3	0	46	0	0	
	6	1	0	46	0	0	
	計	6	0	452	9	0	467
	平年値	24.4	1.2	100.4	7.8	0.3	133.2
春日部市 樋籠	1	4	0	12	4	2	
	2	0	0	90	2	0	
	3	0	0	22	0	1	
	4	9	0	43	0	0	
	5	6	0	43	0	0	
	6	0	0	19	1	0	
	計	19	0	229	7	3	258
	平年値	13.3	3.9	130.6	10.1	0.5	158.4

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26~R1年度と大越R3~R5の9年間の平均値を使用。

病害虫名		ツマグロヨコバイ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	1	1	1	
川越市	3	0	0	2	0	0	
南田島	4	0	1	1	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	1	1	0	0	
計	0	2	5	2	1	10	
平年値	0.0	0.4	1.4	3.0	1.0	5.8	
	1	0	0	2	0	1	
	2	0	0	3	2	3	
川島町	3	0	0	0	2	4	
上八ツ林	4	0	0	2	4	1	
	5	0	0	2	0	1	
	6	0	1	0	1	0	
計	0	1	9	9	10	29	
平年値	0.2	1.3	11.6	13.6	23.6	50.3	
	1	1	1	0	0	0	
	2	0	0	0	0	1	
本庄市	3	0	0	0	0	6	
児玉町	4	0	0	0	0	18	
吉田林	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計	1	1	0	0	25	27	
平年値	0.9	3.2	10.9	59.5	277.0	351.5	
	1	0	0	1	1	1	
	2	0	0	0	0	2	
熊谷市	3	0	0	0	0	2	
玉井	4	0	0	2	0	5	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	1	0	0	
計	0	0	4	1	10	15	
平年値	0.5	0.2	8.8	15.1	20.1	44.7	
	1	0	0	4	0	1	
	2	0	0	23	10	11	
加須市	3	0	0	3	8	1	
大越	4	0	1	9	0	9	
	5	0	0	19	3	0	
	6	0	0	18	1	2	
計	0	1	76	22	24	123	
平年値	1.6	7.3	73.7	72.9	50.1	191.9	
	1	0	0	5	1	5	
	2	0	0	3	3	9	
春日部市	3	0	0	1	6	19	
樋籠	4	0	1	5	1	7	
	5	0	2	2	1	0	
	6	0	0	2	0	0	
計	0	3	18	12	40	73	
平年値	0.3	9.8	7.7	4.4	2.3	24.5	

病害虫名		セジロウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	2	31	1	
	2	0	0	3	11	26	
川越市	3	0	0	1	33	35	
南田島	4	0	0	0	20	11	
	5	0	0	2	37	0	
	6	0	0	1	0	2	
計	0	0	9	132	75	216	
平年値	0.0	1.5	10.0	70.5	53.4	135.4	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	1	0	
川島町	3	0	0	0	1	0	
上八ツ林	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	3	0	0	
	6	0	0	1	0	0	
計	0	0	4	2	0	6	
平年値	0.0	0.3	0.6	3.4	3.8	8.1	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	6	0	
本庄市	3	0	0	0	3	0	
児玉町	4	0	0	0	0	0	
吉田林	5	0	0	0	10	0	
	6	0	0	14	0	0	
計	0	0	14	19	0	33	
平年値	0.0	0.0	1.3	22.4	10.2	33.9	
	1	0	0	0	2	2	
	2	0	0	0	1	2	
熊谷市	3	0	0	0	4	3	
玉井	4	0	0	1	2	0	
	5	0	12	1	5	0	
	6	0	1	2	4	0	
計	0	13	4	18	7	42	
平年値	0.0	0.1	4.1	13.0	10.3	27.5	
	1	0	0	1	0	5	
	2	0	0	0	2	10	
加須市	3	0	0	0	1	27	
大越	4	0	0	1	5	27	
	5	0	0	2	21	0	
	6	0	1	0	2	0	
計	0	1	4	31	69	105	
平年値	0.0	0.6	2.2	7.5	4.6	13.6	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
春日部市	3	0	0	0	1	0	
樋籠	4	0	0	0	2	3	
	5	0	0	2	0	1	
	6	0	0	1	0	0	
計	0	0	3	3	4	10	
平年値	0.1	0.8	1.1	2.3	0.3	4.6	

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26～R1年度と大越R3～R5の9年間の平均値を使用。

病害虫名		ヒメトビウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	14	21	1	
	2	0	0	4	34	0	
川越市	3	0	0	3	30	1	
南田島	4	0	0	0	3	0	
	5	0	0	1	18	1	
	6	0	0	10	2	0	
計	0	0	32	108	3	143	
平年値	2.9	23.9	102.8	165.2	12.9	307.7	
	1	0	0	4	23	1	
	2	0	0	6	13	4	
川島町	3	0	0	1	7	2	
上八ツ林	4	0	0	1	9	0	
	5	0	1	6	1	0	
	6	0	0	16	0	0	
計	0	1	34	53	7	95	
平年値	2.7	13.8	34.5	94.6	14.3	159.9	
	1	0	0	5	2	0	
	2	0	0	1	4	0	
本庄市	3	0	0	0	0	0	
児玉町	4	0	0	4	3	0	
吉田林	5	0	0	23	3	0	
	6	2	1	3	0	0	
計	2	1	36	12	0	51	
平年値	2.4	3.8	46.4	128.4	38.6	219.6	
	1	0	0	90	107	4	
	2	0	0	48	30	16	
熊谷市	3	0	1	0	12	1	
玉井	4	0	0	10	7	2	
	5	0	11	13	1	0	
	6	0	20	19	2	0	
計	0	32	180	159	23	394	
平年値	3.5	13.6	166.2	189.1	27.7	400.1	
	1	0	2	104	377	6	
	2	0	8	160	216	24	
加須市	3	0	5	3	228	18	
大越	4	0	0	4	14	9	
	5	13	0	78	29	1	
	6	9	33	674	26	0	
計	22	48	1023	890	58	2041	
平年値	2.1	34.2	187.4	479.9	14.4	663.1	
	1	0	0	7	15	2	
	2	0	0	45	40	1	
春日部市	3	0	1	3	19	1	
樋籠	4	0	0	1	2	3	
	5	0	0	19	0	0	
	6	0	0	23	0	1	
計	0	1	98	76	8	183	
平年値	0.5	26.8	24.3	14.8	2.9	69.3	

病害虫名		フタオビコヤガ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
川越市	3	0	0	0	0	0	
南田島	4	0	0	0	1	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	1	0	
計	0	0	0	0	2	0	2
平年値	0.6	1.3	5.4	7.3	2.9	17.5	
	1	1	1	2	0	0	
	2	0	2	2	0	2	
川島町	3	0	1	1	3	0	
上八ツ林	4	0	0	0	0	0	
	5	3	4	3	0	0	
	6	2	2	1	1	0	
計	6	10	9	4	2	31	
平年値	6.0	4.0	2.6	13.0	4.8	30.4	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
本庄市	3	0	0	0	0	0	
児玉町	4	0	0	0	0	1	
吉田林	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計	0	0	0	0	0	1	1
平年値	0.1	1.6	11.5	20.8	9.6	43.6	
	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	0	0	2	
熊谷市	3	0	0	0	1	0	
玉井	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	1	1	
	6	0	0	0	0	0	
計	0	0	0	2	4	6	
平年値	0.3	0.7	0.6	2.6	3.1	7.3	
	1	0	0	1	13	8	
	2	0	0	1	53	3	
加須市	3	0	0	2	30	0	
大越	4	0	0	1	3	0	
	5	0	0	0	11	0	
	6	0	0	9	12	0	
計	0	0	14	122	11	147	
平年値	3.7	5.0	18.3	45.8	11.4	77.8	
	1	0	0	0	2	3	
	2	0	2	1	7	6	
春日部市	3	0	0	0	7	1	
樋籠	4	0	1	1	3	0	
	5	0	1	0	5	0	
	6	0	0	2	2	0	
計	0	4	4	26	10	44	
平年値	0.4	2.3	1.1	5.1	1.0	9.9	

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26～R1年度と大越R3～R5の9年間の平均値を使用。

病害虫名		斑点米カメムシ類(イネカメ、イネホソを除く)					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	3	2	7	
	2	0	1	4	1	4	
川越市	3	0	0	0	2	1	
南田島	4	0	1	3	6	1	
	5	0	2	0	0	0	
	6	0	3	0	3	1	
計	0	7	10	14	14	45	
平年値	0.5	1.0	6.2	11.3	4.3	23.3	
	1	0	0	2	1	12	
	2	0	0	2	2	6	
川島町	3	0	0	0	2	7	
上八ツ林	4	0	0	0	4	10	
	5	0	1	1	1	2	
	6	0	0	0	2	0	
計	0	1	5	12	37	55	
平年値	0.2	3.8	3.7	10.0	4.2	21.9	
	1	0	0	16	3	5	
	2	0	0	4	0	7	
本庄市	3	0	0	3	0	26	
児玉町	4	0	1	4	6	33	
吉田林	5	0	10	3	7	12	
	6	0	1	8	4	12	
計	0	12	38	20	95	165	
平年値	1.7	5.8	12.2	21.2	34.0	74.9	
	1	0	0	11	9	26	
	2	0	0	26	4	20	
熊谷市	3	0	1	4	3	11	
玉井	4	0	0	29	3	46	
	5	0	0	33	6	8	
	6	0	0	54	7	10	
計	0	1	157	32	121	311	
平年値	0.1	1.3	1.7	2.3	3.2	8.6	
	1	0	0	48	6	25	
	2	0	0	156	16	40	
加須市	3	0	0	26	47	55	
大越	4	0	0	7	4	89	
	5	0	3	31	144	2	
	6	1	7	51	80	2	
計	1	10	319	297	213	840	
平年値	0.2	1.6	6.2	18.9	7.6	31.6	
	1	0	0	202	9	35	
	2	0	0	67	40	68	
春日部市	3	0	5	8	65	29	
樋籠	4	1	13	22	24	104	
	5	3	26	55	24	10	
	6	3	25	146	32	10	
計	7	69	500	194	256	1026	
平年値	1.6	5.1	3.5	2.4	4.5	17.1	

病害虫名		イネホソミドリカスミカメ (別和名:アカヒゲホソミドリカスミカメ)					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	2	25	0	2	
	2	0	23	39	6	5	
川越市	3	0	22	4	2	2	
南田島	4	0	18	1	5	3	
	5	0	3	0	3	0	
	6	0	12	5	0	1	
計	0	80	74	16	13	183	
平年値	0.7	28.2	67.5	38.7	6.5	141.6	
	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	7	0	0	
川島町	3	0	0	1	0	2	
上八ツ林	4	0	0	0	0	3	
	5	0	0	0	0	2	
	6	0	0	0	0	1	
計	0	0	8	0	9	17	
平年値	0.3	13.3	18.1	9.3	2.6	43.6	
	1	0	0	27	3	3	
	2	0	0	9	0	3	
本庄市	3	0	0	13	2	2	
児玉町	4	0	0	10	1	4	
吉田林	5	0	7	8	17	1	
	6	0	0	10	8	1	
計	0	7	77	31	14	129	
平年値	2.8	60.7	152.6	74.7	29.5	320.3	
	1	0	1	34	0	2	
	2	0	4	64	0	7	
熊谷市	3	0	15	6	2	3	
玉井	4	0	7	15	0	8	
	5	0	16	6	1	1	
	6	0	13	3	1	3	
計	0	56	128	4	24	212	
平年値	19.3	246.5	208.4	85.5	22.8	582.5	
	1	0	0	47	2	0	
	2	0	5	110	3	2	
加須市	3	1	21	11	5	3	
大越	4	0	7	9	4	5	
	5	2	6	28	7	0	
	6	4	9	20	2	0	
計	7	48	225	23	10	313	
平年値	3.1	53.8	49.7	42.9	11.4	154.8	
	1	0	0	18	2	1	
	2	0	1	20	2	2	
春日部市	3	0	1	4	13	2	
樋籠	4	0	4	3	5	10	
	5	1	6	4	0	1	
	6	0	2	2	2	1	
計	1	14	51	24	17	107	
平年値	1.2	20.6	13.8	6.4	2.5	44.5	

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26～R1年度と大越R3～R5の9年間の平均値を使用。

病害虫名		イネカメムシ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	0	4	
	2	0	0	0	0	1	
川越市	3	0	0	0	1	0	
南田島	4	0	0	0	4	1	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	5	6	11
平年値		0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.7
	1	0	0	0	0	2	
	2	0	0	0	1	3	
川島町	3	0	0	0	1	0	
上八ツ林	4	0	0	0	4	3	
	5	0	0	1	0	1	
	6	0	0	0	2	0	
計		0	0	1	8	9	18
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
本庄市	3	0	0	0	0	0	
児玉町	4	0	0	0	1	0	
吉田林	5	0	0	0	4	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	5	0	5
平年値		0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1
	1	0	0	10	3	25	
	2	0	0	24	1	15	
熊谷市	3	0	0	4	0	7	
玉井	4	0	0	25	3	38	
	5	0	0	28	6	7	
	6	0	0	51	6	8	
計		0	0	142	19	100	261
平年値		0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	1.4
	1	0	0	21	4	24	
	2	0	0	133	11	25	
加須市	3	0	0	23	30	43	
大越	4	0	0	5	4	68	
	5	0	1	19	128	2	
	6	0	0	19	78	1	
計		0	1	220	255	163	639
平年値		0.0	0.1	0.9	9.5	2.8	13.3
	1	0	0	186	5	32	
	2	0	0	63	34	61	
春日部市	3	0	0	7	64	19	
樋籠	4	0	0	22	23	84	
	5	0	11	53	22	8	
	6	0	12	143	28	7	
計		0	23	474	176	211	884
平年値		0.0	0.0	4.7	5.4	2.3	12.4

病害虫名		トビイロウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
川越市	3	0	0	0	0	0	
南田島	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	0	0
平年値		0.0	0.0	0.1	0.4	0.0	0.5
	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	0	2	0	
川島町	3	0	0	0	0	0	
上八ツ林	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	3	0	3
平年値		0.0	0.0	0.1	0.2	1.0	1.3
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
本庄市	3	0	0	0	0	0	
児玉町	4	0	0	0	0	0	
吉田林	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	0	0
平年値		0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	1	
熊谷市	3	0	0	0	0	0	
玉井	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	1	1
平年値		0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1
	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	0	0	0	
加須市	3	0	0	0	0	2	
大越	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	3	3
平年値		0.0	0.1	0.4	0.7	0.0	1.2
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
春日部市	3	0	0	0	0	0	
樋籠	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	1	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	1	1
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26～R1年度と大越R3～R5の9年間の平均値を使用。

(カ) いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（BLASTAM）（5～9月）

a 葉いもち発生予測システム（BLASTAM）について

イネいもち病は空気伝染性病害であるため、発生には気象条件が大きく影響する。気温が20～25℃で曇雨天の日が続き、イネの葉に水滴が付いている状態がいもち病菌の分生子の発芽、侵入、蔓延に好適な条件であり、発生が助長される。

葉いもち発生予測システム（BLASTAM）では、アメダス各地点の気象データの降水量、日照時間、風速からイネ葉面の濡れ時間（湿潤時間）を推定し、気温との組み合わせで、いもち病感染好適条件を判定するものである。

b イネいもち病の発生状況について

ホームページ上で、6月1日から15日ごとに、県内の感染好適日の出現状況を発表し、平年（過去10年間）との比較を数値化することで、適期防除を啓発した。

埼玉県において感染好適日が初出現したのは5月29日（平年6月6日）であり、平年より早かった。例年では6月上旬から7月中旬ごろまでが梅雨であり、いもち病の感染好適日が多く出現するが、本年の6～7月の感染好適日は18日で平年（51.1日）の35%と少なかった。梅雨期の降水量は平年並だったが、6月中旬から9月中旬まで高温に経過したため、7月17日を最後に9月23日まで感染好適日は出現しなかった。令和5年は7月6日を最後に感染好適日が出現しなかったが、6月中旬にまとまって出現したため、集計期間中（5月1日～9月30日）の総出現日数は過去10年で最も少なくなった（下図）。

毎年7月中旬に実施しているイネいもち病（葉いもち）発生予察調査においても、発病地点率は27.3%（平年42.5%、昨年22.7%）、発病株率0.8%（平年8.5%、昨年0.6%）といずれも過去10年で最も少ない昨年に次ぐ値となった。

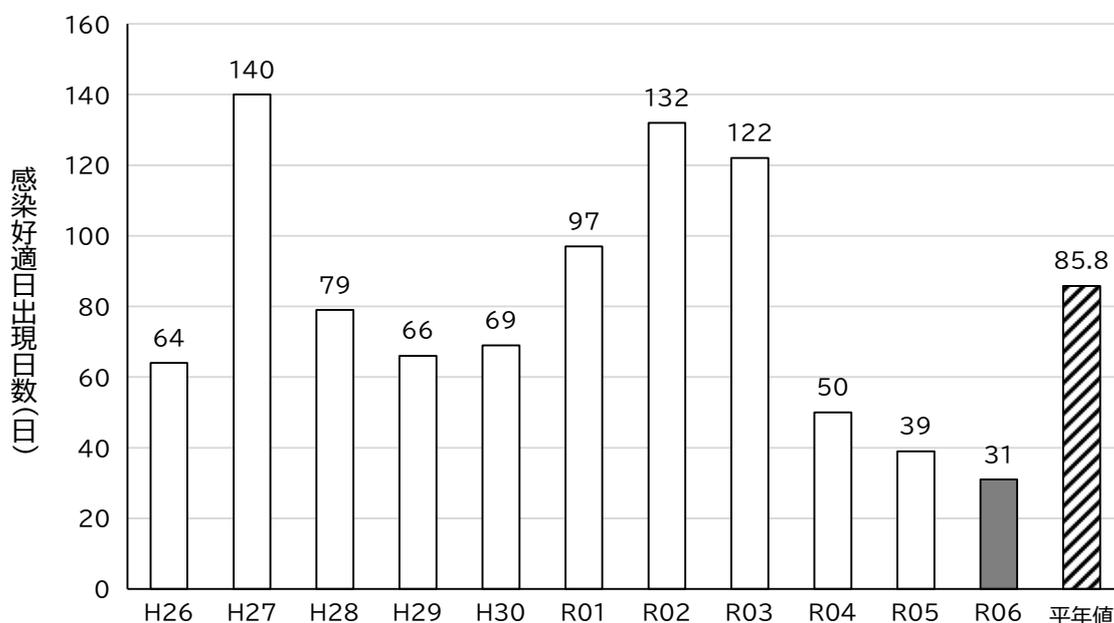


図. 葉いもち感染好適日の出現日数
(5月1日～9月30日における県内8地点の合計日数)

表. いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（令和6年5～9月、JPP-N E Tより引用）

地点 月日	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさい まい	越谷	所沢
5月1日	-	-	-	-	-	-	-	-
↓ 感染好適日が出現しなかったため、省略								
5月17日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月18日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月19日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月20日	4	-	4	-	-	-	-	-
5月21日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月22日	-	-	-	-	-	-	●	-
5月23日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月24日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月25日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月26日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月27日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月28日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月29日	4	-	-	●	-	-	-	-
5月30日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月31日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月1日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月2日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月3日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月4日	-	-	4	3	4	-	-	-
6月5日	-	-	-	-	-	-	-	4
6月6日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月7日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月8日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月9日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月10日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月11日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月12日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月13日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月14日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月15日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月16日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月17日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月18日	●	2	2	●	2	-	-	-
6月19日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月20日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月21日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月22日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月23日	-	-	-	●	4	-	-	-
6月24日	●	●	●	-	-	●	●	-
6月25日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月26日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月27日	-	-	-	-	-	-	2	-
6月28日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月29日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月30日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月1日	-	-	●	-	●	-	-	-
7月2日	-	-	-	-	-	-	-	●

地点 月日	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさい まい	越谷	所沢
7月3日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月4日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月5日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月6日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月7日	-	-	-	2	-	-	-	-
7月8日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月9日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月10日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月11日	-	3	-	-	-	-	-	-
7月12日	-	-	-	2	-	-	2	-
7月13日	-	2	-	-	-	-	-	2
7月14日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月15日	●	2	2	●	2	-	-	-
7月16日	-	●	-	-	-	-	-	-
7月17日	●	●	●	-	●	●	-	-
↓ 感染好適日が出現しなかったため省略								
8月31日	3	-	3	-	3	-	3	-
9月1日	2	2	2	-	2	2	-	-
9月2日	-	-	-	-	-	-	3	-
9月3日	-	3	-	2	-	-	-	-
9月4日	2	-	-	-	-	-	-	-
9月5日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月6日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月7日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月8日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月9日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月10日	-	-	-	-	3	-	-	3
9月11日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月12日	3	3	-	-	-	-	-	-
9月13日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月14日	-	-	-	-	3	-	-	-
9月15日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月16日	-	-	3	-	-	-	-	-
9月17日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月18日	-	-	-	3	-	-	-	-
9月19日	2	-	2	-	2	3	-	2
9月20日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月21日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月22日	2	2	2	2	2	2	-	-
9月23日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月24日	-	-	-	4	●	-	-	-
9月25日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月26日	-	●	-	-	-	-	●	-
9月27日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月28日	-	-	-	-	●	●	●	●
9月29日	-	-	●	-	-	-	-	-
9月30日	4	-	-	●	-	-	-	●
計	5	6	5	7	5	4	4	3
平年値	11.7	11.1	10.2	12.5	12	8.8	11.8	7.7

・発生指標の解説(数字の1～4は感染のしやすさの段階を示すものではない。)

●	感染好適条件	湿潤時間中の平均気温が15～25℃であり、湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間満たし、当日を含めてその日以前5日間の日平均気温の平均値が20～25℃の範囲にある
1	準好適条件 1	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満
2	準好適条件 2	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が21℃以上
3	準好適条件 3	湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤時間中の平均気温が15～25℃の範囲外
4	準好適条件 4	湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い
-	好適条件なし	
?	判定不能	

(オ) トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数(5~9月)

令和6年

月日	本年	平年												
05/01	0	0.0	06/01	0	0.0	07/01	1	0.2	08/01	0	0.0	09/01	0	0.0
05/02	0	0.0	06/02	0	0.0	07/02	0	0.2	08/02	0	0.0	09/02	0	0.0
05/03	0	0.1	06/03	0	0.1	07/03	0	0.3	08/03	0	0.0	09/03	0	0.0
05/04	0	0.0	06/04	0	0.1	07/04	0	0.4	08/04	0	0.0	09/04	0	0.0
05/05	0	0.0	06/05	0	0.1	07/05	0	0.2	08/05	0	0.0	09/05	0	0.0
05/06	0	0.0	06/06	0	0.0	07/06	0	0.2	08/06	0	0.0	09/06	0	0.0
05/07	0	0.2	06/07	0	0.0	07/07	0	0.3	08/07	0	0.0	09/07	0	0.1
05/08	0	0.1	06/08	0	0.0	07/08	0	0.1	08/08	0	0.0	09/08	0	0.0
05/09	0	0.0	06/09	0	0.2	07/09	0	0.3	08/09	0	0.2	09/09	0	0.0
05/10	0	0.0	06/10	0	0.0	07/10	0	0.1	08/10	0	0.1	09/10	0	0.0
05/11	0	0.1	06/11	0	0.0	07/11	1	0.1	08/11	0	0.0	09/11	0	0.0
05/12	0	0.1	06/12	0	0.1	07/12	0	0.1	08/12	0	0.0	09/12	0	0.1
05/13	0	0.2	06/13	0	0.0	07/13	0	0.1	08/13	0	0.0	09/13	0	0.1
05/14	0	0.0	06/14	0	0.1	07/14	0	0.1	08/14	0	0.3	09/14	0	0.0
05/15	0	0.0	06/15	0	0.1	07/15	0	0.0	08/15	0	0.1	09/15	0	0.0
05/16	0	0.1	06/16	0	0.1	07/16	0	0.0	08/16	0	0.1	09/16	0	0.0
05/17	0	0.1	06/17	0	0.1	07/17	0	0.1	08/17	0	0.1	09/17	0	0.0
05/18	0	0.1	06/18	0	0.0	07/18	0	0.1	08/18	0	0.0	09/18	0	0.1
05/19	0	0.2	06/19	0	0.0	07/19	0	0.0	08/19	0	0.0	09/19	0	0.0
05/20	0	0.1	06/20	0	0.0	07/20	0	0.0	08/20	0	0.0	09/20	0	0.0
05/21	0	0.1	06/21	0	0.0	07/21	0	0.0	08/21	0	0.0	09/21	0	0.0
05/22	0	0.1	06/22	0	0.1	07/22	0	0.0	08/22	0	0.1	09/22	0	0.0
05/23	0	0.0	06/23	1	0.0	07/23	0	0.0	08/23	0	0.0	09/23	0	0.0
05/24	0	0.0	06/24	1	0.0	07/24	0	0.1	08/24	0	0.0	09/24	0	0.0
05/25	0	0.0	06/25	0	0.1	07/25	0	0.1	08/25	0	0.2	09/25	0	0.1
05/26	0	0.1	06/26	0	0.1	07/26	0	0.1	08/26	0	0.2	09/26	0	0.0
05/27	0	0.0	06/27	0	0.2	07/27	0	0.0	08/27	0	0.2	09/27	0	0.0
05/28	0	0.1	06/28	0	0.1	07/28	0	0.0	08/28	0	0.2	09/28	0	0.1
05/29	0	0.0	06/29	0	0.0	07/29	0	0.0	08/29	0	0.1	09/29	0	0.0
05/30	0	0.0	06/30	0	0.1	07/30	0	0.0	08/30	0	0.1	09/30	0	0.0
05/31	0	0.0				07/31	0	0.0	08/31	0	0.0	合計	4	9.3

(注1) 平年値は、平成24~令和5年のうち、令和4年を除く過去10年間の平均値
(令和4年度は6月26日以降欠測であったため)

(注2) 数値の説明：0…飛来無し日 1…飛来有り日

(注3) 飛来予測日は、JPP-NET（（一社）日本植物防疫協会）が提供する、『ウンカ飛来予測システム』の数値を使用

(注4) トビイロウンカ、セジロウンカは、埼玉県内で越冬できず、中国大陸からジェット気流に乗って飛来する。

（一社）日本植物防疫協会では、大陸での害虫の飛び立ち日と気流の状況から、日本国内各地点への飛来予測日を算出する情報を提供している。予測飛来日回数が多いほど、害虫の多発が予想される。



トビイロウンカによる坪枯れ被害



トビイロウンカ成虫



セジロウンカ成虫

(ク) スクミリンゴガイの被害状況(6~7月)調査の結果

- 1 調査年月日:被害状況調査は、田植後1~2か月後に調査(6~7月頃に調査する)
- 2 調査場所:発生地点での拡大状況を水田及び用水路で実施する/各担当地域
- 3 調査項目等:次表のとおり(調査日、品種、生息域面積、被害面積率、被害面積、被害状況)
- 4 具体的な調査方法

生息域面積:生息域面積は水田や用排水路の貝や卵塊の目視

被害面積率:欠株率1%以上のほ場割合

卵塊数:用・排水路又は畦畔10m当たりの平均卵塊数

被害状況:欠株の目視



調査年月日	主な調査地点	品種名	作型	移植時期	生息域面積 (ha)	被害面積率 (%)	被害面積 (ha)	卵塊数 (塊/10m)	被害状況 (被害田の欠株率)		備考	
									平均 (%)	最大 (%)		
令和6年	6月14日	加須市砂原・下北新井	コシヒカリ	早期	4月下旬	73	10	7.3	22.1	17	70	欠株が多いほ場が数筆ある。排水路の卵塊も昨年より増えており、最大は82塊/10m。
6年	6月21日	加須市外記新田	コシヒカリ	早期	4月下旬	16	7	1.1	24.1	5	40	昨年より欠株が目立つ。排水路の卵塊も昨年より増えており、最大は87塊/10m。
6年	6月21日	加須市新川通	オオナリ	早植	5月下旬	32	3	1.0	12.0	1	8	周辺地域に比べて移植時期が遅いためか、貝は目立つが卵塊や欠株は少ない。
6年	6月14日	幸手市千塚	コシヒカリ	早期	5月上旬	5	6	0.3	23.0	2	15	昨年より欠株(被害面積昨年比3倍)、卵塊数(昨年比4.7倍)とも増加。一部に卵塊が多い畦畔(最大81塊/10m)がある。
6年	7月8日	さいたま市西区宝来	不明	早植	5月上旬	8	1	0.1	9.0	1	1	欠株は昨年・一昨年同様少ないが、卵塊はやや多く、一部に卵塊が多い排水路(最大18塊/10m)がある。
6年	7月6日	さいたま市桜区	不明	早植~普通	5月中旬~6月中旬	54	70	37.8	35.6	5	20	昨年より被害田は増加、卵塊数に関しては最大値(147塊/m)が大きく引き上げている。生息面積・被害面積も増加している。
6年	7月6日	富士見市南畑新田	不明	早植~普通	5月中旬~6月中旬	81	20	16.2	5.3	1	3	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、欠株等の被害も少ない。発生面積は昨年度とほとんど変化なし。
6年	7月6日	さいたま市西区塚本町	不明	普通	6月上旬	25	5	1.3	5.0	1	1	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、欠株等の被害も少ない。発生面積は昨年度より増加した。
6年	7月29日	吉見町久保田新田	不明	普通	5月下旬	27	8	2.2	10.3	5	10	卵塊数は昨年並みだが、被害水田の面積は昨年の2倍以上と多い。被害水田の欠株率も昨年より高くなっている。
6年	7月29日	鴻巣市大芦	不明	普通	6月中旬	84	5	4.2	5.3	1	2	被害水田面積は昨年より多いが、被害水田の欠株率は昨年より低く、卵塊数も少ない。
6年	8月5日	熊谷市中奈良・下奈良(南)	不明	普通	6月下旬	10	30	3.1	24.7	8	15	水田内に貝や卵塊が多く、被害水田の50%程度が欠株率5%以上で昨年より被害が大きい。
6年	8月5日	熊谷市今井・下奈良(南)	不明	普通	6月下旬	32	40	13.0	43.7	15	30	昨年90%欠株のほ場は休耕だったが、被害水田面積は昨年の約2倍。パイプライン口・排水路等の卵塊も多く、100塊/10m以上が数か所あった(最大は200塊/10m)。
6年	8月5日	熊谷市下奈良(北)	不明	普通	6月下旬	29	10	2.9	19.8	3	10	排水路等の卵塊、被害水田面積とも昨年より増加。被害水田の30%程度が欠株率5%以上と、昨年より被害程度も大きい。
6年	8月5日	熊谷市西城	不明	普通	6月下旬	37	25	9.2	42.4	7	30	昨年は地区水田の50%程度が休耕だったが、本年はほぼ戻り、昨年の2倍超の水稲作付となった。昨年のような激甚被害はないが、作付増に伴って被害面積も増大した。
6年	8月7日	熊谷市善ヶ島	不明	普通	6月下旬	52	40	20.8	10.6	25	90	卵塊数は昨年よりやや少ないが、被害水田は大幅に増加し、被害水田の3割程度が欠株率30%以上であった。
6年	8月7日	熊谷市八ッ口	不明	普通	6月下旬	72	30	21.6	24.7	15	50	被害水田の欠株率は昨年よりやや低減されたが、被害水田の面積は昨年の3倍程度と多い。卵塊数(平均、最大)は昨年並。
6年	8月7日	熊谷市弥藤吾	不明	普通	6月下旬	7	30	2.0	99.2	10	25	地区内全域で卵塊が多いが(最大卵塊数334塊/10m)、欠株は少ない。欠株率25%のほ場が1ha程度あるため、平均欠株率が高くなった。
合計(面積)／平均(卵塊数)						644		143.9	24.5			
昨年(令和5年度)						560		39.3	14.7			

(ク) 水稻観察地点調査(6~9月)

a 20回振りすくい取り(頭)

			ヒメトビウンカ				セジロウンカ				ツマグロヨコバイ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	幼虫	41.9	80.8	180.3	36.0	0.0	0.1	15.8	0.7	0.0	34.4	341.1	18.5
		成虫	8.0	74.3	75.8	21.7	0.0	0.1	2.8	0.2	1.7	45.8	376.2	4.2
	平年値	幼虫	9.6	27.5	71.2	82.8	0.0	0.0	0.9	0.5	0.1	3.1	150.8	241.9
		成虫	6.9	34.8	71.5	74.8	0.0	0.1	3.9	1.3	3.3	9.6	66.8	89.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	幼虫	0.0	46.2	73.6	88.5	0.0	2.8	7.4	6.1	0.0	1.5	20.0	26.7
		成虫	0.0	26.6	101.5	37.7	0.0	3.1	6.0	11.5	0.0	1.2	24.3	17.6
	平年値	幼虫	0.1	9.6	202.8	177.7	0.0	0.0	6.6	10.3	0.2	0.1	4.5	35.7
		成虫	1.1	15.8	119.2	88.0	0.0	0.2	6.0	6.8	0.0	0.7	2.3	34.4

			斑点米カメムシ類 (アカヒゲホリミドリカスガ)				斑点米カメムシ類 (クモヘリカメムシ)				斑点米カメムシ類 (その他)			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	1.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	4.4	0.0	
	平年値	1.3	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.4	0.3	
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	1.2	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.2	0.3	1.4	
	平年値	1.8	1.1	1.7	0.2	0.0	0.0	0.2	1.0	0.0	0.0	0.4	0.9	

			イネツトムシ				イネアオムシ				イネカメムシ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	3.5	0.0	
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	3.5	3.7	
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	

- ・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
- ・平年値：平成28~令和5年の8年間の平均値（イネカメムシは平年値なし）
- ・令和6年度調査地点

【5/20までの移植ほ場】

川越市小中居、毛呂山町箕和田、吉見町西吉見、熊谷市中曾根、加須市大越、加須市麦倉、春日部市樋籠、幸手市神扇

【5/20以降の移植ほ場】

坂戸市横沼、川島町曲師、嵐山町吉田、本庄市児玉町吉田林、美里町小茂田、吉川市中井

b 病虫害発生調査結果

		葉いもち				穂いもち (%)				紋枯病			
		(発病度)				(被害利率)				(発病度)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.4	0.1	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	1.2	4.0
	平年値	0.0	0.8	0.8	1.7	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.4	3.9	20.6
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	1.2	6.9
	平年値	0.0	0.3	2.6	2.4	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.5	1.8	12.6

		もみ枯細菌病 (%)				ごま葉枯病				ばか苗病 (%)			
		(発病利率)				(発病度)				(発病株率)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	2.5	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

		縞葉枯病 (%)				心枯線虫病 (%)			
		(発病株率)				(発病株率)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	3.2	7.5	11.2	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.1	2.5	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.5	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.6	1.2	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0

		ニカメイガ (%)				イネツトムシ (個)				フタオビコヤガ* (頭)			
		(発病株率)				(苞数/25株あたり)				(虫数/1株あたり)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.6	0.6	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1

*別名：イネアオムシ

		コブノメイガ (%)				イネミズゾウムシ (頭)			
		(被害葉率)				(虫数/25株あたり)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.1	0.2	0.6	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.2	1.4 #	0.1	0.0	0.0	0.0

- ・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
- ・平年値：平成28～令和5年の8年間の平均値
- ・発病度は「R5 発生予察事業の調査実施基準（農林水産省）」に基づき、算出した。

(ク) イネツトムシ発育予測 (6月)

(有効積算温度シミュレーション計算値：6月1日～)

a 6月25日現在の予測

表1 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測

項目	令和6年予測	令和5年	平年	平年との差
産卵最盛日	7月18日	7月17日	7月20日	平年より2日早い
孵化最盛日	7月22日	7月20日	7月24日	平年より2日早い
3齢脱皮最盛日	7月30日	7月28日	8月2日	平年より3日早い
4齢脱皮最盛日	8月2日	7月31日	8月5日	平年より3日早い

注)：例年多発ほ場では予測値と一致し、少発生ほ場では発生時期が早い

算出方法：令和4年7月4日までの実測気象データ。その後は平年値を入力。

産卵最盛日は(6月1日～有効積算温度539日度の日)。孵化最盛日は(同594日度)

3齢脱皮最盛日は(同722日度)。4齢脱皮最盛日は(772日度) 発育零点は13.4℃。

b 実測気象データによる予測結果

表2 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測結果

項目	令和6年予測	令和5年	平年	平年との差
産卵最盛日	7月17日	7月17日	7月20日	平年より3日早い
孵化最盛日	7月21日	7月20日	7月24日	平年より3日早い
3齢脱皮最盛日	7月28日	7月28日	8月2日	平年より5日早い
4齢脱皮最盛日	7月31日	7月31日	8月5日	平年より5日早い

* 薬剤防除を必要とする目安(孵化最盛日より4～7日の間に密度調査を行う)

孵化直後の幼虫が存在しない場合(既に2～3齢以上に成長)

0.3個体/株 [100株調査で30個体]: 発生数が確定したと推定。

孵化直後の幼虫が存在する場合(1～2齢が中心)

0.05個体/株 [100株調査で5個体]: 今後増加が懸念される。

注) 0.3個体/株の発生によって、5%以下の減収とみなされる。

参考：神奈川県以南、千葉県海岸線で越冬しているが、神奈川県のピークが5月下旬として、埼玉県への飛来は6/1としている。

(ケ) フタオビコヤガ(イネアオムシ)発育予測 (6月)

「有効積算温度シミュレーション計算値：フェロモン調査の越冬世代成虫の50%誘殺日(5月4日)の翌日から」

a 6月25日現在の予測

表1 フタオビコヤガの発育次世代予測

項目	令和6年予測	令和5年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	5月15日	5月4日	5月16日	平年より1日早い
第1世代成虫発蛾最盛日	6月14日	6月8日	6月16日	平年より2日早い
第2世代成虫発蛾最盛日	7月7日	7月3日	7月10日	平年より3日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	7月26日	7月21日	7月31日	平年より5日早い

注)：発育零点は10.2℃

算出方法：令和4年7月4日までの気象データ。その後は平年値を入力。

第1世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度341日度の日)。

第2世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度682日度の日)。

第3世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度1023日度の日)。

b 実測気象データによる予測結果

表2 フタオビコヤガの発育次世代予測結果

項目	令和6年予測	令和5年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	5月15日	5月4日	5月16日	平年より1日早い
第1世代成虫発蛾最盛日	6月14日	6月8日	6月16日	平年より2日早い
第2世代成虫発蛾最盛日	7月6日	7月3日	7月10日	平年より4日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	7月25日	7月21日	7月31日	平年より6日早い

注)：発育零点は10.2℃

* 薬剤防除を必要とする目安(最盛日の2～7日後)

(シ) いもち病発生状況調査結果 (7月)

- 1 調査時期：7月中旬（基準日7月15日）
- 2 調査場所：定点および常発地
- 3 調査項目等：表のとおり
- 4 調査方法：任意の100株について調査

【参考】 発病度について

1～20：少発生、21～40：中発生
41～70：多発生、71以上：甚発生



いもち病(葉いもち) 左:慢性型病斑 右:進行型病

調査年月日 (令和)	調査地点	定点又は 常発地別	品種名	移植期	草丈 (cm)	発病 株率 (%)	発病度	病斑の種類		発病 部位	備 考	
								慢性型	進行型			
6年	7月9日	鴻巣市関新田	過去発生地点	不明	5月下旬	75	0	0.0	—	—	—	
〃	7月16日	蓮田市駒崎	過去発生地点	不明	6月中旬	60	0	0.0	—	—	—	
〃	7月8日	川越市小中居	定点	コシヒカリ	5月中旬	74.5	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	坂戸市横沼	定点	むさしの 26号	5月下旬	65.7	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	毛呂山町箕和田	定点	コシヒカリ	5月中旬	76.8	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバに病 斑あり
〃	7月16日	嵐山町吉田	定点	コシヒカリ	6月上旬	74.9	0.3	0.08	—	1	葉	300株調査 (100株×3)
〃	7月16日	川島町曲師	定点	にじの きらめき	6月上旬	64.6	0	0.0	—	—	—	300株調査 (100株×3)
〃	7月12日	吉見町西吉見	定点	コシヒカリ	5月中旬	77.1	0.7	0.17	2	0	葉	300株調査 (100株×3)
〃	7月10日	秩父市太田	常発地	彩のきずな	5月下旬	85	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	秩父市小柱	常発地	彩のきずな	6月中旬	55	1	0.3	1	0	葉	
〃	7月10日	小鹿野町下小鹿野	常発地	不明	6月中旬	60	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバも病 斑少
〃	7月10日	皆野町三沢	常発地	コシヒカリ	6月上旬	70	3	0.8	1	2	葉	
〃	7月9日	本庄市児玉町吉田林	定点	彩のかがや き	6月下旬	41.5	0	0.0	—	—	—	
〃	7月9日	美里町小茂田	定点	コシヒカリ	5月下旬	69.3	0	0.0	—	—	—	
〃	7月12日	熊谷市中曾根	定点	コシヒカリ	5月上旬	91.2	7.3	1.8	22	0	葉	300株調査 (100株×3)
〃	7月16日	行田市前谷	旧定点	彩のかがや き	6月下旬	20	0	0.0	—	—	—	
〃	7月17日	加須市麦倉	定点	コシヒカリ	4月下旬	90	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバは病 斑多
〃	7月17日	加須市大越 1	定点	ほしじるし	5月中旬	83	5	1.3	5	—	葉	
〃	7月9日	加須市大越 2	過去発生地点	不明	6月上旬	65	0	0.0	—	—	—	
〃	7月16日	春日部市樋籠	定点	コシヒカリ	5月上旬	98	0	0.0	—	—	—	
〃	7月17日	吉川市中井	定点	彩のきずな	5月中旬	72	0	0.0	—	—	—	
〃	7月16日	幸手市神扇	定点	コシヒカリ	5月中旬	98	0	0.0	—	—	—	
調査地点数：22		発病地点数：6		発病地点率：27.3%			平均	0.8	0.2	6.2	0.6	

いもち病発生状況調査 過去の調査結果

調査年月日 (平成)	調査地点数	発病地点数	発病地点率 (%)	平均発病株 率 (%)	平均発病度	病斑の種類		備 考(注意報発表の有無など)
						慢性型	進行型	
平成 26年	7月中下旬	32	4	12.5	1.3	0.6	0.7	6月1日～7月25日の感染好適日は平年の1.4倍。平坦 地でも発生を確認した。
27年	7月中下旬	31	23	74.2	17.7	16.0	1.6	7月9日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
28年	7月中下旬	36	22	61.1	14.8	6.4	2.8	7月27日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
29年	7月中下旬	51	12	23.5	3.6	8.8	0.0	
30年	7月中下旬	22	5	22.7	22.7	1.3	0.0	
令和 元年	7月中下旬	23	13	56.5	2.0	2.0	0.3	発生地点率は高かったが、発生程度や発生株率が低 かったため、予察情報の発表はしなかった。
2年	7月中下旬	23	14	60.9	4.1	2.0	2.3	7月28日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
3年	7月中下旬	22	13	59.1	12.7	13.0	8.6	7月7日 注意報発表(葉いもち)
4年	7月中下旬	22	7	31.8	5.5	1.1	14.0	
5年	7月中下旬	22	5	22.7	0.6	2.5	0.0	
過去10年間平均		28.4	11.8	42.5	8.5	5.4	3.0	

(ス) 水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果

- 1 調査年月日:7月中旬旬を基準日として調査した。
- 2 調査場所:これまで実施してきた調査地点(畦畔・雑草地・土手等)／各担当地域。
- 3 調査項目等:斑点米カメムシ類の幼虫・成虫別に計数調査した。
次表のとおり。(調査地点、調査日、カメムシ類別、調査場所の状況(雑草の種類、草丈などの管理状況等について分かる範囲で記載する。))
- 4 具体的な調査方法:捕虫網による10往復・20回振り調査。



主な斑点米カメムシ類(表中出現順)

調査年月日	調査地点/種類	イネホソドリカスミカメ*		アカスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計 頭	参考 前年 (R5年)	備考 (雑草などの管理状況等)	
		幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫				
令和																			
6年	7月8日	川越市小中居	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	畦畔、メヒシバ(5cm)とクサネム主体	
6年	7月10日	坂戸市横沼	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	7	8	農道脇法面、イネ科雑草(1m)主体、その他(ブチヒゲカメムシ1、アカヒメハリカメムシ成2)	
6年	7月10日	毛呂山箕和田	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	2	5	12	休耕田、カモシグサ(60cm)とツユクサ主体、その他(アカヒメハリカメムシ成2)	
6年	7月8日	嵐山町吉田	0	1	0	6	0	0	0	4	0	0	0	0	0	11	12	畦畔(イネ定点調査水田付近)。メヒシバ(40cm)、ノビエ主体(60cm)。	
6年	7月5日	滑川町福田	0	0	4	56	0	0	0	1	0	0	0	0	0	61	-	畦畔(ダイズ定点)。セイバンモロコシ(1~1.5m)優占。	
6年	7月8日	川島町曲師	1	49	0	11	0	0	0	1	2	0	0	0	4	68	16	畦畔(イネ定点調査水田)。メヒシバ(40cm)、ノビエ(60cm)主体。その他(ブチヒゲカメムシ幼4)	
6年	7月8日	川島町上大屋敷	0	3	0	5	0	0	1	5	0	0	0	0	0	14	-	水田畦畔(ノビエ類主体:60~70cm)	
6年	7月4日	吉見町西吉見	19	47	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	69	15	畦畔(イネ定点調査水田)。ほとんどメヒシバ優占(草丈50cm)。	
6年	7月9日	本庄市児玉町吉田林	0	0	0	8	0	0	2	6	0	0	0	0	6	22	156	イネカメムシ調査定点横の雑草地、エノコログサ、セイバンモロコシ、ギシギシ(90~150cm)、その他(アカヒメハリカメムシ成6)	
6年	7月9日	美里町小茂田1	1	17	4	5	0	0	0	10	0	4	0	0	5	46	231	定点南水路脇、オヒシバ(75cm)主体、その他(アカヒメハリカメムシ成5)	
6年	7月9日	美里町小茂田2	0	0	7	4	1	1	0	5	0	0	0	1	2	21	216	ねぎほ場横の雑草地、エノコログサ(90cm)主体、その他(ミナミアオカメムシ幼1、アカヒメハリカメムシ成2)	
6年	7月5日	熊谷市中曾根1	2	4	0	8	0	0	3	9	3	4	0	0	5	38	43	畦畔、通殿川沿い、エノコログサ主体(草丈60cm)、その他(アカヒメハリカメムシ5)	
6年	7月5日	熊谷市中曾根2	0	0	0	5	0	0	0	3	4	0	0	0	1	13	108	畦畔、メヒシバ(草丈50cm)主体、その他(ブチヒゲカメムシ成1)	
6年	7月5日	熊谷市中曾根3	6	16	0	7	0	0	8	6	1	2	0	0	1	47	-	ニカメイガトラップ付近水田畦畔、メヒシバ(草丈50cm)主体、その他(アカヒメハリカメムシ成2)	
6年	7月9日	行田市前谷	4	23	3	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37	143	畦畔、メヒシバ(60cm)主体	
6年	7月9日	加須市麦倉	0	0	0	0	0	0	0	7	0	1	0	0	0	8	14	畦畔、エノコログサ(100cm)、メヒシバ(70cm)主体	
6年	7月9日	加須市大越	0	51	0	1	0	0	0	9	0	0	0	0	0	61	22	畦畔、オヒシバ(50cm)主体	
6年	7月9日	加須市間口	0	7	4	13	0	0	8	10	1	1	0	0	5	49	-	畦畔、メヒシバ(70cm)主体(アカヒメハリカメムシ成3、イネカメムシ成1、ブチヒゲハリカメムシ成1)	
6年	7月4日	幸手市神扇	0	0	5	32	0	0	0	1	0	0	0	0	8	46	40	水路法面、穂付きセイバンモロコシ主体、その他(イネカメムシ成8)	
6年	7月9日	春日部市桶籠	10	3	11	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	28	12	畦畔、メヒシバ、エノコログサ	
6年	7月11日	吉川市中井	33	37	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	72	37	畦畔、メヒシバ主体	
	合計	調査地点数:21	77	263	39	171	1	1	23	83	11	12	0	1	5	38	725	1,090	発生地点率 21/21地点 100%
	平均	1地点あたり頭数	3.7	12.5	1.9	8.1	0.0	0.0	1.1	4.0	0.5	0.6	0.0	0.0	0.2	1.8	34.5	60.6	

過去のデータ

調査年月日	調査地点/種類	イネホソドリカスミカメ*		アカスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計 頭	発生 地点 率 %	備考 (調査地点のうち斑点米カメムシの発生地点数)	
		幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫				
平成																			
26年	7月上中旬	18調査地点	304	343	107	37	0	0	2	13	1	2	0	1	1	9	820	94.4%	発生地点 17/18地点
		1地点当たり平均	16.9	19.1	5.9	2.1	0.0	0.0	0.1	0.7	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.5	45.6	-	平成26年6月30日に、平成26年度病害虫発生予察注意報第4号「斑点米カメムシ類」を発表
27年	7月上中旬	18調査地点	43	135	3	12	0	0	0	11	10	2	0	0	0	9	225	77.8%	発生地点 14/18地点
		1地点当たり平均	2.4	7.5	0.2	0.7	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.1	0.0	0.0	0.0	0.5	12.5	-	
28年	7月上中旬	15調査地点	8	32	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	44	73.3%	発生地点 11/15地点
		1地点当たり平均	0.5	2.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	-	
29年	7月上中旬	22調査地点	17	64	0	0	0	0	2	6	0	0	0	1	9	1	100	77.2%	発生地点 17 / 22地点
		1地点当たり平均	0.8	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	4.5	-	平成29年7月3日に、平成29年度病害虫発生予察注意報第1号「斑点米カメムシ類(特に、アカヒゲホソドリカスミカメ、アカスジカスミカメ)」を発表
30年	7月上中旬	17調査地点	31	97	1	12	0	1	0	4	0	0	0	2	0	0	148	58.8%	発生地点 10/17地点
		1地点当たり平均	1.8	5.7	0.1	0.7	0.0	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	8.7	-	
元年	7月上中旬	17調査地点	200	210	0	1	1	0	19	10	1	3	0	0	0	0	445	82.4%	発生地点 14/17地点
(令和)		1地点当たり平均	11.8	12.4	0.0	0.1	0.1	0.0	1.1	0.6	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	26.2	-	
2年	7月上中旬	17調査地点	52	94	9	14	0	11	1	13	0	1	0	1	0	14	210	100.0%	発生地点 17/17地点
(令和)		1地点当たり平均	3.1	5.5	0.5	0.8	0.0	0.6	0.1	0.8	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.8	12.4	-	
3年	7月上中旬	17調査地点	21	87	0	12	0	2	3	27	0	1	0	1	0	0	154	100.0%	発生地点 17/17地点
(令和)		1地点当たり平均	1.2	5.1	0.0	0.7	0.0	0.1	0.2	1.6	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	9.1	-	
4年	7月上中旬	17調査地点	107	240	30	41	0	0	1	13	0	1	1	1	2	2	439	88.2%	発生地点 15/17地点
(令和)		1地点当たり平均	6.3	14.1	1.8	2.4	0.0	0.0	0.1	0.8	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	25.8	-	
5年	7月上中旬	18調査地点	336	291	175	160	0	0	26	42	20	8	0	4	8	20	1,090	100.0%	発生地点 18/18地点
(令和)		1地点当たり平均	18.7	16.2	9.7	8.9	0.0	0.0	1.4	2.3	1.1	0.4	0.0	0.2	0.4	1.1	60.6	-	
平年		1地点当たり平均	6.3	9.1	1.8	1.6	0.0	0.1	0.3	0.8	0.2	0.1	0.0	0.1	0.1	0.3	20.8	85.2%	

(セ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果(1月)

病害虫調査データ

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果

令和7年1月16日
埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しています。

令和元年度～5年度までは保毒虫率が減少傾向にありましたが、今年度は保毒虫率が平年よりも低いものの増加に転じました。このうち、コシヒカリ早植栽培、キヌヒカリ普通期栽培などイネ縞葉枯病感受性が特に高い生育ステージにヒメトビウンカが飛来する品種・作型が多い地域では、近年になくかなり高い保毒虫率となっています。

イネ縞葉枯病は移植後から幼穂形成期までに感染します。感受性品種では、育苗箱施薬剤等を用いた感染前の予防対策を徹底してください。

1 調査方法

令和6年11月に、県内25か所の水田周辺でヒメトビウンカ幼虫(写真1)をサンプリング(100頭程度/1か所)し、ELISA法(図1)により保毒虫を判定し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を算出した。



写真1 ヒメトビウンカ幼虫
(体長2mm)

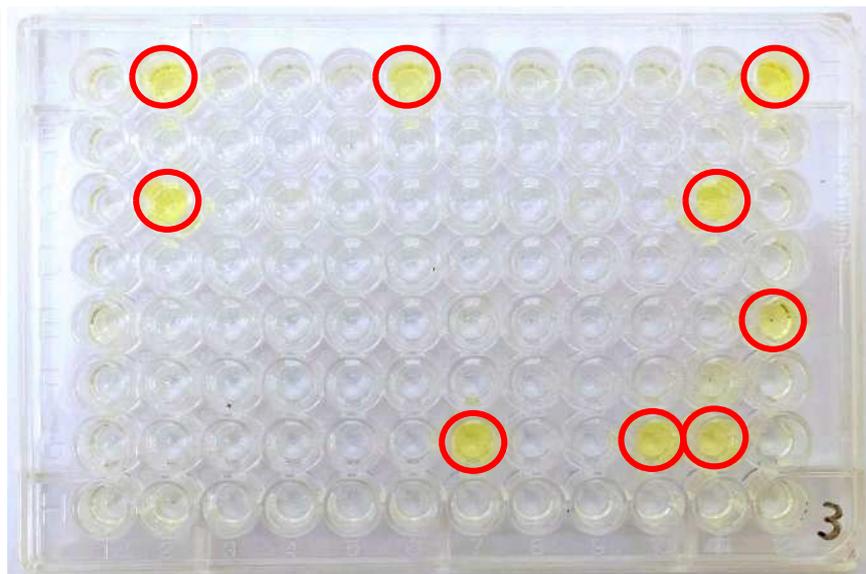


図1 ELISA法による保毒虫判定
ウイルス有り：黄色(○内)、ウイルス無し：無色

2 調査結果の概要

縞葉枯病抵抗性品種の作付比率が縞葉枯病感受性品種の作付比率を上回った令和元年度以降、ヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は減少傾向にあったが、令和6年度は平均で3.8%と平年よりは低いものの前年比1.6倍と増加に転じた(図2)。

昨年度は統計的な有意差はないもののコシヒカリ早期栽培地域を主体に5月中旬までの移植主体の地域で保毒虫率が若干高い傾向が見られたが、令和6年度は移植時期による保毒虫率に差は見られなかった(表1)。ただし、コシヒカリ早植栽培、キヌヒカリ普通期栽培などイネ縞葉枯病感受性が高い生育ステージにヒメトビウンカが飛来する品種・作型が多い地域では、過去3年と比較するとかなり高い保毒虫率となっている(表2)。

(セ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果(1月)

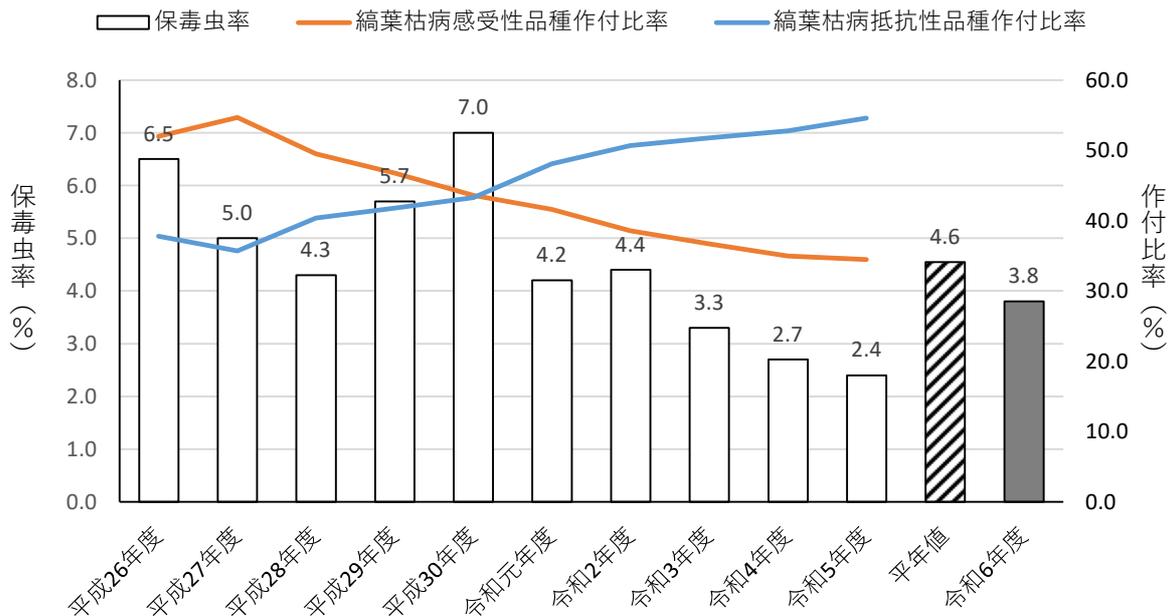


図2 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移

表1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率(令和6年度)

5月中旬までの移植地域		5月下旬以降の移植地域		NS
採集地点	保毒虫率(%)	採集地点	保毒虫率(%)	
さいたま市桜区昭和	5.2	坂戸市横沼	0.0	
鴻巣市屈巢	0.0	小川町高谷	4.2	
富士見市みどり野	1.0	川島町上八ツ林	5.2	
川越市小中居	9.4	吉見町久保田	2.1	
熊谷市中曾根	13.5	嵐山町吉田	5.2	
加須市大越	0.0	秩父市小柱	4.2	
加須市柏戸	1.0	本庄市児玉町吉田林	9.4	
春日部市八丁目	4.2	美里町阿那志	1.0	
幸手市神扇	3.1	上里町長浜	0.0	
杉戸町大塚	1.0	熊谷市中恩田	10.4	
		熊谷市御正新田	8.3	
		行田市前谷	0.0	
		行田市下池守	5.2	
		加須市下谷	0.0	
		久喜市菖蒲町台	0.0	
地域平均(10地点)	3.9	地域平均(15地点)	3.7	
採集地点数	25	平均保毒虫率(%)	3.8	

表2 過去3年との高保毒虫率地点数の比較

年度	令和3	令和4	令和5	令和6
最大保毒虫率(%)	13.5	8.2	8.2	13.5
保毒虫率8%以上の地点数	2	1	1	5
保毒虫率5%以上の地点数	7	3	3	9

(ソ) イネカメムシ越冬調査結果（11月～3月）

病害虫発生予察情報

イネカメムシ越冬状況調査結果について

令和7年3月31日
埼玉県病害虫防除所

イネの穂を激しく加害して不稔や斑点米を引き起こすイネカメムシについて、越冬場所と越冬量を把握するため越冬状況調査を行いました。

調査の結果、イネカメムシ越冬成虫が100地点で確認され、全172地点の58.1%に達し、広範囲で越冬していることが確認されました。調査地点中、全体の傾向としては落ち葉内や落ち葉の下で越冬成虫を確認できた割合が57～88%と高く、ジャノヒゲ株内やススキなどイネ科雑草株元でも約50%の地点で越冬成虫が確認されました。

また、越冬密度の把握を目的に調査面積を定めて調査を実施した結果、落ち葉内や落ち葉の下で1㎡当たり12.4～42.4頭、雑草地で3.8頭であったほか、ジャノヒゲ株内で279.4頭に達しました。

このように、本年は越冬成虫数がきわめて多いことが明らかであり、水稻においてイネカメムシが多発生となるリスクがきわめて高いと考えられますので、広域で適切な防除を行ってください。

1. 調査時期

令和6年11月1日～令和7年3月18日

2. 調査地点

県内21市10町

さいたま市（西区・桜区・岩槻区）、川口市、鴻巣市、草加市、志木市、川越市、富士見市、東松山市、滑川町、嵐山町、小川町、川島町、吉見町、本庄市、美里町、神川町、熊谷市、深谷市、寄居町、行田市、加須市、羽生市、久喜市、蓮田市、白岡市、春日部市、越谷市、幸手市、吉川市、杉戸町、松伏町、

3. 調査方法

- (1) 前年の多発生地や周辺的环境を考慮して予備的な調査を実施し、イネカメムシ越冬成虫を確認した場所を主体に、以下の手法で「本調査」を実施。
- (2) 林地、林床、生垣等から1地点につき2～4か所（各0.25～1㎡）の落ち葉を採取。採取した落ち葉内に潜入して越冬しているイネカメムシ成虫の個体数を調査。
- (3) 畦畔や法面などのジャノヒゲ株を対象に、30～50cm四方の範囲をかき分けて調査し、目視により越冬成虫を採集、計数。
- (4) ススキ等の雑草の株元や立ち木の株元について、調査場所の状況に応じて30～50cm四方の範囲を調査し、目視により成虫を採集、計数。
- (5) 堤防や雑草地について、原則として1m四方の範囲の複数地点を対象にかき分けて調査し、目視により成虫を採集、計数

(ソ) イネカメムシ越冬調査結果 (11月～3月)

4. 結果

調査の結果、越冬成虫を確認した場所では全体として以下のような傾向が認められました。

- ①冬の季節風が当たりにくく、南側や西側に開けていて陽だまりになりやすい場所。
- ②落ち葉が堆積しており、乾燥しておらず適度な湿度が保たれている場所。
- ③表土が柔らかかったり、堆積物や落ち葉の腐植化が進んでいて膨軟な場所。
- ④厳冬期でも緑色の葉をつけているイネ科雑草の株元やジャノヒゲの株内。
- ⑤耕地や堤防などの開けている場所よりも、北側や東側に構造物や林がある場所。



日当たりの良い生垣下に堆積した落ち葉



水田に隣接する運動場脇に吹き寄せられた落ち葉



ジャノヒゲの株内で越冬中の成虫



落ち葉の下や浅い土中で越冬中の成虫

(1) 調査総数の内訳(予備調査・本調査の計)

調査場所	調査地点数	成虫確認地点数	同左割合(%)
落ち葉内・落ち葉の下			
林内	5	3	60.0
林縁	7	4	57.1
植え込みの下	21	17	81.0
生垣下	5	4	80.0
ジャノヒゲ共	8	7	87.5
構造物わき	6	5	83.3
その他	37	25	67.6
立ち木			
株元	11	4	36.4
篠地			
堆積物・落ち葉下	3	1	33.3
ジャノヒゲ			
株内	20	10	50.0
河川敷・堤防			
雑草等	5	0	0
雑草地			
ススキ等の雑草株元	15	8	53.3
水田			
畦畔雑草等	3	0	0
刈株・わら	12	4	33.3
その他			
人工物等の下	5	3	60.0
果樹カメムシ類越冬調査			
林内落ち葉	9	5	55.6
合計(地点数)・平均(割合)	172	100	58.1

(ソ) イネカメムシ越冬調査結果 (11月～3月)

(2) 本調査における個体密度

調査場所	調査地点数	成虫確認地点数	同左割合 (%)	個体密度 頭/m ²
落ち葉内・落ち葉下				
林内または林縁	15	10	66.7	12.4
植え込み下・生垣下等	18	18	100	42.4
その他	19	17	89.5	25.9
ジャノヒゲ株内	6	6	100	279.4
雑草地(ススキ等のイネ科雑草)・堤防等	9	4	44.4	3.8
水田内(刈株)	10	4	40.0	0.0014

※上表の落ち葉調査(林内)には果樹カメムシ類越冬調査 9 地点を含む。

(3) 果樹カメムシ類越冬調査時に混獲されてきた
イネカメムシの状況

採取地点	令和7年	令和6年
東松山市松山	0	0
北本市荒井	—	0
鴻巣市関新田	24	—
寄居町鉢形	0	0
神川町新里	0	0
加須市上種足	192	2
蓮田市高虫	16	0
春日部市内牧	0	0
久喜市清久	227	8
久喜市菖蒲町	4	—
合計	463	10
1地点あたり平均頭数	51.4	1.3
1地点あたり密度(頭/m ²)	17.1	0.4
確認地点率(%)	55.6	25.0



注) 果樹カメムシ越冬調査で混獲されたイネカメムシは
計数時に死亡していたものも含まれます。

5. 生態と被害

越冬した成虫が6月下旬から7月上旬にかけて水田および周辺のイネ科雑草に飛来します。早期栽培水田では出穂前から成虫が侵入し、交尾・産卵を行います。また、7月下旬以降は出穂期の水田に成虫が侵入し、穂を加害します。

出穂期～乳熟期に激しく加害されると不稔となり、登熟期の加害により基部斑点米が生じ、収量および品質を著しく低下させます。

イネカメムシ成虫(上)と
斑点米被害(下)

6. 令和7年産水稻で注意する点

越冬明けの、発生初期段階から多発生が見込まれます。6月下旬以降水田内外を注意深く観察して侵入有無を確認するとともに、出穂期とその8～14日後の2回、必ず防除を行ってください。とくに、周囲の水田に比較して出穂時期が早い、または遅い水田は集中的な加害を受けリスクが高いため、発生状況に応じて防除回数を増やす等の対応を取ってください。

集中的な加害を回避するため、出穂時期が極力揃うよう地域内での作型・品種選定も十分に検討してください。

(タ) 農業技術研究センター 県予察ほ場（玉井試験場）調査結果（6～9月）

a ほ場内見取り調査（%）

(a) 5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年
葉いもち	発病株率%	0.0	0.3	0.0	3.3	2.0	3.1	0.7	0.7	0.2	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	2.0	1.6	0.0	0.7	-
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	2.0	0.7	0.2	0.0	4.7	4.5	10.7	6.7	22.9
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	4.0	0.0	1.5	4.7	20.0	22.5	5.3	4.7	54.0	5.3	4.7	56.1
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-
イネヒメコリハエ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	0.0	0.7	1.1	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネトヨイシ	食害株率%	0.0	0.0	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年
葉いもち	発病株率%	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	1.1	0.0	0.0	0.3	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	13.0
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	10.0	6.7	10.9	19.3	10.0	25.5	40.7	29.3	42.0
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネアオムシ	食害株率%	0.0	2.7	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.1	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
イネヒメコリハエ	食害株率%	0.0	1.3	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	0.0	1.0	2.1	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネトヨイシ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサキリ類	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c) 6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2022年	平年	2024年	2023年	平年
葉いもち	発病株率%	-	-	-	0.0	2.7	4.0	0.0	0.0	7.2	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	29.2
紋枯病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0	1.6	14.7	6.0	31.8
ばか苗病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	1.8	3.3	5.3	20.5	0.0	5.3	26.8
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.4	5.3	0.7	9.8	0.0	0.0	0.1
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.2	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	1.6
イネヒメコリハエ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	-	-	-	0.7	0.0	4.4	-	-	-	-	-	-
イネトヨイシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサキリ類	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

b すくい取り調査(20回振)でのウンカ・ヨコバイ類等の捕獲数

(a) 5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	19.0	17.3	36.3	31.2	47.5	28.0	75.5	66.7	141.0	86.5	227.5	461.6	82.5	40.0	122.5	396.3
ツマグロヨコバイ	2.0	7.7	9.7	4.5	37.5	17.5	55.0	10.8	47.0	337.5	384.5	162.5	550.5	2,512.0	3,062.5	727.3
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	1.5	1.5	9.5	3.5	13.0	4.7	0.0	5.5	5.5	9.5
トビイロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
アカヒゲホリトリカスミカメ			3.0	5.3			0.0	0.2			0.0	1.1			0.0	0.0

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	19.0	149.7	168.7	43.4	38.5	26.0	64.5	69.6	156.0	140.0	296.0	431.2	122.0	27.0	149.0	425.1
ツマグロヨコバイ	3.0	1.7	4.7	3.6	29.5	3.5	33.0	3.8	28.0	417.0	445.0	23.8	391.0	2,276.0	2,667.0	442.6
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	1.1	2.0	2.5	4.5	5.1	0.0	0.0	0.0	12.0
トビイロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
アカヒゲホリトリカスミカメ			7.3	6.2			0.0	0.2			0.5	0.5			0.0	0.2

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c) 6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	-	-	-	-	9.0	4.0	13.0	49.9	20.0	16.0	36.0	302.4	121.0	38.0	159.0	504.4
ツマグロヨコバイ	-	-	-	-	10.0	1.5	11.5	7.7	22.0	7.0	29.0	84.9	498.0	2,656.0	3,210.7	2,668.3
セジロウンカ	-	-	-	-	0.5	0.0	0.5	0.4	6.5	0.0	6.5	17.9	2.0	6.0	8.0	69.0
トビイロウンカ	-	-	-	-			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3
アカヒゲホリトリカスミカメ	-	-	-	-			1.0	5.2			0.0	0.8			0.0	0.3

-は未調査

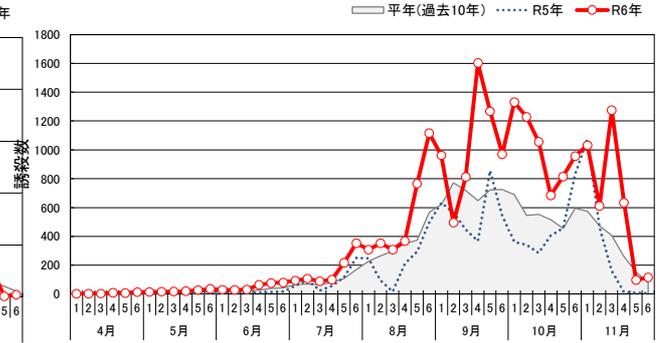
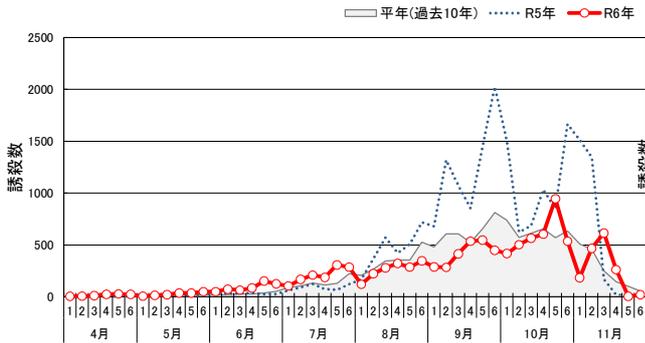
平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

イ 野菜等

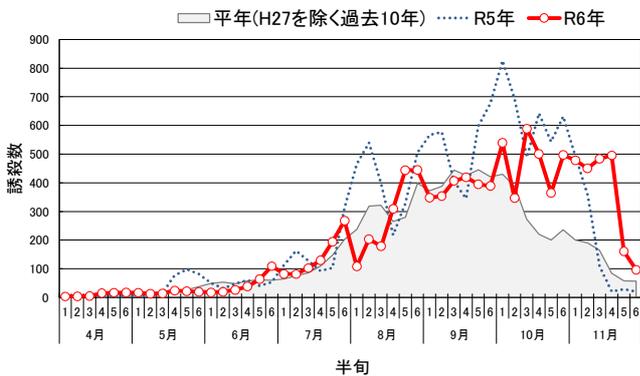
(ア) ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物: ブロッコリー 調査地点: 深谷市針ヶ谷(旧: 山河)

対象作物: ダイズ・野菜 調査地点: 熊谷市樋春



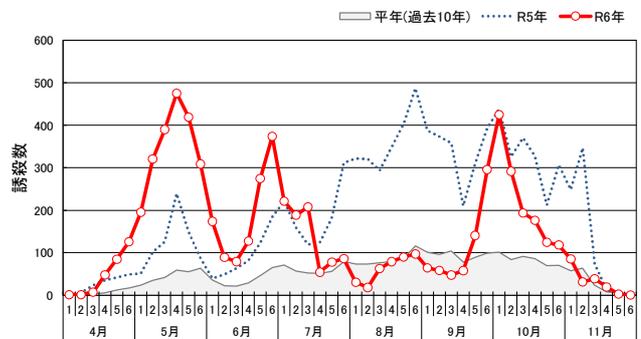
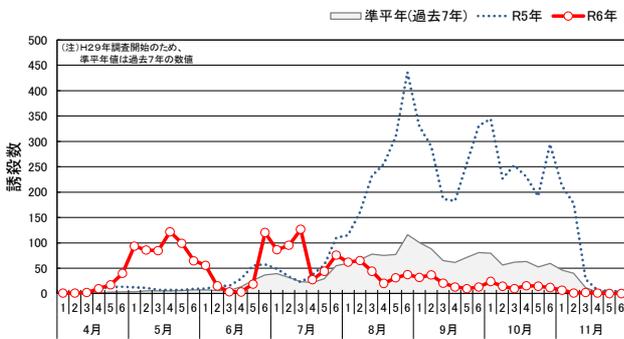
対象作物: イチゴ、ハウス花き 調査地点: 久喜市菖蒲町



(イ) オオタバコガのフェロモントラップ調査 (4～11月)

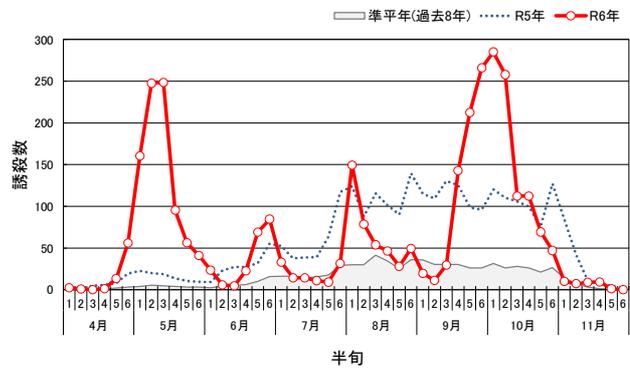
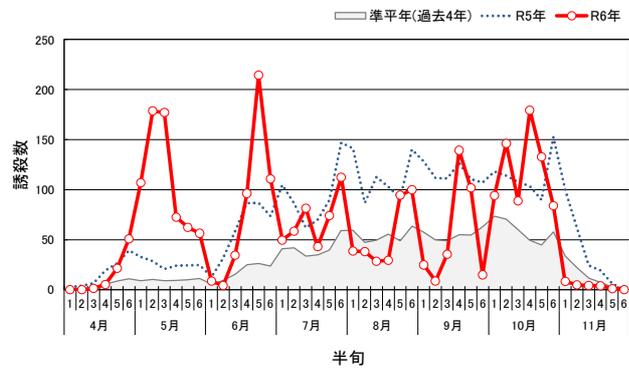
対象作物: 露地ナス 調査地点: 本庄市尻玉町小平

対象作物: 露地野菜 調査地点: 深谷市針ヶ谷(旧: 山河)



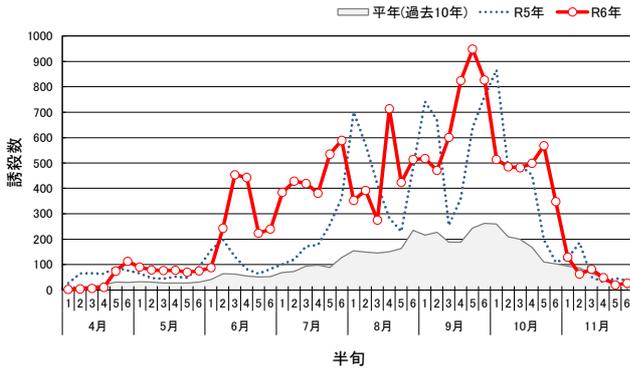
対象作物: ネギ 調査地点: 越谷市中島

対象作物: 露地ナス 調査地点: 杉戸町大塚

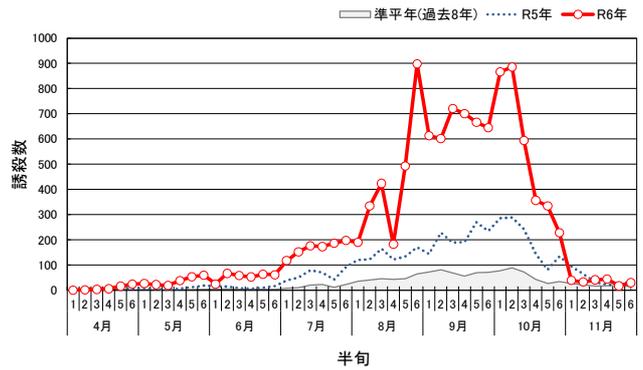


(ウ) シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査 (4~11月)

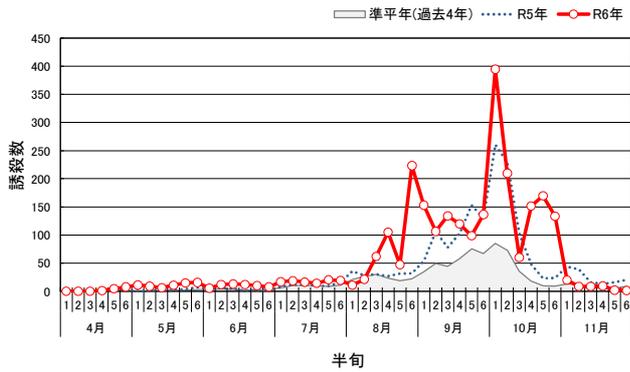
対象作物:ネギ 調査地点:深谷市新戒



対象作物:ネギ 調査地点:越谷市中島



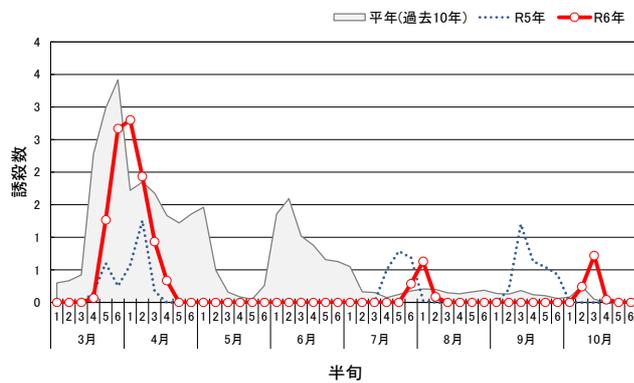
対象作物:ネギ 調査地点:杉戸町大塚



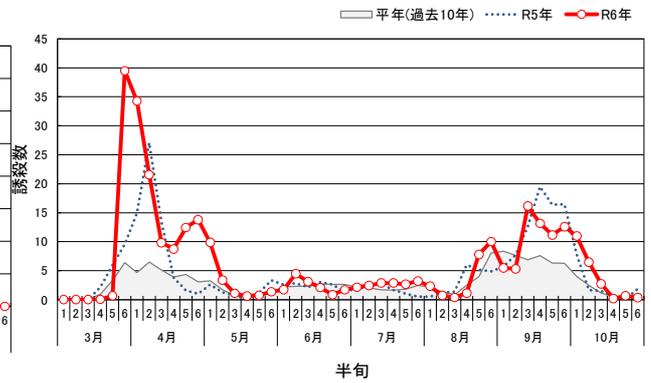
ウ 果樹

(ア) ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査 (3~10月)

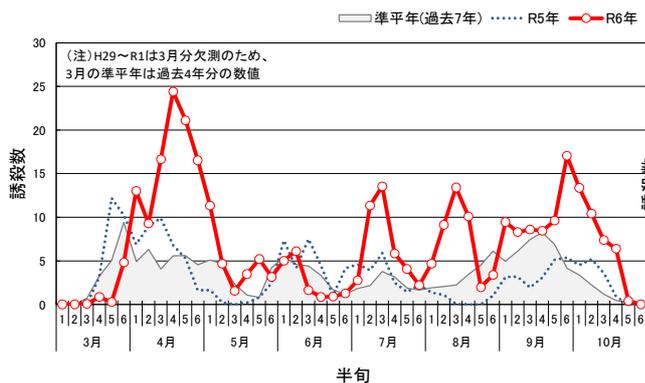
対象作物:ナシ 調査地点:鴻巣市常光



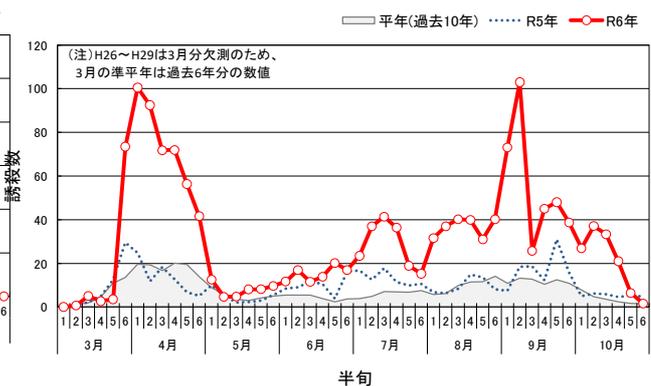
対象作物:ナシ 調査地点:上里町長浜



対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



対象作物:なし 調査地点:春日部市内牧



対象作物:ナシ 調査地点:加須市鴻基

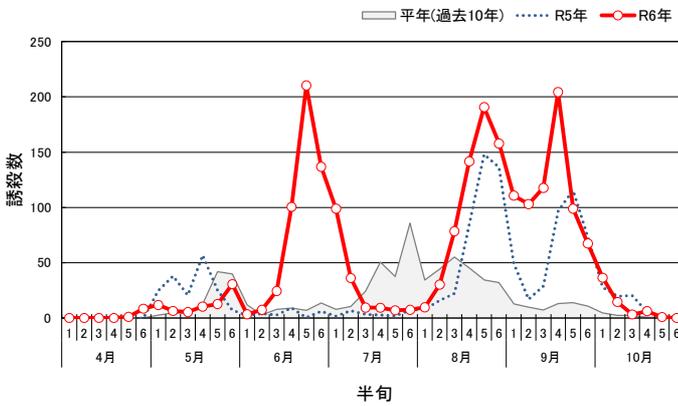


(イ) 果樹カメムシの予察灯調査 (4~10月)

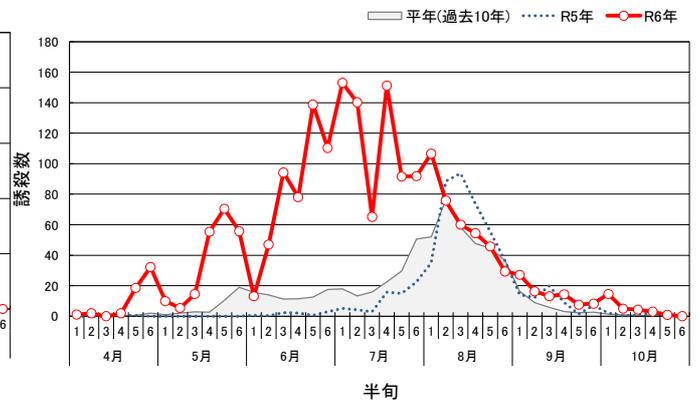
主要な果樹カメムシ (4種*合計)

※チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、アオクサカメムシ

対象作物:ナシ 調査地点:上里町長浜



対象作物:なし 調査地点:春日部市内牧



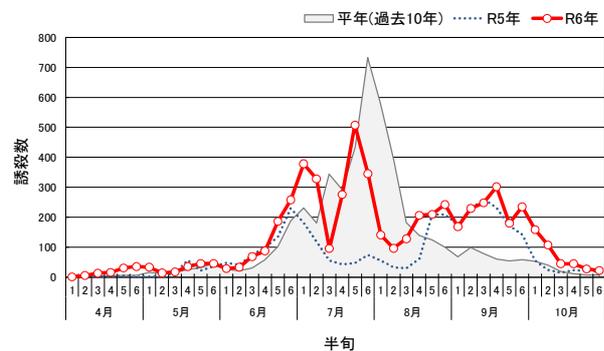
対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



(ウ) 果樹カメムシのフェロモントラップ調査 (4~10月)

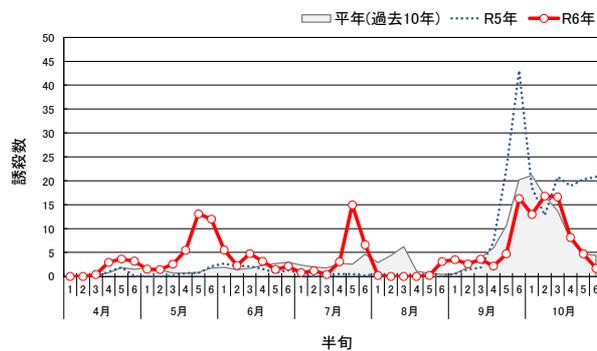
a チャバネアオカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



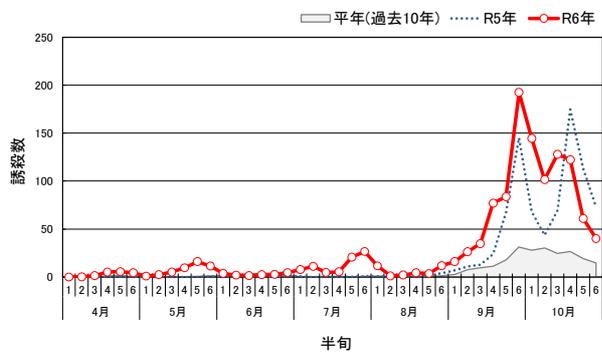
b クサギカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



c ツヤアオカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



果樹カメムシ類の越冬密度調査結果について

令和7年3月12日
埼玉県病害虫防除所

ナシ、モモ、カンキツなどの果樹を加害する果樹カメムシ類の発生量の予測を目的として、チャバネアオカメムシなどの越冬密度調査を行いました。

調査の結果、チャバネアオカメムシ（越冬成虫）の捕獲数は1地点（計3㎡）あたり0.75頭/3㎡で過去10年の平均虫数（1.09頭/3㎡）と比較してやや少なく、確認地点率は63%で過去10年の平均地点率（43%）よりやや高くなりました。

果樹カメムシ類は、地域によって越冬密度が異なり、スギ・ヒノキが近くにある山間部の果樹園に多く飛来することがあります。

また、越冬密度が低い年でも気象条件やスギ・ヒノキの球果の量によって発生が多くなる場合もあります。今後、病害虫防除所が発表する情報（予察灯、フェロモントラップでの誘殺数）を参照し、果樹園等への初期飛来に注意して適切に防除してください。

1 調査時期

令和7年1月23日～2月26日

2 調査地点

8地点（表参照）

3 調査方法

- (1) 雑木林の南斜面や林床から、1地点につき3か所（各1㎡）の落葉を採取。
- (2) 採取した落葉をビニル袋に詰めて口を閉じた状態で温室内（25℃加温）に2週間程度静置し、体色が緑化したチャバネアオカメムシ等の成虫数を調査

4 結果

1地点あたりの平均越冬虫数は0.75頭で、過去10年の平均虫数1.09頭に比べ少なくなっています。確認地点率は63%で、平均地点率43%に比べやや高くなっています。（表、図1、図2）

特に越冬量の多かった昨年（1地点あたり平均越冬虫数4.75頭、確認地点率75%）と比較すると少なくなっています。

また、果樹カメムシ類の一種であるツヤアオカメムシ、イネの重要な害虫であるイネカメムシも落ち葉から確認されました。

表 果樹カメムシ類の越冬成虫数（生存個体）

採取地点	チャバネアオカメムシ	その他果樹カメムシ類	イネカメムシ	
			生存	死亡
東松山市松山	1		0	0
鴻巣市関新田	0		18	6
寄居町鉢形	1		0	0
神川町新里	1	ツヤアオカメムシ1	0	0
加須市上種足	1		173	19
蓮田市高虫	0	ツヤアオカメムシ2	13	3
春日部市内牧	0		0	0
久喜市清久	2	ツヤアオカメムシ2	30	197
計	6			

平均越冬成虫数（1地点あたり） 0.75 （過去10年の平均虫数 1.09）
 確認地点率 63% （過去10年の平均地点率 43%）

注)イネカメムシは果樹を加害しませんが、近年、水稻での被害が増加しているため参考として掲載しています。

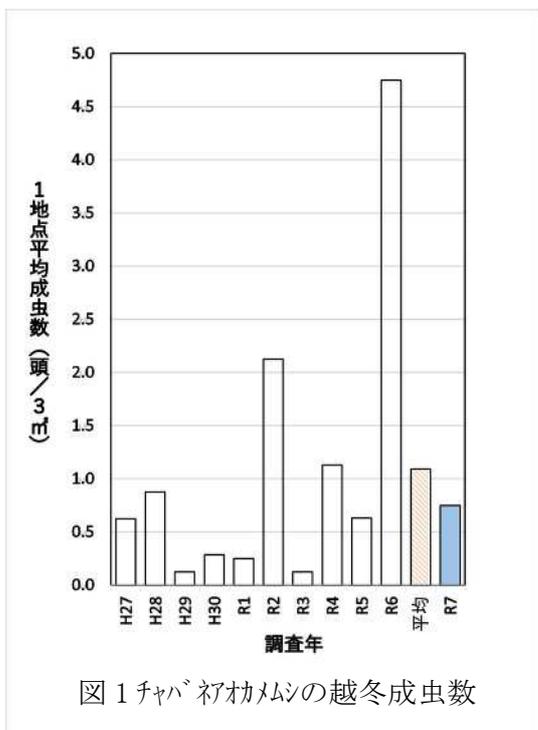


図1 チャバ初カメムシの越冬成虫数

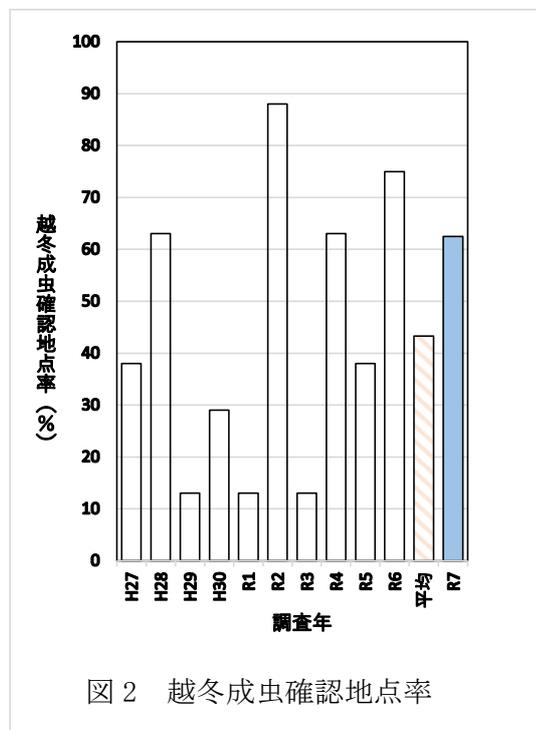


図2 越冬成虫確認地点率

○生態と被害

・チャバネアオカメムシ

体長10~12mmで光沢のある緑色で、前翅は紫がかった茶色をしています(図3)。広食性で、4月から夏にかけてはクワ、サクラ、ヒイラギ、キリなどに、夏以降はヒノキ、スギ、キリなどに寄生します。ナシ、モモ、ウメ等多くの果樹を加害しますが、幼虫はスギやヒノキの球果を餌として発育するため、本種は果樹園では増殖しません。



図3 チャバ初カメムシの成虫
(体長10~12ミリメートル)

・被害(果樹カメムシ類共通)

果樹園に飛来し、果実を吸汁します。加害を受けると、吸汁部がくぼんで奇形果になります。収穫直前の被害では、くぼみの程度は軽くなりますが、吸汁部周辺の果肉は白くスポンジ状となり、商品価値が損なわれます(図4)。

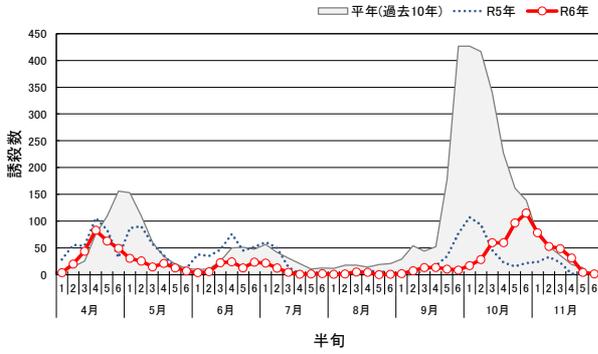


図4 被害を受けたナシの果実とその断面

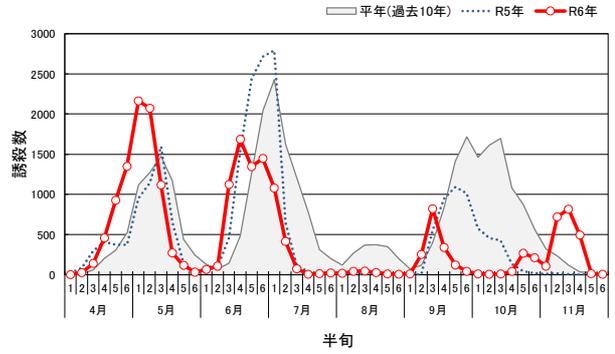
エ 茶

(ア) チャハマキのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:チャ 調査地点:所沢市下富

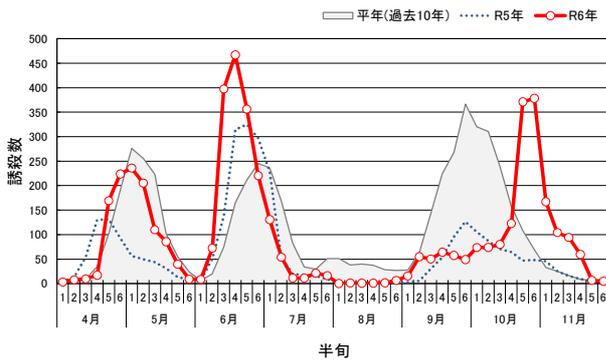


対象作物:チャ 調査地点:入間市根岸

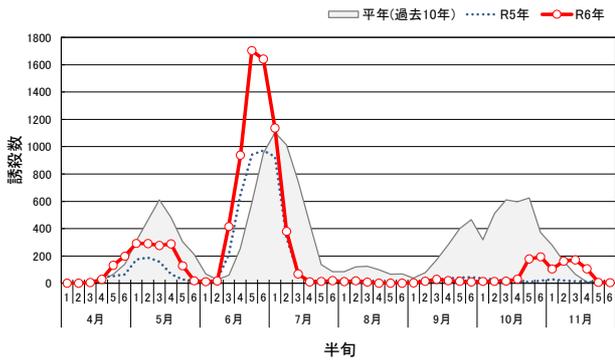


(イ) チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:チャ 調査地点:所沢市下富

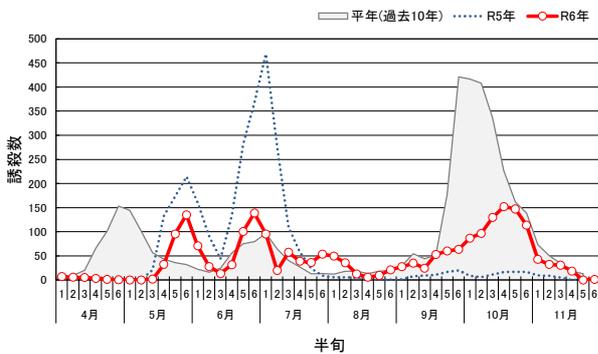


対象作物:チャ 調査地点:入間市根岸

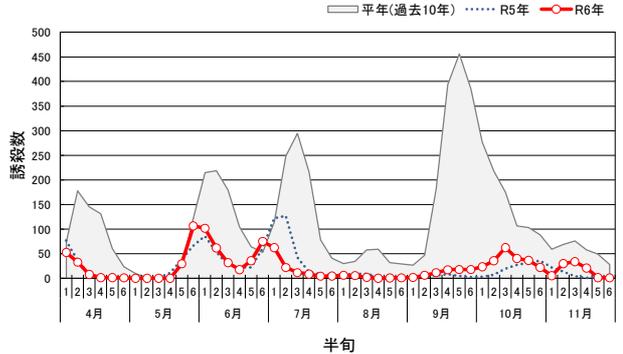


(ウ) チャノホソガのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:チャ 調査地点:所沢市下富

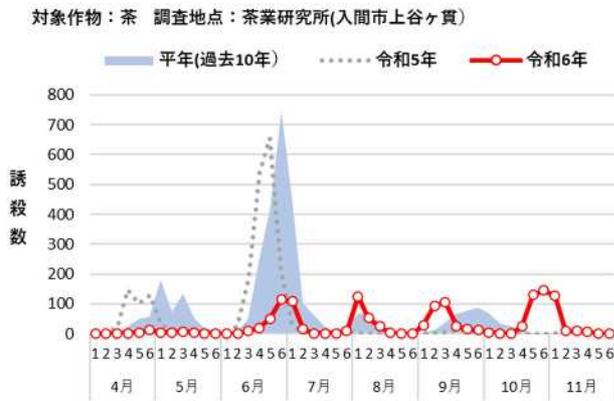


対象作物:チャ 調査地点:入間市根岸

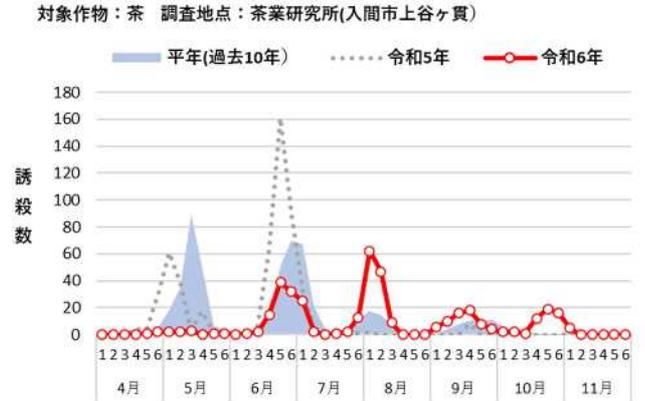


(エ) 茶業研究所のデータ

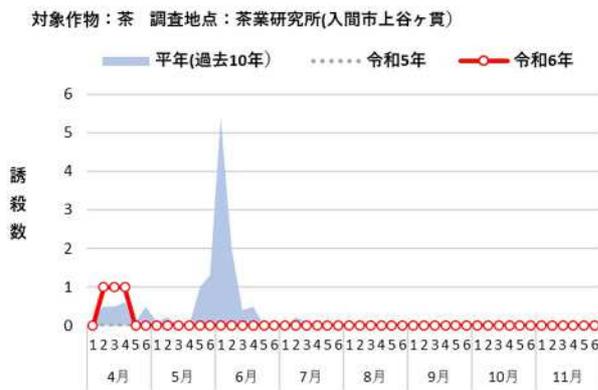
a 予察灯へのチャハマキの誘殺数



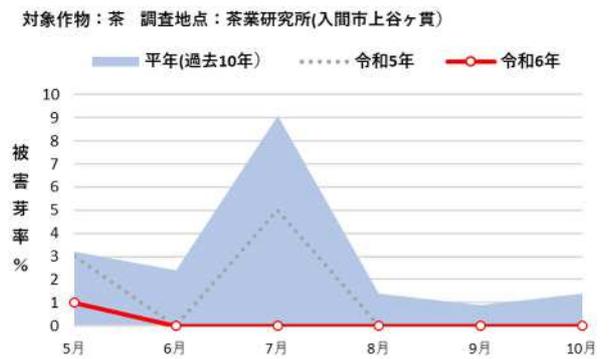
b 予察灯へのチャノコカクモンハマキの誘殺数



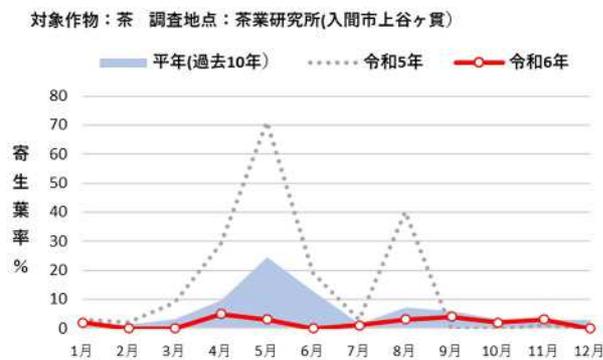
c 予察灯へのチャノホソガの誘殺数



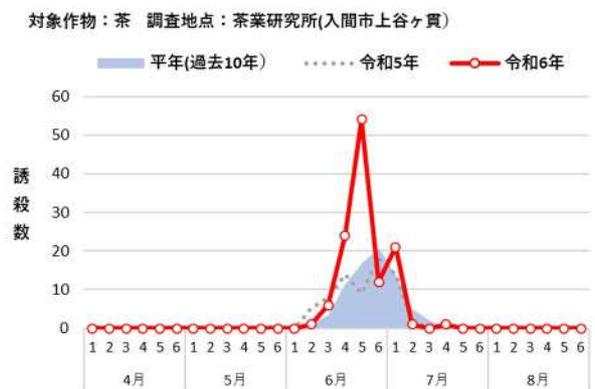
d ツマグロアオカスミカメ被害芽率



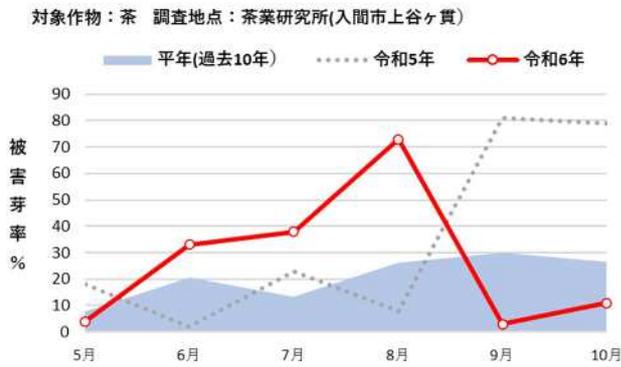
e カンザワハダニの発生推移



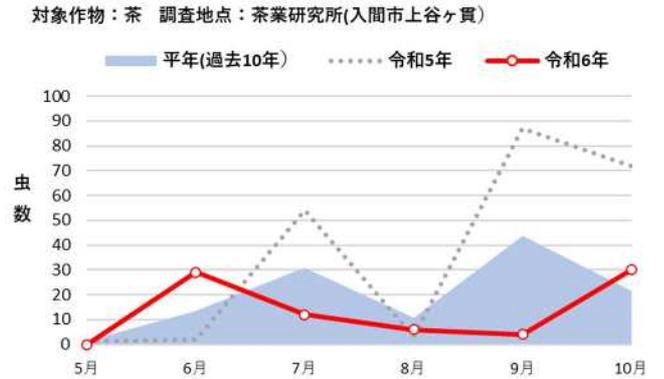
f 予察灯へのナガチャコガネ成虫の発生推移



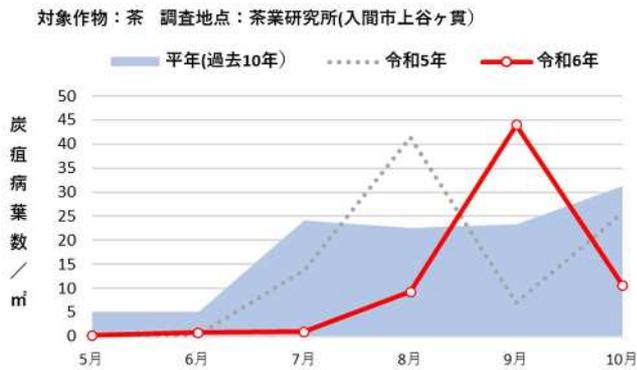
g チャノキイロアザミウマの発生推移



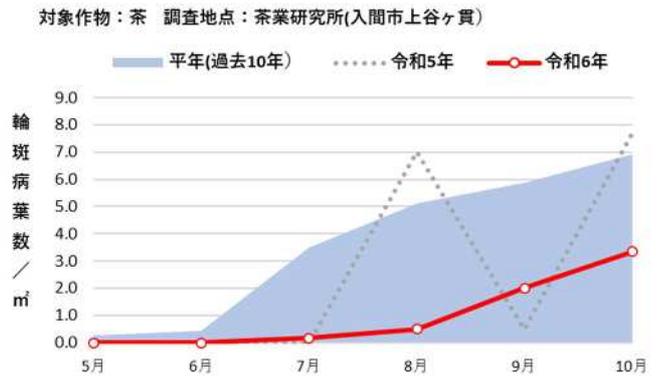
h チャノミドリヒメヨコバイの発生推移



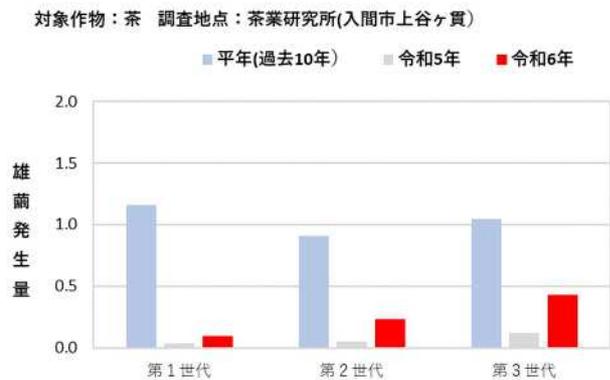
i 炭疽病の発生推移



j 輪斑病の発生推移



k クワシロカイガラムシの発生推移
(30株あたりの平均)



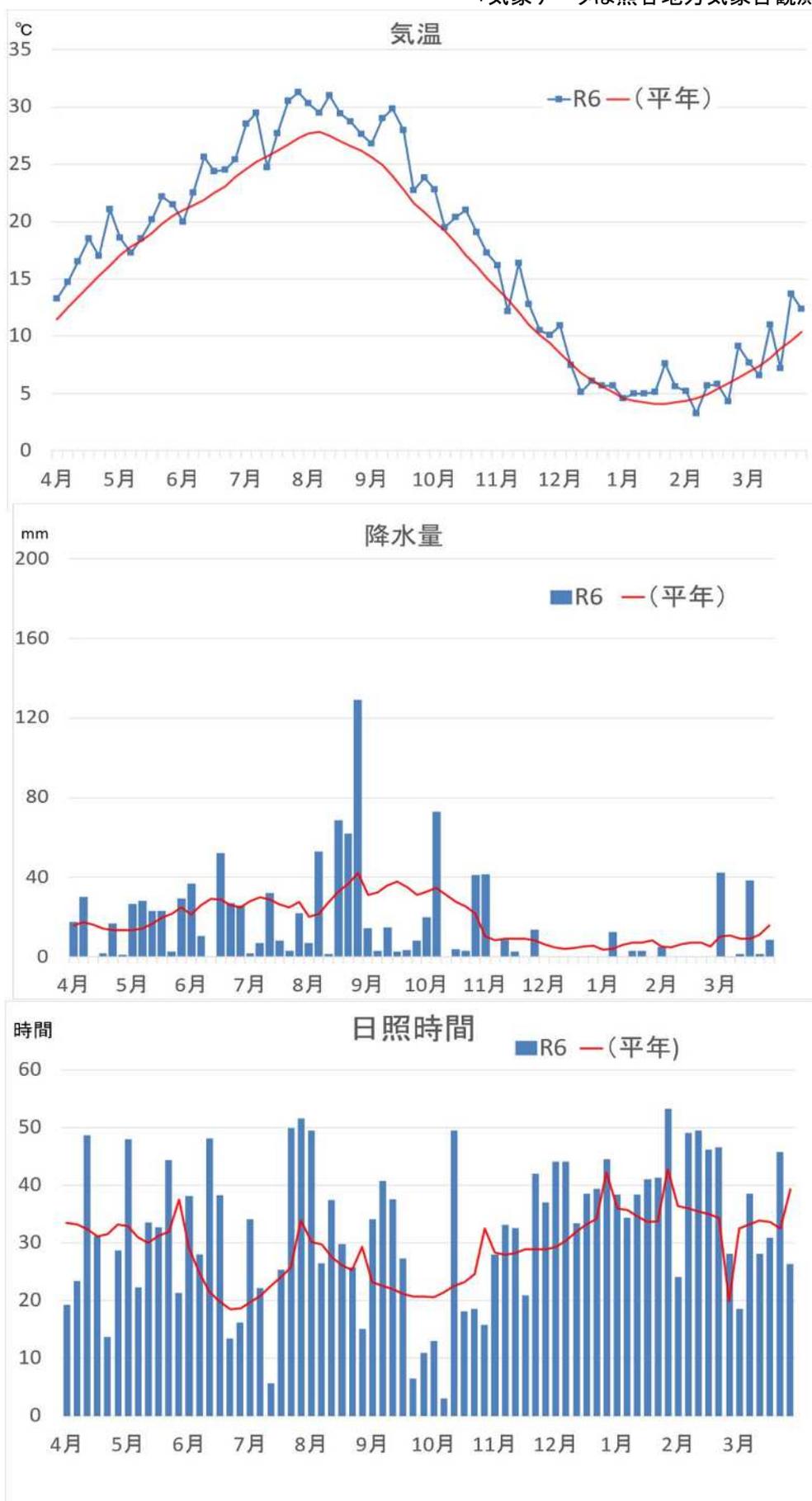
l チャトゲコナジラミの発生推移



(3) その他

ア 令和6年度熊谷の気象データ

*気象データは熊谷地方気象台観測値を使用



ウ 過去の病害虫発生予察警報、注意報、特殊報発表状況

(ア) 警報

月 日	内 容
昭和 58 年 7 月 13 日	イネ縞葉枯病
昭和 59 年 6 月 22 日	イネ縞葉枯病
平成 5 年 8 月 20 日	イネいもち病 (穂いもち病)

(イ) 注意報及び特殊報

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
昭和 54	5. 29	イネ縞葉枯病、黒すじ萎縮病	7. 20	キュウリ黄化病、キクのサビダニ、 チューリップのサビダニ イチゴ炭そ病
	7. 10	ナシのハダニ類		
	8. 8	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ	9. 11	
55	4. 30	チャのサンカクハマキ		
	8. 1	イネいもち病 (穂いもち)		
	9. 9	キュウリ斑点細菌病、べと病、ナス 褐色腐敗病、トマト疫病、ニンジン 黒葉枯病、ネギ黒斑病、さび病、露 地野菜軟腐病		
57	8. 13	イネいもち病 (穂いもち)	3. 4	イチゴ疫病、クリのヨシノコブガ、 シクラメンホコリダニ
			5. 28	イネミズゾウムシ
			6. 1	コムギ条斑病
58	5. 23	イネミズゾウムシ		
	6. 3	イネ縞葉枯病		
59	2. 16	ムギダニ	7. 2	ニンジン斑点細菌病、タマネギ萎黄 病、クワイ茎腐病 シュンギクべと病 キュウリホモプシス根腐病
	4. 13	ムギアカタマバエ	10. 4	
	6. 14	イネ縞葉枯病	12. 21	
60	3. 19	キュウリ、ナス、トマト及びイチゴの 灰色かび病		
	4. 17	ムギアカタマバエ		
	5. 10	イネミズゾウムシ		
	8. 26	ダイコン及びハクサイウイルス病		
	8. 31	セジロウンカ		
61	4. 30	ムギアカタマバエ	1. 17	ニンジン菌核病、ダイコンバーティ シリウム黒点病 チャ輪斑病 ミナミキイロアザミウマ
	5. 12	イネミズゾウムシ	3. 28	
	7. 21	セジロウンカ	7. 9	
	8. 21	ニカメイチュウ第2世代幼虫		
62	5. 7	イネミズゾウムシ	3. 11	レタスビッグベイン病
	5. 11	野菜のアブラムシ類及びウイルス病		
	6. 17	イネ縞葉枯病		
	8. 11	セジロウンカ		
63	5. 10	イネミズゾウムシ		
	8. 19	イネいもち病 (穂いもち)		

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
平成 元	8. 25	イネ白葉枯病	8. 25	イネ白葉枯病
2	5. 8 8. 1	ナシ黒星病 セジロウンカ	5. 8 9. 5	タバココナジラミ ミカンキイロアザミウマ
3	7. 12 8. 7 8. 7	ナシのカメムシ類 ニカメイチュウ第2世代 セジロウンカ	6. 4	カキクダアザミウマ
4	6. 19	ナシ、カンキツ類のカメムシ類	7. 29 12. 8	ヨメナスジハモグリバエ カラシコエのさび病(仮称)
5	3. 9 8. 5	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち、穂いもち)	3. 9	マメハモグリバエ
6	6. 17	イネいもち病(葉いもち)	10. 7	トマトサビダニ
7	7. 21	イネいもち病(葉いもち)		
8	8. 6	ナシのカメムシ類	8. 26 9. 19	シロイチモジヨトウ オオタバコガ
9	7. 7 8. 1	ネギ等のシロイチモジヨトウ ナス等のオオタバコガ	6. 23 8. 1	トマト黄化壊疽ウイルス(TSWV) カボチャ台キュウリ立枯病
10	5. 14 6. 11 9. 30	ナシの疫病、黒星病 ナシのカメムシ類 チャのウスミドリメクラガメ		
11	9. 28	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
12	9. 7	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
13	6. 11 8. 16	ナシのカメムシ類 イネの斑点米カメムシ類	2. 1	イチジク株枯病
14			1. 23 5. 13 9. 17	トマトハモグリバエ アルファルファタコゾウムシ ルイスハダニ
15	8. 13	イネいもち病(穂いもち)	2. 10	インパチェンスえそ斑紋ウイルス (INSV)
16			6. 10	IYSV(Iris yellow spot virus) によるトルコギキョウ及びユーチャ リスの病害
17	6. 9 8. 4	キュウリ黄化えそ病(MYSV) 水稻のフタオビコヤガ	2. 17 5. 19 9. 16	トマト黄化葉巻病(TYLCV) キュウリ黄化えそ病(MYSV) クワシロカイガラムシ
18	6. 2 6. 27 7. 24 8. 2 11. 2	ナシのカメムシ類 イネいもち病(葉いもち、穂いもち) イネいもち病(葉いもち、穂いもち) フタオビコヤガ(イネアオムシ) トマト黄化葉巻病(TYLCV)	4. 11 10. 10 11. 15 12. 5	タバココナジラミバイオタイプQ フタスジヒメハムシによるダイズ被 害 ユリのイチゴセンチュウ クリバネアザミウマ(ミョウガ)
19	3. 27 7. 26 8. 13 9. 20	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち、穂いもち) フタオビコヤガ(イネアオムシ) ハスモンヨトウ	3. 9 7. 26 8. 30 10. 4 11. 5	クロスジコバネアブラムシ(ミョウ ガ) IYSV(Iris yellow spot virus)によ るネギの病害 カキノヒメヨコバイ(カキ) アワダチソウグンバイ(キク科) プラタナスグンバイ(プラタナス)

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
20	4. 7 5. 1 6. 4 10. 2	チャのカンザワハダニ ナシヒメシンクイ ナシ黒星病 チャハマキ	1. 16 3. 25 10. 30	ツマグロヒョウモン幼虫によるパンジー等の被害 クロトンアザミウマ（モントレイトスギ） キュウリ退緑黄化病（CCYV:仮称）
21	5. 1 7. 29	ナシのナシヒメシンクイ イネいもち病（葉いもち、穂いもち）	11. 12	チャのミカントゲコナジラミ
22	6. 11 7. 8 8. 27	ナス、スイートコーンなどのオオタバコガ フタオビコヤガ（イネアオムシ） 野菜類、花き類及びダイズのハスモンヨトウ	2. 9 3. 31 7. 23 12. 21 12. 22	ハウレンソウのハコベハナバエ ブロッコリー菌核病 ウメ輪紋ウイルス（plum pox virus） トルコギキョウ葉巻病 トマトすすかび病
23	7. 20 8. 3	斑点米カメムシ類（アカヒゲホミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホリハリカメムシ、クモハリカメムシ） フタオビコヤガ（イネアオムシ）	7. 26 10. 26 12. 19	クロメンガタスズメによるトマト・ナス等の被害 チャノキイロアザミウマによるナシへの寄生と被害 ムギ類黒節病
24	6. 5	ナシのカメムシ類（チャバネカメムシ、クギカメムシ、ツヤカメムシ）	12. 6 1. 30	ネギ葉枯病菌による黄色斑紋症状の発生について スモモ斑入果病について
25	5. 28 5. 31 7. 19 9. 2	チャノコカクモンハマキ ヒメトビウンカ（イネ縞葉枯病） 斑点米カメムシ類（アカヒゲホミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホリハリカメムシ、クモハリカメムシ他） ヒメトビウンカ（イネ縞葉枯病、イネ黒すじ萎縮病） ツバキ、サザンカ、サカキのチャトゲコナジラミ		
26	4. 1 5. 23 6. 10 6. 30 3. 30	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ） イネ縞葉枯病 ナシのカメムシ類（チャバネカメムシ他） 斑点米カメムシ類 イネ縞葉枯病		
27	7. 9 3. 28	イネいもち病 イネ縞葉枯病	10. 8	ヒサカキワタフキコナジラミによるチャへの被害について
28	7. 27	イネいもち病	6. 28	秋冬ネギ及び春ニンジンに発生したクロバネキノコバエ科の一種（ <i>Bradysia</i> sp.）について
29	7. 3	斑点米カメムシ類（特に、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ）	7. 25 7. 31	ナス黒点根腐病の発生について クビアカツヤカミキリの発生について
30	8. 8 8. 8	野菜類、花き類のオオタバコガ ネギのシロイチモジヨトウ	5. 30 5. 30 6. 7	トビイロシワアリについて オリーブアナアキゾウムシについて トマト黄化病について

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
平成 31 令和 元	4. 23 5. 10 6. 3 7. 8	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ） 茶、チャハマキ ナシ、果樹カメムシ類 茶、チャハマキ	10. 15	ネギハモグリバエの別系統の発生について
2	7. 28 9. 11	イネいもち病（葉いもち、穂いもち） ネギのシロイチモジヨトウ	7. 27 8. 24 10. 13	ミナミアオカメムシの発生について ツマジロクサヨトウの発生について <i>Singapore shinshana</i> (Matsumura) (和名なし) (ヨコバイ科の一種) の発生について
3	7. 7 8. 31	イネいもち病（葉いもち） ネギ、シロイチモジヨトウ	8. 3 10. 29 10. 29	サツマイモ基腐病の発生について サクセスクイムシの発生について ヨツモンカメノコハムシの発生について
4	7. 11 7. 27 7. 27 9. 8 9. 22	ネギ、さび病 野菜類、花き類、オオタバコガ ネギ、シロイチモジヨトウ 野菜類、花き類、大豆 オオタバコガ ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ	10. 21	タバコノミハムシの発生について
5	7. 11 7. 31 8. 15 8. 15 9. 25	野菜類・花き類、オオタバコガ イネ、斑点米カメムシ類 野菜類・花き類・ダイズ、オオタバコガ ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ		
6	4. 15 5. 10 5. 13 5. 20 7. 8 7. 12 8. 8 8. 28	核果類（うめ、すもも等）なし、ナシヒメシンクイ 果樹全般、果樹カメムシ類 野菜類・花き類、オオタバコガ ムギ類赤かび病 イネ斑点米カメムシ類（イネカメムシ、ホソハリカメムシ） 果樹全般、果樹カメムシ類 ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ なし、ナシヒメシンクイ	10. 18 10. 31	トマトキバガの誘殺について チュウゴクアミガサハゴロモの発生について

7 学会・研究会等における成果の公表

(1)日本応用動物昆虫学会

- ・第69回大会（令和7年3月20日～22日：千葉市）
（一般講演）

侵入害虫チュウゴクアミガサハゴロモについて、埼玉県における発生確認および病害虫発生予察特殊報の発表の経緯について説明し、県内における発生地域、県内における農作物被害について述べた。調査の過程で明らかになった本種の加害植物種、産卵習性、予察灯における成虫の発生消長を示し、本種がきわめて広範囲の植物を加害することから農作物に重大な影響を及ぼす可能性についても示唆した。

(2)関東東山病害虫研究会

- ・第71回研究発表会（令和7年3月4日：長野市）
（一般講演）

埼玉県におけるイネカメムシの発生拡大について、予察灯および本田すくい取り虫数を示し、令和5年から令和6年にかけての急拡大を説明。予察灯での誘殺消長から埼玉県において本種は2化性であることを説明、また、出穂時期の異なる水田が近接する地域での発生消長調査結果から、出穂後3週間程度加害し出穂の早い水田から遅い水田へ順次移動することを示した。収穫後の再生株に着生した穂や、イネ科雑草の穂も餌として利用することについても言及した。

(3)その他、病害虫に関する研究会及び検討会

- ・令和6年度「カメムシ類等難防除害虫の発生状況と防除対策に関する検討会」
（令和7年3月13日～14日：東京都北区・対面およびWebによるハイブリッド開催）
（一般講演）

令和6年のイネカメムシ多発生を受け、埼玉県として初めて本格的に取り組んだ越冬調査における知見を報告した。越冬場所として選好されやすい場所の特徴、越冬場所における虫の密度、越冬期間中の生態、これまで知られていなかった行動（土中に潜入、越冬期間中の吸水行動等）について説明を行った。

8 肥料検査の概要

(1) 検査

ア 月別立入検査成績

令和 年.月	立入 事業場 数	収 去 件 数				備 考 (立入事業場の所在地)	
		生産事業場			販 売 事業場		計
		知事 登録	指定 配合	特殊 肥料			
6. 5	4	3		2		5	加須市、神川町、深谷市（2）
6. 7	2			2		2	桶川市、朝霞市
6. 10	3	1		3		4	上尾市、川越市、深谷市
6. 11	3	3				3	朝霞市、横瀬町（2）
計	12	7		7		14	

(注) () 内は立入検査を実施した事業場の数。特記以外は1。

イ 普通肥料の検査

(ア) 検査標品点数及び対象数量

	生産事業場		販売 事業場	備 考
	知事登録肥料	指定混合肥料		
検査標品点数	7	0	0	
不合格点数	0	0	0	
検査対象数量(t)	26	0	0	
保証票検査等に 係る違反点数	0	0	0	

(イ) 分析検査成績

a 種類別検査成績

肥料の種類	検査標品点数	不合格点数	不合格率(%)
なたね油かす及びその粉末	1	0	0
乾燥菌体肥料	3	1	33.3
食品残さ加工肥料	1	0	0
消石灰	2	0	0
計	7	1	14.3%

b 成分別検査成績

検査成分	検査標品点数	不合格点数	不合格率(%)
窒素全量	5	1	20
りん酸全量	4	0	0
加里全量	2	0	0
アルカリ分	2	0	0
カドミウム	3	0	0
その他(油分)	1	0	0
計	17	1	5.9%

(ウ) 重量検査

肥料の種類	検査点数(銘柄数)	不合格点数	不合格率(%)
消石灰	20(2)	0	0
計	20(2)	0	0

ウ 特殊肥料の検査

(ア) 検査標品点数及び対象数量

	生産事業場	備 考
検査標品点数	7	
不合格点数	0	
検査対象数量(t)	44	

(イ) 分析検査成績

a 種類別検査成績

指 定 名	検査標品点数	不合格点数
米ぬか	1	0
堆肥	6	0
計	7	0

b 成分分析調査成績

分析成分	分析成分点数	不合格点数
水分	7	0
窒素全量	7	0
りん酸全量	7	0
加里全量	7	0
石灰全量	7	0
亜鉛全量	7	0
銅全量	7	0
炭素窒素比	7	0
計	56	0

(ウ) 重量検査

肥料の種類	検査点数 (銘柄数)	不合格点数	不合格率 (%)
堆肥	10 (1)	0	0
計	10 (1)	0	0

エ 検査結果の公表 (県報掲載状況)

公表年月日	検査点数 (銘柄数)			不合格点数			保証票 検査等 に係る 違反数
	普通 肥料	指定 混合	特殊 肥料	普通 肥料	指定 混合	特殊 肥料	
R6. 7. 5	0	0	2	0	0	0	0
R6. 7. 23	3	0	0	1	0	0	0
R6. 9. 27	0	0	2	0	0	0	0
R6. 12. 6	0	0	3	0	0	0	0
R7. 2. 4	4	0	0	0	0	0	0
計	7	0	7	1	0	0	0

オ 肥料取締法違反の処分状況

(ア) 告発 該当なし

(イ) 注意等行政指導

- a 当センター検査に係るもの TN保証成分量不足
- b 他の検査機関から依頼されたもの 該当なし
- c 他の検査機関へ依頼したもの 該当なし

(2) 登録及び届出

今年度の知事登録普通肥料の申請及び届出件数は 19 件（前年度比－13）であった。新規登録件数は 3 件（前年度比＋3）であり、肥料登録有効期間延長（更新）申請が 10 件（前年度比－2）であった。書替申請 0 件（前年度比－1）であり、再交付申請 0 件（前年度比±0）、変更等届出が 3 件（前年度比－15）、登録失効届出は 3 件（前年度比＋2）であった。

指定混合肥料の各届出は 6 件（前年度比＋2）であった。

特殊肥料関係の各届出は計 31 件（前年度比－31）であった。

肥料販売関係の届出は、172 件（新規 30・変更 125・廃止 16・その他 1）であった。

令和 7 年 3 月末現在、生産業者数は知事登録普通肥料 34 業者・指定混合肥料 13 業者・特殊肥料 362 業者であり、のべ合計 409 業者となっている。また、肥料の有効銘柄数は、知事登録普通肥料 73 銘柄・指定混合肥料 27 銘柄・特殊肥料 479 銘柄、合計 579 銘柄となっている。

ア 肥料の種類別新規登録件数

肥料の種類	件数
菌体リン酸肥料	1
副産動植物質肥料	1
混合堆肥複合肥料	1
計	3

イ 肥料の種類別登録更新件数

肥料の種類	件数
魚かす粉末	1
乾燥菌体肥料	4
混合有機質肥料	4
食品残さ加工肥料	1
計	10

ウ 肥料の種類別失効件数

肥料の種類	件数
副産動物質肥料	3
計	3

エ 指定混合肥料の新規届出件数

肥料の種類	件数
土壌改良資材入り指定混合肥料	3
計	3

オ 特殊肥料の種類別新規届出件数

肥料の種類	件数
堆肥	9
牛ふん	(3)
家きんふん	(1)
その他	(5)
草木灰	1
混合特殊肥料	1
計	11

カ 知事登録普通肥料の種類別有効登録件数
(令和7年3月31日現在)

肥料の種類	有効登録数	備考	
		R5年度	R4年度
菌体りん酸肥料	1	0	0
魚かす粉末	8	8	8
魚節煮かす	2	2	2
肉かす粉末	1	1	1
なたね油かす及びその粉末	3	3	3
ごま油かす及びその粉末	0	0	0
米ぬか油かす及びその粉末	2	2	3
ひまし油かす及びその粉末	1	1	1
豆腐かす乾燥肥料	1	1	1
加工家きんふん肥料	3	3	3
副産動植物質肥料	1	0	0
副産植物質肥料	2	2	2
乾燥菌体肥料	12	12	12
副産動物質肥料	0	3	3
混合有機質肥料	12	12	12
混合堆肥複合肥料	1	0	0
食品残さ加工肥料	1	1	1
配合肥料	2	2	2
生石灰	3	3	3
消石灰	13	13	13
炭酸カルシウム肥料	3	3	3
副産石灰肥料	1	1	1
計	73	73	74

キ 指定混合肥料の種類別有効届出数
(令和7年3月31日現在)

肥料の種類	届出数
指定配合肥料	22
指定化成肥料	0
特殊肥料入り指定混合肥料	0
土壌改良資材入り指定混合肥料	5
計	27

ク 特殊肥料の指定名別有効届出数
(令和7年3月31日現在)

指定名	届出数
粗砕石灰石	1
米ぬか	5
くず大豆及びその粉末	1
草木灰	6
骨炭粉末	1
動物の排せつ物	14
牛ふん	(1)
豚ふん	(1)
家きんふん	(12)
動物の排せつ物の燃焼灰	3
家きんふん	(3)
堆肥	426
牛ふん	(120)
家きんふん	(47)
豚ふん	(45)
生ごみ	(47)
樹皮	(4)
その他(馬ふん)	(5)
その他(草木質系(樹皮以外))	(65)
その他	(93)
発泡消火剤製造かす	3
貝殻肥料	5
貝化石粉末	1
カルシウム肥料	7
混合特殊肥料	6
計	479

ケ 各種申請・届出の処理状況

申請・届出の種類	件数	備考
肥料登録申請	3	アのとおり
肥料登録有効期間更新申請	10	イのとおり
肥料登録事項変更届	3	代表者 3
肥料登録証書替交付申請	0	
肥料登録証再交付申請	0	
肥料登録失効届	3	ウのとおり
指定混合肥料生産業者届	3	土壌改良資材入り指定混合肥料
指定混合肥料生産業者届出事項変更届	3	代表者
指定混合肥料生産事業廃止届	0	
特殊肥料生産業者届	11	オのとおり（法人 9、個人 2）
特殊肥料生産業者届出事項変更届	10	代表者 4、住所 3、その他 3
特殊肥料生産事業廃止届	10	堆肥（法人 4、個人 6）
肥料販売業務開始届	30	法人 18、個人 12
肥料販売業務開始届出事項変更届	125	事業所 101、代表者 21、その他 3
肥料販売業務廃止届	16	法人 9、個人 7
その他の届出	1	肥料販売届出受理の証明
計	228	

※件数は、申請書、届出書の件数

コ 肥料生産業者及び販売業者数（令和 7 年 3 月 31 日現在）

区 分	業者数	有効銘柄数等	
生産業者	普通肥料生産業者	34	73
	指定混合肥料生産業者	13	27
	特殊肥料生産業者	362	479
	計	409	579
販売業者	農協系	20	（うち生産を兼ねるもの 0）
	商 系	1,277	（ ” 380）
	計	1,297	—

(3) 調査事業等

肥料行政の推進や肥料の安定供給に必要な肥料の生産・流通の現状を把握するため、肥料流通実態調査事業による肥料の生産量の調査を行った。流通量調査については令和5年を最後に実施を取りやめている。

ア 肥料生産量調査

(ア) 目的

埼玉県知事登録及び届出肥料の生産量の実態を把握する。

(イ) 調査方法

埼玉県知事登録のある普通肥料生産業者と埼玉県知事に届出をした指定混合肥料生産業者及び特殊肥料生産業者を対象として、令和6年1月から令和6年12月までの肥料生産量の調査を実施した。

対象とした肥料生産業者数及び肥料の銘柄数は以下のとおり。

業者の種類	業者数	対象となる肥料の銘柄数
知事登録普通肥料生産業者	33	72
知事届出指定混合肥料生産業者	13	23
特殊肥料生産業者	299	403

(ウ) 調査結果の概要

令和6年の知事登録肥料および知事届出の指定混合肥料の生産量は、21,175トン（対前年比144%）で前年より大きく増加した。乾燥菌体肥料（同115%）、米ぬか油かす及びその粉末（同102%）の生産はあまり伸びなかったが、未利用のりん酸肥料として国が菌体りん酸肥料をリン酸の肥料成分を保証し、他の肥料と混合できる原料として位置づけたため、いち早く県内に菌体りん酸肥料の生産が行われ、増加した。逆に、生石灰（同58%）、副産石灰肥料（同65%）等は減少した（表1）。

特殊肥料の生産量は90,109.6トン（同114%）肥料高騰の影響を受け増加した。生産量の多くを占める堆肥が88,269.9トン（同115%）とその利用率が高くなったと思われる。堆肥の種類では、牛ふん堆肥（同100%）、豚ふん堆肥（同111%）、家きんふん堆肥（同109%）いずれも前年度と同等かそれ以上となった（表2）。

表1 埼玉県知事登録及び届出の普通肥料生産量

肥料の種類	生産量(トン)			令和5年払出量(トン)			調査対象登録
	令和6年(トン)	令和5年(トン)	対前年比(%)	国内向製品(トン)	原料用(トン)	その他(トン)	
菌体りん酸肥料	7,178.5	0.0	-	0.0	7,158.5	20.0	1 [1]
魚かす粉末	5.5	6.4	86%	5.5	0.0	0.0	8 [1]
魚節煮かす	6.1	11.1	55%	6.1	0.0	0.0	2 [1]
肉かす粉末	0.0	0.0	-	0.0	0.0	0.0	1 []
食品残さ加工肥料	5.0	5.0	100%	1.0	0.0	4.0	1 [1]
豆腐かすの乾燥肥料	0.0	0.2	0%	0.0	0.0	0.0	1 []
なたね油かす及びその粉末	1,008.0	1,351.0	75%	710.0	375.0	130.0	3 [2]
米ぬか油かす及びその粉末	5,607.0	5,511.0	102%	3,392.0	2,215.0	367.0	2 [2]
ひまし油かす及びその粉末	58.1	11.0	528%	40.5	0.0	41.2	1 [1]
加工家きんふん肥料	0.0	0.0	-	0.0	0.0	0.0	3 []
副産植物質肥料	0.0	0.0	-	0.0	0.0	0.0	2 []
乾燥菌体肥料	3,020.5	2,615.7	115%	390.9	2,624.6	405.0	12 [6]
混合有機質肥料	388.0	334.0	116%	3.0	378.5	16.5	12 [6]
混合堆肥複合肥料	0.0	0.0	-	0.0	0.0	0.0	1 []
配合肥料	2.4	2.6	92%	0.0	2.4	0.0	2 [2]
生石灰	61.0	105.0	58%	61.0	0.0	0.0	3 [2]
消石灰	2970.0	3,688.0	81%	2,765.0	0.0	220.0	13 [9]
炭酸カルシウム肥料	538.0	626.0	86%	537.0	0.0	0.0	3 [1]
副産石灰肥料	282.2	436.0	65%	358.2	0.0	55.0	1 [1]
指定混合肥料	44.5	37.1	120%	38.5	11.2	0.0	23 [5]
(指定配合)	(44.5)	(37.1)	(120%)	(38.5)	(11.2)	(0.0)	(23 [5])
計	21,174.8	14,740.0	144%	8,308.7	12,765.2	1,258.7	95 [41]

注) 1 普通肥料の生産量には、飼料用・工業用等のその他の区分のものは含めていない。

2 生産量と払出量の差は在庫や昨年生産品の出荷である。

3 生産量・払出量は肥料の種類ごとに四捨五入しているので、種類ごとの総和が、計に合わないことがある。

表2 埼玉県知事届出の特殊肥料生産量

特殊肥料の種類	令和6年 (トン)	令和5年 (トン)	対前年比 (%)	調査対象 有効届出数 [生産実績あったもの]
米ぬか	504.6	854.4	59%	5[4]
くず大豆及びその粉末	1.8	0	-	1[0]
草木灰	98.0	64.0	153%	5[1]
骨炭粉末	0.0	0	-	1[0]
動物の排せつ物	1209.2	1113.2	109%	13[7]
(牛ふん)	(2.0)	(2.0)	(100%)	(1[1])
(豚ふん)	(0.0)	(0.0)	(-)	(1[0])
(家きんふん)	(1207.2)	1111.2	109%	(11[6])
動物の排せつ物の燃焼灰	15.9	15.6	102%	2[2]
(家きんふん)	(15.9)	(15.6)	(102%)	(2[2])
堆肥	88269.9	76871.4	115%	360[159]
(樹皮堆肥)	(0.0)	(0.0)	(-)	(3[0])
(牛ふん堆肥)	(32914.2)	(27441.9)	(100%)	(104[50])
(豚ふん堆肥)	(6827.0)	(6156.0)	(111%)	(40[14])
(家きんふん堆肥)	(17893.3)	(12467.0)	(109%)	(33[19])
(生ごみ堆肥)	(2456)	(2490)	(99%)	(38[14])
(その他の堆肥)	(28179)	(28316)	(100%)	(142[62])
発泡消火剤製造かす	0	0	-	1[0]
貝化石粉末	0	0	-	1[0]
カルシウム肥料	3.4	3.2	108%	7[3]
粗砕石灰石	0	1	0%	1[0]
混合特殊肥料	6.8	41	17%	6[1]
計	90109.6	78963.7	114%	403[206]

- 注) 1 特殊肥料の生産量には、飼料用・工業用等のその他の区分のものは含めていない。
2 特殊肥料の堆肥の中の区分は、それぞれ全体の50%を占める原料により便宜的に区分けした。
3 生産量は特殊肥料の種類ごとに四捨五入しているので、種類ごとの総和や対前年比の値が、見たい上、合わないことがある。

イ 肥料流通量調査(～令和 4 肥料年度)

(ア) 目的

埼玉県内における化学肥料、有機質肥料等の流通量を把握し、効率的な立入検査の実施や、需要に応じた肥料の生産指導等に活用するため実施していたが、令和 4 肥料年度を最後に流通量調査を取りやめている。

(イ) 調査方法

埼玉県知事に届出のある肥料販売業者のうち、全肥商連・埼玉県部会の会員（卸売業者）から 25 件、県内の肥料メーカーから 12 件、J A全農さいたま、ホームセンター等（量販店）、ネット販売業者から 49 件を選定し、令和 4 肥料年度（令和 4 年 7 月～令和 5 年 6 月）における肥料販売量について調査を実施したのを最後に現在、調査は実施していない（表 3）。

表3 埼玉県内の肥料販売量の推移

(取り扱い実数、単位：トン)

年 度 肥料の種類等	26肥年	27肥年	28肥年	29肥年	30肥年	R元肥年	R2肥年	R3肥年	R4肥年	R4/R3比 %
硫 安	392	379	391	372	249	194	236	283	239	84.5
尿 素	187	225	237	50	151	148	175	239	64	26.9
塩 安	47	46	49	1	43	37	52	50	53	105.4
硝 安	3	1	2	162	2	1	2	0	0	—
石灰窒素	857	948	1,354	832	980	630	894	1,089	523	48.0
その他窒素肥料	103	160	90	76	37	76	67	101	76	75.2
窒素肥料合計	1,590	1,759	2,123	1,493	1,462	1,086	1,426	1,761	955	54.2
過りん酸石灰	242	215	185	136	138	116	115	115	72	62.7
重過りん酸石灰	40	36	30	25	18	19	21	23	12	53.7
熔成りん肥	21	22	550	484	375	402	480	412	255	61.9
加工りん酸肥料	38	28	10	1	1	1	1	12	6	49.4
その他りん酸肥料	137	128	176	43	142	134	91	133	129	96.6
りん酸肥料合計	973	940	951	689	674	672	709	695	474	68.2
塩化加里	28	28	28	29	22	12	18	19	13	70.9
硫酸加里	44	31	36	25	25	27	41	10	26	263.4
その他加里肥料	221	258	255	285	333	323	382	357	289	81.0
加里肥料合計	294	317	319	339	380	362	440	386	329	85.2
高度化成肥料 (内 有機入り)	17,316 (901)	15,815 (1,016)	19,103 (1,625)	16,101 (1,309)	15,496 (984)	15,766 (1,083)	15,810 (1,408)	16,252 (979)	12,826 (507)	78.9 51.8
普通化成肥料 (内 有機入り)	6,039 (2,462)	5,715 (2,093)	6,670 (2,719)	5,650 (2,401)	5,437 (2,083)	5,214 (2,222)	5,925 (991)	5,487 (3,463)	3,484 (1,845)	63.5 53.3
NK化成肥料	827	699	1,141	414	1,171	874	587	671	716	106.8
配合肥料 (内 有機入り)	6,236 (4,757)	6,013 (4,768)	7,287 (5,473)	6,672 (4,911)	6,790 (4,744)	7,103 (4,828)	7,386 (4,950)	7,342 (4,920)	5,894 (3,828)	80.3 77.8
(内 粒状配合肥料)	(85)	(35)	(111)	(106)	(298)	(425)	(346)	(277)	(63)	22.7
その他複合肥料 (緩効性肥料)	1,243 (5,930)	894 (5,840)	1,176 (5,948)	1,303 (6,131)	842 (6,594)	764 (6,691)	1,141 (6,960)	854 (8,420)	582 (6,846)	68.1 81.3
複合肥料合計	31,661	29,136	35,377	30,140	29,736	29,721	30,849	30,606	23,501	76.8
生石灰	1,022	1,052	1,092	1,042	1,018	1,007	945	964	794	82.3
消石灰	1,946	2,044	2,501	2,072	1,826	1,816	1,574	1,721	1,287	74.8
炭酸カルシウム	5,543	5,621	7,476	6,149	5,856	5,584	5,843	5,697	3,491	61.3
副産石灰肥料	380	398	391	138	134	162	488	808	451	55.8
混合石灰肥料	290	273	257	242	181	191	181	71	63	89.3
貝化石肥料	447	566	797	766	8,205	667	587	383	333	87.0
けい酸質肥料	1,369	1,303	1,653	1,502	1,605	1,637	1,869	1,398	1,387	99.2
その他石灰質肥料	933	930	301	220	75	297	244	295	242	81.9
石灰質肥料合計	11,931	12,187	14,468	12,131	18,900	11,361	11,731	11,337	8,047	71.0
植物油かす (内 なたね油かす)	870 (849)	835 (818)	908 (812)	876 (629)	696 (686)	773 (569)	1,634 (925)	752 (741)	297 (293)	39.5 39.5
魚粉類	46	51	50	41	35	39	37	38	34	89.3
骨粉類	23	23	132	135	76	79	76	70	62	87.9
その他有機質肥料	334	269	67	96	413	391	340	2,085	305	14.6
有機質肥料合計	1,277	1,178	1,157	1,148	1,220	1,282	2,087	2,945	697	23.7
苦土肥料	180	298	200	308	296	245	185	247	178	72.1
マンガン肥料	0	0	3	1	2	1	1	1	1	98.3
おおい肥料	61	51	8,837	8,860	8,874	94	1,695	43	44	101.7
たい肥	14,117	15,882	18,163	18,806	9,923	17,020	42,842	17,813	9,644	54.1
動物の排せつ物	232	67	1,628	308	25	274	18	22	0	0.0
その他特殊肥料	2,310	2,473	3,389	2,323	1,397	2,032	162	137	25	18.2
特殊肥料合計	16,884	18,910	23,180	21,437	11,345	19,326	43,023	17,973	9,669	53.8
肥料実数総計	64,853	64,778	86,615	76,546	72,889	64,150	92,146	65,994	43,895	66.5

(4) 畜政推進事業

畜産安全課の依頼により、特殊肥料の生産届出を促進する目的で、各家畜保健衛生所より推薦された農家の堆肥成分を分析し、結果を報告した。令和6年度は10件の分析を行った(表4)。

表4 令和6年度堆肥分析結果

農家	畜種等	分析項目	窒素全量	リン酸全量	加里全量	銅全量	亜鉛全量	石灰全量	炭素窒素比	電気伝導度 (dS/m)	水分含有量 (%)
		区分	(%)	(%)	(%)	(mg/kg)	(mg/kg)	(%)			
A	採卵鶏	現物当たり	1.6	2.9	1.2	36.2	220.9	10.8	7	7.2	16.3
		乾物当たり	2.0	3.5	1.4	43.3	263.9	12.9		—	—
B	乳用牛	現物当たり	1.9	0.7	2.8	17.2	87.4	1.5	17	6.7	30.5
		乾物当たり	2.7	1.1	4.0	24.7	125.7	2.2		—	—
C	豚	現物当たり	2.8	4.0	2.0	88.0	852.6	4.1	11	5.0	15.8
		乾物当たり	3.3	4.7	2.3	104.5	1012.2	4.9		—	—
D	採卵鶏	現物当たり	1.6	4.3	3.3	28.3	303.2	19.3	11	7.6	18.4
		乾物当たり	2.0	5.3	4.0	34.6	371.3	23.6		—	—
E	豚	現物当たり	3.9	5.6	2.1	118.7	607.9	5.4	9	6.3	13.2
		乾物当たり	4.5	6.4	2.4	136.8	700.2	6.3		—	—
F	豚	現物当たり	1.5	1.2	0.4	38.6	118.4	0.5	15	3.1	44.7
		乾物当たり	2.8	2.2	0.7	69.7	214.1	0.9		—	—
G	肉用牛	現物当たり	1.9	3.0	3.4	19.9	124.6	1.4	15	8.6	30.7
		乾物当たり	2.7	4.3	4.9	28.7	179.6	2.1		—	—
H	肉用牛	現物当たり	1.9	3.1	3.2	21.4	139.5	1.5	15	8.7	30.7
		乾物当たり	2.8	4.4	4.7	30.9	201.3	2.2		—	—
I	肉用牛	現物当たり	1.5	1.9	2.7	12.7	78.6	1.0	17	7.8	39.9
		乾物当たり	2.4	3.1	4.4	21.1	130.8	1.7		—	—
J	肉用牛	現物当たり	2.3	4.4	4.7	23.6	179.5	2.5	11	10.1	28.4
		乾物当たり	3.2	6.2	6.5	32.9	250.9	3.5		—	—

9 飼料検査の概要

(1) 検査

「飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律」に基づき、飼料の安全性の確保及び品質の保全と公正な飼料の取引の確保を図り、公共の安全確保と畜産物生産の安定に資するため、飼料の製造・販売事業場等に立入り、検査指導を行った。立入検査は延べ5回、収去飼料点数は15点であった。収去した飼料は栄養成分及び安全性等の分析検査を行った。

その結果、栄養成分検査及び安全性検査いずれも正常であった。

ア 月別飼料検査状況総括表

項目 年月	収去飼料件数							
	規格適合飼料		小計	非規格適合飼料			小計	合計
	配・混 合飼料	動物性 蛋白質 飼料		配・混 合飼料	動物性 蛋白質 飼料	単 体 飼 料		
R6. 6				9			9	9
R6. 7						1	1	1
R6. 11						5	5	5
合計				9		6	15	15

イ 立入検査状況

立入検査場所	検査対象 箇所数	立入検査 箇所数	収去 件数	収去件数の内訳		
				配混合飼料	単体飼料	牧草類
承認配合飼料工場	0					
その他の配混合飼料工場	36	2	9	9		
単体飼料工場	89	2	3		3	
飼料添加物工場	10					
飼料中継保管施設	—					
飼料輸入業者	13					
飼料添加物輸入業者	9					
飼料販売業者	168	1	3			3
飼料添加物販売業者	28					
運送業者	—					
その他の場所	—					
計	353	5	15	9	3	3

注) 1 承認配合飼料工場は、関税込率法第13条第1項に基づいて税関長の承認を受けた配合飼料工場（混合飼料のみを製造する工場を除く）とする。

2 立入検査箇所数は、延べ（立入回数）とする。

ウ 立入検査成績

区分	立入検査箇所数 a	指摘事項		指摘事項内容										計 c	現地指導一箇所当たり c/b		
		箇所数 b	割合 b/a	法第2章関係						規格適合飼料	法第32条表示	製造業者届	その他				
				成分規格	製造の基準	保存の基準	使用の基準	表示の基準	特定飼料等							製造管理者	
承認配合飼料工場																0	0
その他の配混合飼料工場	2	0	0													0	0
単体飼料工場	2	0	0													0	0
飼料添加物工場																	
飼料中継保管施設																	
飼料輸入業者																	
飼料添加物輸入業者																	
飼料販売事業場	1	0	0													0	0
飼料添加物販売事業場																	
運送業者																	
その他の場所																	
計	5	0	0													0	0

- 注) 1 承認配合飼料工場は、関税定率法第13条第1項に基づいて税関長の承認を受けた配合飼料工場(混合飼料のみを製造する工場を除く)とする。
 2 一般表示事項欄には、飼料等の名称、種類、製造年月、製造業者の氏名又は名称及び住所、製造事業場の名称及び所在地について指導した件数を記載する。
 3 製造管理者の届出事項に関する指導件数は、製造管理者欄に記載する。
 4 立入検査箇所数は、延べ(立入回数)とする。

エ 収去飼料の試験成績

区分	収去件数	正常なもの		正常でないもの		法第23条関係			法第32条関係				正常でないものの処置(件数)				
		件数	%割合	件数	%割合	試験件数	正常でないもの		試験件数	正常でないもの			行政指導	指示	行政処分	告発	備考
							件数	%割合		成分量件数	原材料件数	計					
		合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	
配混合飼料	9	9	100	0	0	9	0	0	9	0	0	0	0				
単体飼料	3	3	100	0	0	3	0	0	3	0	0	0	0				
牧草類	3	3	100	0	0	3	0	0	3	0	0	0	0				
計	15	15	100	0	0	15	0	0	15	0	0	0	0				

注) 正常でないものの処置は、現地指導で終了したものは除く。また、当該都道府県が行ったもの(他から依頼されたものを含む)を記載し、他都道府県へ処置を依頼したものは含まない

オ 重量検査実施状況

製造業種別区分	検査 (A)			重量不足 (B)						(B) / (A) × 100			
	工場数	銘柄数	個数	工場数	配・混合飼料		動物性蛋白質飼料		単体飼料		工場数 %	銘柄数 %	個数 %
					銘柄数	個数	銘柄数	個数	銘柄数	個数			
配混合飼料工場	1	1	10								0	0	0
動物性蛋白質飼料工場	0	0	0								0	0	0
単体飼料工場	0	0	0								0	0	0
計	1	1	10								0	0	0

カ 現地指導及び行政指導内容

- (ア) 当所で検査、指導したもの 該当なし
 (イ) 他所等の依頼で指導したもの 該当なし
 (ウ) 他所等へ指導を依頼したもの 該当なし

キ 栄養成分に関する公表

公表年月日	規格適合飼料			非規格適合飼料			合計		
	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数
R6.9.20 R7.2.7	0	0	0	10 5	10 5	0	10 5	10 5	0
計	0	0	0	15	15	0	15	15	0

ク 安全性に関する公表

公表年月日	規格適合飼料			非規格適合飼料			合計		
	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数
R6.9.20 R7.2.7	0	0	0	9 5	9 5	0	9 5	9 5	0
計	0	0	0	14	14	0	14	14	0

(2) 調査事業

飼料安全性確保強化対策事業の一環として、自家配合飼料を製造している農家を対象に製品の品質調査及び安全性検査を行った。

表1の農家を対象に、自家配合飼料3点、魚粉1点、混合発酵飼料1点の栄養成分に関する分析調査を実施した。

また、安全性検査としてカドミウム、鉛、及びヒ素の分析を行ったところ、すべての飼料において適正範囲内であった。

表1 令和6年度自家配合飼料品質調査 調査対象農家の概要

農家	畜種	経営形態	飼養規模
A	鶏	養鶏	採卵鶏 1413羽
B	鶏	養鶏	採卵鶏 500羽
C	乳牛	酪農経営	搾乳牛 54頭

表2 飼料安全性確保強化対策事業 飼料の分析結果（現物値）

調査農家		粗蛋白	粗脂肪	カルシウム	りん	粗繊維	粗灰分	水分	カドミウム	鉛	ヒ素	亜鉛	銅	鉄	マンガン
		%	%	%	%	%	%	%	(mg/kg)						
A	自家配合飼料	14.4	5.1	0.4	0.8	2.8	4.7	17.5	0.13	0.08	0.55	53.2	3.9	149.6	65.3
	魚粉	55.1	8.1	3.0	3.3	0.2	19.1	9.3	1.08	0.77	2.62	123.2	6.2	487.1	16.3
	混合発酵飼料	9.6	1.8	0.3	0.4	2.1	3.5	16.7	0.01	0.31	0.08	32.1	3.2	122.7	40.1
B	自家配合飼料	10.9	3.0	2.5	0.4	2.7	8.7	38.5	0.06	0.11	0.92	26.2	3.5	254.8	30.3
C	自家配合飼料	5.0	1.2	0.2	0.1	6.9	2.9	62.6	0.02	0.09	0.06	9.7	2.3	544.1	11.3



埼玉県のマスコット

コバトン